

江戸幕府の米蔵（一）

飯 島 千 秋

はじめに

一 関東の御蔵

（一）浅草・本所御蔵

（Ⅰ）御蔵の支配・管理

（Ⅱ）御蔵米の納渡

（Ⅲ）江戸の囲米・囲粳

（二）浅草・本所以外の江戸の御蔵

（三）小菅納屋（小菅御蔵、小菅御粳蔵）

（四）今市御蔵

（五）その他の御蔵

（Ⅰ）浦賀御蔵と下田御蔵

（Ⅱ）神奈川・藤沢・三島・蒲原御蔵

二 畿内および畿内周辺の御蔵

（一）大坂城御蔵

三 各地の御蔵

（Ⅰ）大坂蔵奉行

（Ⅱ）大坂御蔵米の内訳・性格

（二）難波・天王寺御蔵

（三）二条御蔵

（Ⅰ）二条御蔵と二条蔵奉行

（Ⅱ）二条御蔵米の内訳・性格

（四）大津御蔵

（五）高槻御蔵

（六）その他の御蔵

（Ⅰ）伏見御蔵と淀御蔵

（Ⅱ）永原御蔵と水口御蔵

（以上本号、以下次号）

- (一) 駿府御蔵
 - (二) 甲府御蔵
 - (三) 長崎御蔵
 - (四) 佐渡御蔵
 - (五) 清水御蔵
 - (六) 熱田、笠松御蔵
 - (七) 高山・古川御蔵
- おわりに

はじめに

江戸幕府が管理した御蔵(米蔵)は、浅草御蔵や大坂御蔵、二条御蔵、大津御蔵が代表的なものであるが、それ以外にも各地に置かれた。延享二年(一七四五)の幕府勘定所諸掛り勤方記録の中では、このほか竹橋御蔵、本所御蔵、駿府御蔵、駿州清水御蔵、甲府御蔵、今市御蔵、尾州熱田御蔵、笠松御蔵、難波御蔵、長崎瀬崎御蔵などの名があげられている。⁽¹⁾江戸や大坂・京都など重要拠点に設置された御蔵は、一般に御蔵奉行が置かれて管理されたが、地方の御蔵は代官によって支配・管理されることが多かった。また、全国各地に置かれた代官所には年貢米収納や貯穀のための御蔵(米蔵)があり、農村内にも年貢米を保管する御蔵(御蔵屋敷ともよばれる)があった。

年貢米は、近世初頭には軍事米・兵糧米としての機能を担っていた。しかし、臨戦体制が緩和され、幕府財政機構の整備と年貢米の財源化の動きが進行するにつれて、江戸幕府が管理した御蔵の機能・役割も変化していったのである。また、そうした中で廃止された御蔵もあった。

本稿では、各地に置かれた御蔵の管理・運営の実態、およびそれぞれの御蔵の収納状況や機能・役割などを明らかにすることを課題とする。具体的には、各御蔵の管理体制の変遷や年貢米の収納・支出の様態、城詰米や囲米・囲糶の実態などについて考察を加える。なお、ここで分析対象とする御蔵の範囲は、(一)御蔵奉行が置かれて管理されたもの、(二)幕府勘定所史料などに記載される御蔵で、かつ重要度が高いと考えられるもの、(三)寛永十年(一六三三)に、譜代の諸大名居城や直轄諸城に一定量の非常用米を備蓄する「城詰米制」が成立するが、同様に非常用米・糶の保管(詰米・詰糶)が命じられたもの、以上に限定しておきたい。⁽²⁾

一 関東の御蔵

(一) 浅草・本所御蔵

(I) 御蔵の支配・管理

浅草御蔵は、元和六年(一六二〇)に建てられた。「靈餘一得」には、「浅草御蔵地三万九千八十八坪、御蔵五十四棟二百七十戸前、御蔵奉行御役宅二所各二百坪」とあるが、⁽³⁾これは寛政年中の建て増し以降天保期頃までの数値であり、天明期までは五一棟二五八戸前、寛政期以降天保期までが五四棟二七〇戸前、弘化期にさらに建て増しされて六七棟三五四戸前となったといわれる。⁽⁴⁾「文政町方書上」などでは、御蔵用地の整備は伊奈半左衛門の掛りで進められ、鳥越村の小山の土が大川端(隅田川端)の埋め立てに使用されたと記す。⁽⁵⁾また、丹沢山の材木や敷石も切り出されて御蔵が建造された。⁽⁶⁾「御蔵旧例書」によると、文政期頃には、御蔵総構地坪三万九〇八八坪、御蔵総建坪は八〇六〇坪、総構練塀延長四八七間一尺で、御蔵役所(一五二坪余)、御蔵奉行役宅二カ所(各二〇〇坪余)、道具置所、御普請方小屋

場、証文蔵、御膳糶挽場、納方詰所、御蔵番長屋二棟（建坪一六八坪余）、小揚長屋（建坪一〇二二坪余）などの付属建物があつた。また、構内への出入りは上ノ門・中ノ門・下ノ門の三カ所の門から行われ、それぞれに番所が置かれた。さらに、船による米の搬出入のために敷地内には八本の堀割があり（一番堀から八番堀まで、幅は九間半から一四間で長さは四七間から九九間）、堀の入り口には水門八カ所（同番所八カ所）があつた。⁽⁷⁾

浅草御蔵の支配・管理にあたつた浅草蔵奉行以下の諸役人、および慶安・承応期の浅草御蔵収支状況については大野瑞男氏が分析を加えているので、⁽⁸⁾以下それをまとめておこう。

浅草御蔵に収納された米は初期には蔵米と城米とに区別されており、御蔵奉行と城米奉行とが置かれていた。「吏徴別録」では、浅草の御蔵奉行は寛永十三年に初めて三人が任ぜられとされるが、頭注に「慶長十五年十月十一日の古券に松風助右衛門・紅林弥右衛門の名みゆ」とあり、また、慶長十五年（二六一〇）および同十七年の金地院扶持米受取の宛名も松風助右衛門・紅林弥右衛門となつてゐることなどから、御蔵奉行の設置はこれより遡る可能性がある。

秋鹿家文書の元和五年分勘定目録には、同六年九月江戸城米渡として松風助右衛門・紅林弥右衛門・松下善市（善市郎之勝）の名が記される。松風・紅林は御蔵奉行であるが、松下は大番と推定される（初期には御蔵奉行の半数が大番出役であつた）。また、同じく秋鹿家文書勘定目録によれば、寛永十八年以前は御蔵奉行の人数は四人であつたが、同十九年五月に江戸御蔵衆が「私曲」によつて処罰される事件があり、同年五月二十二日には久留七郎左衛門（正親）・山田彦左衛門（正清）・大久保七兵衛（正重）・田辺清右衛門（安直）・小宮山清四郎（安次）・久保田小兵衛（通正）の六人が城米・浅草御蔵当座奉行を命じられた。また、同年八月十八日に大番より二人ずつ、小十人組より四人ずつが、それぞれ浅草方御蔵奉行と城米方御蔵奉行に任ぜられて、この時点で合わせて一二人となつた。その後は江戸期をつうじて八人〜一二人の間で増減があつたが、貞享四年（一六八七）に御蔵奉行の半数の五人が御勘定から任命されて、以後

は役方からも就任するようになる。御蔵奉行創置以来貞享期まで御蔵奉行が大番の出役であったことは、浅草御蔵の本来の機能が兵糧米の貯蔵であつて軍事的性格が強いことを意味しており、貞享期以後に財政経済的性格が濃くなつていく。

御蔵奉行の支配下には、御蔵手代（ほかに助手代・手代見習）・門番・御蔵番・小揚（小揚頭・平小揚・杖突）などがいた。御蔵手代は、「吏徴別録」で、寛文五年（一六六五）に初めて二四人が置かれたとするが、寛永十八年の江戸御蔵衆の「私曲」に関わる処罰者のなかに城米方手代六人・蔵方手代三人が含まれているので、創設はもっと遡ることになる。御蔵手代の人数は、寛文九年には三二人となり、その後漸増して宝永二年（一七〇五）には五四人にまで増加する（このうちから元禄二年（一六八九）に御蔵手代組頭四人を置き、宝暦四年（一七五四）に七人となった。助手代は、享保十年（一七二五）初めて五人を置き、同十六年一〇人、元文五年（一七四〇）一九人、宝暦十三年二一人と増員された。御蔵手代見習は、文政四年（一八二二）に六人が置かれた。また、御蔵手代の分課は、御蔵借・書上掛・小買物掛・御普請方掛・御勘定懸・御廻米掛・手本米掛・手形掛となっていた。門番（門番同心）は、享保十年に初めて一五人が置かれ、明和三年（一七六六）には新規に頭取三人が任命された。門番人数は、寛政三年（一七九二）に一七人となり、文化五年（一八〇八）には門番同心見習二人が置かれた（天保十年（一八三九）に四人となる）。御蔵番は、元禄十一年にそれまでの一人から三人増加し、以後漸増して明和五年に三〇人となった。小揚は、寛文五年の時点で小揚頭一〇人、杖突二〇人、平小揚二八〇人の合計三二〇人であった。その後、元禄二年には合計二五〇人となり、さらに寛政二年には小揚頭一八人、杖突二七人、平小揚一九九人で合計二四四人となった。

ここで、浅草蔵奉行および御蔵の支配・管理に関する事柄に関して、大野氏の考察に少し補足・追加をしておきたい。浅草蔵奉行は、勘定奉行支配で、役料は二〇〇俵、役宅が浅草御蔵構外に二軒（二カ所、一カ所地坪二〇〇坪余宛、

表1 浅草蔵奉行支配の蔵役人人数・給金扶持方（文政末年頃）

御蔵奉行支配蔵役人	給金扶持方
御蔵手代 定人数 54人 内 組頭 7人 掛役手代 27人 平手代 20人 御蔵助手代 定人数 21人	給金10両 3人扶持ずつ 役金5両ずつ、掛扶持4人扶持ずつ 掛扶持3人扶持ずつ 出扶持1人扶持ずつ 5人扶持ずつ、ほか出扶持5合ずつ
門番 定人数 15人 内 頭取 3人 門番見習 一	高15俵1人扶持、雑用金5両ずつ (掛扶持) 1人扶持ずつ 2人扶持ずつ
御蔵番 人数 30人 内 肝煎 3人	高10俵1人扶持、雑用金4両ずつ 1人扶持ずつ
小揚 定人数 244人 内 小揚頭 18人 杖突 27人 平小揚 199人	高5両2人扶持ずつ } 高3両1人半扶持ずつ

(註) 「御蔵旧例書」により作成。御蔵番は高扶持とも高下あり。「吏徴別録」下巻では、文政4年に御蔵手代見習6人(1人扶持ずつ支給)を置いたとあり、また、御蔵門番頭取は20俵2人扶持高とある。さらに、文化5年に置かれた門番見習2人(天保10年2人増員)には2人扶持・雑用金2両と記される(『続々群書類従』第七・法制部、117・122・123頁)。

本家建坪五八坪余宛、ほかに長屋・土蔵・本所御蔵構内に五軒(五カ所、一カ所地坪三〇〇坪余宛、本家六四坪余宛、ほかに長屋)があつた。⁽⁹⁾ 浅草御蔵は宝暦四年八月に三仕切りに分けられ、上・中・下三役所が置かれた(二役所を新設)。この

ため御蔵奉行二人・御蔵手代組頭三人が増員された。しかし、納払手続きの煩雑さが原因であろうか、同六年五月には廃止され、従来通り一カ所の役所となつた(御蔵奉行も二人を減員⁽¹⁰⁾)。また、天明八年(一七八八)十二月に、浅草蔵奉行の就任期間が一応五カ年と定められ、出精の者はさらに五カ年の延長が認められることになつた(任期制の導入⁽¹¹⁾)。さらに、御蔵奉行組頭二人が享保九年閏四月朔日に置かれた。最初に御蔵奉行組頭となつたのは辻覚左衛門(守輝)と牛田甚太郎(頼安)であり、辻は十人組頭から、牛田は浅草蔵奉行よりの役替であつた。しかし、元文四年

十月二十日堀内源右衛門（安但）と山本源兵衛（正識）が「咎めかうぶりて」御役御免となって以後、同役は廃止された。⁽¹²⁾ ちなみに御蔵奉行組頭の役高は五〇〇石高であった。⁽¹³⁾ なお、表1は、「御蔵旧例書」から、文政末年頃の浅草蔵奉行の支配蔵役人をまとめたものである。御蔵手代・門番・御蔵番・小揚等で三六四人が定員数であったことがわかる。その他、御蔵の毎月の扶持方渡り日は六日・十二日・十八日であり（十二月は二日と九日、御金渡り日は朔日・十日・十八日・二十四日）、御蔵役所の諸経費に相当する「御蔵小買物御入用金」は、明和七年までは年七五〇両であったが、同八年には四五〇両、文化八年九月より三〇〇両、同九年正月より二五〇両余と減少した。同十四年四月に二七六両と微増するが、文政元年七月には再び儉約が命じられ二六六両となり、天保十四年十二月以降は二三六両と再び減少に転じた。その後は、文久元年（一八六一）に三五一両二分・銀一一匁余、同二年が三九一両三分三朱・銀三匁、同三年は四二三両三分二朱・銀二分六厘四毛と急増する。⁽¹⁴⁾ これは幕末期の政治的緊張の高揚にともなって米の納渡が頻繁となったことと関係があらう（買上米・買戻米の実行や、拝借米や各種手当米の支給など）。

浅草御蔵の支配・管理に関しては、享保十九年九月に「浅草御蔵役人勤方納米改方等之定書」六一カ条が制定され、浅草蔵奉行以下支配向役人の勤方概要が決められた（当時は御蔵奉行組頭が置かれていたので、御蔵奉行組頭の勤方も定められている）。また、その後、明和四年十月に勝手掛老中松平右近将監（武元）から浅草蔵奉行に対し勤方事項などが申し渡されている。⁽¹⁵⁾ 以下、「浅草御蔵役人勤方納米改方等之定書」から、御蔵管理に関する条項で重要と思われるものを列举しておこう（出納手続きに関するものは除く）。（a）御蔵奉行組頭・御蔵奉行は、毎日五ツ半時に御蔵へ出役する。また、御蔵奉行は一人ずつ泊番を勤めるものとする。（b）御蔵の門は暮六ツ時に閉鎖し、鍵は御蔵役所で保管する。入堀水門は、御蔵納払が済んだ後は御蔵手代小頭一人・御蔵手代一人が回って閉め、鍵は吟味役所で保管する。（c）火の用心に心がけること（竹橋御蔵も同様）。（d）御蔵戸前封印は御蔵奉行組頭および御蔵奉行のうち一人が両判で下

封を行い、上封は大番出役の御蔵奉行一人が封印をする。(e) 御蔵手代・御蔵番・小揚の者は音物礼物を取り依怙鼻肩することのなきよう心がけること。一方、明和四年十月の申渡の中では、(a) については、朝五ツ半時出勤(酷暑の節は六ツ時)と月番御蔵奉行の終日役所勤務、時々の御蔵庭見回りとなっている。また、御蔵奉行の泊番も引き続き行われており、「泊御蔵奉行并御蔵手代組頭・同手代・御蔵番等夜中御蔵庭不時ニ見廻り可申候」とある。(b) については、門の閉鎖刻限については触れず、御蔵構内に住居してきた御蔵番二〇人を御囲外の明地に長屋を建てて引き移らせる(これまでの住居は取り払い)。また、八カ所水門際に番所を一軒ずつ建てて、昼間は御蔵番一人ずつ、夜中は兩人ずつが詰めるとしている。さらに、(d) については、「納払之節、出役御蔵奉行御蔵封印見届候上切之、若御蔵内猥ニ致置候儀有之候ハ、前封之もの江申談、右躰之儀無之様可申合候事」とあって、封印の解除を大番出役の御蔵奉行が行ったことがわかる。しかし、封印に際して下封・上封が行われたかどうかははっきりしない。

なお、享保十九年には本所御蔵が完成するが、以後本所御蔵も浅草蔵奉行以下の蔵役人が支配することになった(本所御蔵のほか竹橋御蔵も浅草蔵奉行以下の蔵役人の管理するところであったが、竹橋御蔵については後述)。本所御蔵の管理については、御蔵奉行の役宅は置かれたが御蔵奉行の泊番・詰番はなく、年貢米の納入期には御蔵手代組頭一人・同手代兩人が泊番を行った。また、本所御蔵構内には御蔵手代(人数不明)・御蔵番(三〜四人)が居住していた。明和四年の浅草蔵奉行への申渡には、「本所御蔵詰米之儀、渡方見合詰置、是迄本所御蔵詰高之分成丈浅草御蔵江相納候様可致事」とあって、この時期本所御蔵には必要量のみが搬入されたことがわかる。

ここで、浅草蔵奉行の支配ではなく、勘定奉行の支配ではあったが、浅草御蔵の機能と密接な関係にある切米手形改役(切手書替役、書替奉行)についても触れておく。「吏徴」などでは、寛永十九年八月に切米手形の裏判を押す切米

手形改役二人が新設されたとする（役料二〇〇俵⁽¹⁶⁾）。一人は定役で勘定由比（油井）平兵衛（光運・光勝）で、もう一人は大番出役の竹本猪右衛門（正時）であった⁽¹⁷⁾。しかし、寛永十九年六・七月の江戸御蔵衆「私曲」による処罰者の中に「米契裏書役」高野喜三郎の名があり、さらに『徳川実記』などには大久保藤三郎（正栄）が寛永三年に切手書替役となったとあるので、寛永三年まで遡ることができる。切米手形改役手代（書替手代）が置かれた始まりは不明であるが、延宝二年（一六七四）には二人増して一〇人（五人ずつ二組か）、宝永二年に十二人（六人ずつ二組）、正徳四年（一七一四）に一八人（九人ずつ二組）となった⁽¹⁹⁾。

本所御蔵は、享保十九年十二月に建てられた。同年五月に本所にあった材木蔵が上地され、その跡地四万四〇〇〇坪（うち二万四〇〇坪は入堀）が作事方増田友八郎・同城戸貞四郎へ引き渡された。そして、同月勝手方老中松平乗邑より作事奉行小菅因幡守（正親）に対し御蔵建造着工が命じられて、十二月には完成したのである。御蔵建坪二二七五坪、御蔵棟数一二棟（八八戸前）で最大収容量は二七万三〇〇〇俵（二〇万一〇〇〇石余）であった⁽²⁰⁾。「蠹余一得」では、享保十九年の御蔵創建時の規模について述べ、さらに「本所御蔵地三万坪程、御蔵二十一棟百五十戸前、御蔵奉行役宅五所、各三百坪」と記すが、これは文化期から天保期頃の様子と考えられる。元文期以降、本所御蔵は寛政八年と享和元年（一八〇一）の少なくとも二回にわたって建て増しされており（前者の新規普請での棟数は不明、後者の新規普請では六棟）、御蔵総建坪は三八二五坪、一五〇戸前のうち四八戸前は東向、三四戸前は南向、七戸前は西向、六一戸前は北向となっていた⁽²²⁾。なお、御蔵は、弘化四年（一八四七）に三棟、嘉永二年（一八四九）に五棟、安政六年（一八五九）に四棟がそれぞれ新規建増、安政四年には御蔵新規建継が行われたことなどが確認でき、幕末期には、敷地総坪数の約三万坪や役所（一カ所）・御蔵奉行役宅（五カ所）などは変わらないものの、御蔵建坪は六三一〇坪、御蔵棟数三七棟

(二四六戸前)に拡大したのであった。⁽²³⁾

(II) 御蔵米の納渡

「正保三年戌亥慶安元年子丑寅卯承応元年辰浅草御蔵御勘定帳」(『竹橋餘筆』収載)は、慶安四年(二六五一)から承応二年(一六五三)まで三カ年の渡勘定にたてた米・荳・大豆について、正保三年(一六四六)から承応元年まで七カ年にわたって年次別・納人ごとの納米・荳・大豆量を記したものである。大野瑞男氏は、この慶安四年から承応二年に至る浅草御蔵収支決算帳の分析から以下の諸点が明らかとなったとする(表2参照)⁽²⁴⁾。(一) 関東米・大坂米・播州米のように国・地方で一括されていて納人が明記されない年がある。しかし、それを除くと納人が記され、それによって納米の大部分が年貢米であったことがわかる(大坂米は大坂蔵奉行、小豆島米が大坂町奉行・大坂御船手が納人)、(二) 納米(四九万八五四一石余)の約六五%を関東地域が占め、関東以外の納米比率は小さい、(三) この期に幕領が存在する一八の諸国からの納入記載がないが、これは二条・大坂・大津をはじめとする諸米蔵、あるいは在地の郡代・代官・奉行らの米蔵に納められ、そこで渡勘定や地払勘定されているか、あるいは石代納されたためではないか、(四) 渡勘定の過半は切米であり(二八万二三六二石余)、扶持方渡(五万一九九六石余)とあわせると全体の三分の二を占める。したがって、浅草御蔵の最大の機能が幕臣団への俸給支給であったことがわかる、(五) 切米はこの時期二季渡であり、承応元年から張紙値段での支給が始まったことが確認できる、(六) 他の年次と比較して切米渡指数が約半分という年もあるが、これはこの勘定帳が「中勘定」(代官勘定において、元禄期頃までは去年を「中勘定」、去々年を「皆済勘定」仕上げとしていた)に基づくものであった可能性を示している。

表2 慶安～承応2年浅草御蔵納勘定

			(正保3年～承応元年) 合 計	比 率
大坂米	播州米	備中米	53,029.5696石	10.51%
美濃米	小豆	嶋米	43,659.4169	8.65
伊勢米	勢州米	米	10,030.842	1.99
甲州米	州米	米	4,052.434	0.80
駿州米	州米	米	1,954.423	0.39
遠州米	州米	米	9,584.05	1.90
三州米	州米	米	3,570	0.71
関東米	州米	米	2,424.339	0.48
	州米	米	1,314.24	0.26
	州米	米	2,331.74	0.46
	東米	米	321,658.2233	63.73
			* 44,932.064	8.90
合 計	米		498,541.3418	98.77
	荏		1,782.828	0.35
	大豆		4,433.143	0.88
	比 率		504,757.3128	100.00

(註) 大野瑞男『江戸幕府財政史論』77頁所収の表の一部を転載。

*印は、承応元年切米のうち金子渡払分。

いは石代納されたのではないか、としている。確かに佐渡国や近江国・山城国などの幕領年貢米は佐渡御蔵、大津御蔵、二条御蔵などに納められたことが予想されよう。しかし、たとえば、元和五年以降幕領となった摂津国西成郡十八条村の年貢免状によると、この浅草御蔵納払帳簿に含まれているとされる慶安三年・同四年に「江戸廻り米」(江戸廻米)がなされているのである(正保元年にも「江戸廻り米」があった⁽²⁵⁾)。したがって、「中勘定」あるいは浅草御蔵納払帳に記載されていないことを理由に、摂津国からの廻米がなかったと理解するのは誤りであり、十八条村の「江戸

大野氏の分析は、一七世紀半ばにおける浅草御蔵の機能を明らかにした貴重なものであるが、一点だけ疑問を呈しておこう。それは、(三)に関するものである。氏は、この期に幕領の存在する国のうち出羽をはじめ佐渡・越後・越前・信濃・近江・山城・大和・摂津・河内・和泉など合計一八カ国の納勘定が記載されていないことについて、これらの米は二条・大坂・大津をはじめとする諸米蔵、あるいは在地の郡代・代官・奉行らの米蔵に納められ、そこで渡勘定や地払勘定されているか、ある

廻り米」はつぎの二通りのいずれかで処理されたと考えられる。(一)は、大坂蔵奉行が納人となった「大坂米」として浅草御蔵に納められている場合。これについては、河内国志紀郡小山村(寛永十六年以降幕領)の場合、寛永十七・十八年の「小山村次郎兵衛組卯之御年貢米納払之覚」・「同辰之御年貢米納払之覚」に、「大坂詰江戸廻(り)」とある例が参考になろう。⁽²⁶⁾(二)は、江戸廻米は行われたが、浅草御蔵には詰められなかった場合である。後述するように、

「濃州辰年納井卯ノ年古米江戸下御勘定目録」によれば、美濃郡代岡田将監(善政)蔵入地・預所からの承応元年納米・慶安四年古米の江戸御蔵詰分は一万一四八四石があり、このうち谷之御蔵へは五八三〇石三斗二升四合が、雉子橋御蔵へは四五〇四石三斗三合(うち三九九石八合は古米分)がそれぞれ納入されたのであった。⁽²⁷⁾元禄・宝永期以前にあつては、江戸の米蔵を考える場合、浅草御蔵のみを過大評価することは危険であり、雉子橋御蔵・谷之御蔵など他の江戸御蔵とあわせて考えることの必要性を示しているものといえよう。

元文期になると、江戸の御米蔵は、浅草・本所の両御蔵と竹橋御蔵、浜御蔵の四つとなった。このうち竹橋・浜御蔵は、囲米・囲用米の米・粃蔵としての役割を担っていくと考えられる。これに対し、浅草・本所御蔵は、全国幕領からの年貢米を収納するとともに、幕臣団への切米扶持方支給を行うことを最大の役割とする、まさに幕府の御米蔵であつた。

表3は、天保十三年「浅草本所御蔵元払取調書」により作成したものである。ここに示された数値は、寛政元年から同五年まで、文化十年から同十四年まで、天保八年から同十二年までのそれぞれ五カ年の平均高である。なお、天保八年から同十二年の場合については納高の平均内訳が判明しており、年貢米四三万五一五三石余・囲米二万二一八〇石余(この粃四万四三六一石余)、大津払米代金納分として米九〇二九石余(金一万二一六五兩余)の合計四六万六三六二石余となっていた。表からは、浅草・本所御蔵では毎年四〇万石から四三万石程の渡米があり、毎年それをやや上

表3 浅草・本所御蔵納渡高

内 容	年 次	寛政1～5年	文化10～14年	天保8～12年
納 方 合 計		—	—	466,362石余
渡 方 内 訳				
三季切米役料		257,307石余	248,314石余	280,210石余
定扶持方		72,939	78,031	79,687
役扶持・御用野扶持		6,735	7,515	9,539
奥方合力、比丘尼衆・総女中切米扶持方		4,923	24,825	6,514
御守殿住居合力		—	129	656
田安一位殿合力米		—	8,750	4,375
仏供料・施行米		2,486	2,671	3,999
遠国へ被遣候者合力扶持方		1,235	3,019	3,476
賄方渡		52,043	17,530	18,925
作事方扶持		3,875	5,458	5,997
代官へ被下候扶持方		5,991	4,788	4,556
猿楽扶持		2,903	3,461	3,309
寄場人足扶持・牢舎扶持		918	727	1,219
欠米		3,734	1,673	2,465
小払		243	381	1,347
臨時口々払		1,777	2,359	1,741
渡 方 合 計		417,109	409,631	428,015

(註) 天保13年「浅草本所御蔵元払取調書」(「戊申雜綴」、『誠斎雜記』東京大学史料編纂所蔵)により作成。文化10年～14年渡方合計は原史料では409,694石となっている。

回るほどの年貢米を中心とした納米があったとみることができよう。支出の内容において、三季切米役料が各期それぞれ全体の六〇・六〇・六五・五%を占め、これに各種扶持方、合力米を加えると八五・五〇・九四%に達している。時期別では、寛政初年は賄方渡が五万石をこえて支出され、文化末年には奥方合力・比丘尼女中切米扶持方渡が多く、天保末年には三季切米役料がやや増加している、などの傾向がみとれるが、支出全体を大きく

く左右するといったものではない。寛政期以降天保期までは、飢饉などがあつた例外的な年を除いて浅草・本所御蔵の納渡の構造はほとんど変化がなかったといえよう。

浅草御蔵には、米が収納されたことは勿論のことであるが、米以外に銭や板類・銅類も貯蔵された。銭については、寛政三年長谷川平蔵掛りで買い上げた真鍮銭六二四三貫八七二文（金九一〇両余）や浦賀奉行からの過料銭納（寛政八年開始、文化元年より代金納）があつたが、その後両国橋架替えや粃挽入用、窮民救済などに使用して、文政期頃には銭の貯蔵がなくなった。⁽²⁸⁾銅類の貯蔵は幕末期まで続いており、天保十四年の「浅草御蔵御貯有高并古銅吹所有高」・「御有銅書付」によると、⁽²⁹⁾地丁銅三万九五四貫一四六匁余をはじめ減金古銅一三三貫七五〇目・白味噌銅一一五貫三〇〇目・杓子銅二三貫七七匁余・黄黒味噌銅一一貫六〇〇目などがあり、銅吹所には古銅およそ九五二五貫八〇目があつた。

（Ⅲ）江戸の囲米・囲粃

享保十五年六月の「江戸・二条・大坂御除金并御囲米書付」には、「江戸御貯米」として米五万石があつたと記される。⁽³⁰⁾以前は「江戸御貯米」はなかったが、享保二年より始められ、当初は米一一万三〇〇〇石余が貯米された。しかし、同十年からは米五万石になった。そして、この米は年々新米と詰め替え、古米は渡方にまわされて使用された。江戸での貯米は、將軍家膝元での「不時の備え」としたものであつたと考えられる。また、延享二年の「御勝手方御用定」に、「米四万四千六百石、本所御蔵詰米、是ハ元文三年被仰渡御年貢米之内詰置年々詰替、古米ハ御遣方ニ罷成候」とあつて、⁽³¹⁾元文三年から米四万四六〇〇石が詰米されたことがわかる。前述の江戸貯米は、おそらく享保飢饉の際に使用されるなどして在庫がなくなり、元文三年に新たに貯米・囲米が始まったのであろう。この時本所御蔵に

詰められた米は、幕末期には「江戸定式御囲米」とよばれており、文久二年の「御金銀米有高書付」によって、⁽³²⁾同元年十二月晦日時点で粳一三七一石余・御膳粳二二三五石があったことが判明する。また、そこには「江戸定式御囲米」について、「是者、前々御囲米高四万四千六百石御備有之候処、寛政二戌年より五ヶ年ニ割合関東筋村々御年貢米之内を以粳ニ引替候様被仰渡、年送新粳ニ引替、古粳者摺立、定式御遣方ニ差加申候」と記され、寛政二年から関東筋年貢米で粳詰に変更されたこともわかる。なお、この「江戸定式御囲米」が幕末期においても本所御蔵に詰められていたかどうかは定かでない。

一方、延享元年末からは、「江戸定式御囲米」とは別の江戸「御貯米」が新たに開始された。延享二年には米四万石があったが、内訳は前年暮れに「大坂新規御囲米」(七万七五〇〇石)のうちから浅草御蔵に移送した三万五〇〇〇石と不時入用米の五〇〇〇石であった。⁽³³⁾この新規の江戸「御貯米」も年々新米と詰め替えられ、古米は遣方として使用されたのである。この延享元年開始の江戸「御貯米」の延長上にあるものなのか、あるいはまた別のものなのかはわからないが、幕末期に「江戸御囲粳」とよばれた貯粳があった。「江戸御囲粳」は、文久元年十二月晦日時点で粳一三万四四八五石余(このほか「小菅御囲粳」二三万七二四九石余、「大坂表御買上粳」一万六七八一石余・「越後国御買上粳」二万八二二石余)があった。⁽³⁴⁾一方、万延二年(一八六一)二月「東都御囲粳有高書付」からは、同元年十二月晦日時点で、本所御蔵に粳一二万七〇八三石余、浜御蔵に粳一万六九二九石余、浅草御蔵に大坂・越後御買上粳四万二〇六九石余、小菅納屋に粳二七万五九七八石余が御囲されていたことが判明する。⁽³⁵⁾そして、この二つの史料から、「江戸御囲粳」とは、本所・浜御蔵の御囲の呼称ではなかったかと推測されるのである。なお、天保十四年「御囲粳大豆有高」では、「浅草・本所・浜御蔵」に粳一四万四八〇〇石余の御囲があったとし、「元高拾六万石」(粳高)とある。⁽³⁶⁾「江戸御囲粳」

は、本所・浜御蔵に浅草御蔵を加えた江戸御蔵の囲糶の総称としても使われることがあったものと思われる。

さらに、文政十二年までは「江戸臨時御囲米」というものもあった。これは、天明六年に失脚した田沼主殿頭（意次）所領上知（同六・七年）および同八年に失脚した伏見奉行小堀和泉守（政方）所領上知にともなう収納米を、寛政元年に囲米とするよう命じられたことから始まった。寛政二年以降囲米された米三万一〇〇〇余石は年々新米に引き替えられ、古米は遣方にまわされて使用されたが、文化二年より順次糶詰となった（糶六万石余）。文化十四年に糶一万九四〇〇石余、文政九年に糶三万石余、同十二年に残糶一万石余が摺り立てられ、遣方に加えられて使用されたが、以後詰め戻しされなかったことから消滅したのである。³⁷この「江戸臨時御囲米」の貯蔵場所も不明であるが、浅草・本所・浜三カ所の御蔵のいずれか（あるいはこのうちの複数カ所）であつたと思われる。

以上、浅草・本所御蔵の概要をみてきたのであるが、ここで幕府御蔵としての両御蔵の最期についても触れておこう。慶応四年（一八六八）正月～同閏四月迄「米金納払御勘定帳」によれば、慶応四年正月時点での幕府御蔵有米が五万六二九石余・粳一七万一八三三石余・大豆一八六石余であり、慶応三・四年分年貢米として同四年閏四月までに米六万二六九八石余・粳一七二石余・菜種一二石余が納められたとされる。³⁸慶応四年正月以降、西国から東国に向かつて幕領の没収が進行していることから、この年貢米のほとんどは浅草・本所御蔵納分であつたとみてよいであろう。

また、「摺立米」四万三九四石余も納められたが、これは本所御蔵あるいは小菅納屋の貯蔵糶摺り立てと考えられる。そして、慶応四年閏四月迄の繰越米・粳を含めた納米合計は米一五万六二二三三石余・粳一七万二〇〇六石余・大豆一八六石余・菜種一二石余となっていた。一方、渡方米は、切米七万三六五一石余、役扶持・定扶持二万八九六七石余などがあり、この二つで支出全体の七八％を占めた。また、閏四月二十九日時点での繰越米は米二万四四四二石余・粳一万二三七九石余があつた。

大総督府は、同年五月十六日に福岡藩兵に命じて浅草御蔵を封印させた。そして、これをうけて、同日徳川家達は同御蔵守衛の兵隊を青梅村に退去・謹慎させたのであった。⁽³⁹⁾ 封印は五月二十三日一旦解かれ、六月十九日には浅草・本所・浜御蔵を江戸鎮台府が収めたが、⁽⁴⁰⁾ その後再び封印されたようであり、御蔵奉行は八月七日に封印を付け替えている。その際、浅草・本所御蔵の在庫米・粳高が調査されたが、それによれば浅草御蔵には佐州米四五六六俵(五斗入)、武州・野州・上州・房州米一万四三六八俵半(三斗七升入)、甲州米九四一九俵(三斗六升入)、美濃・遠州・駿州・勢州米七四一〇俵半(四斗入)、奥州岩城米一〇七俵(三斗三升入)、武州米一一一俵(三斗八升入)、餅米一七〇俵(四斗三合入)、粳一万三九九俵半(五斗入)など合わせて一万九三〇〇石一斗三升五合(四万六五五一俵半)が、また、本所御蔵には米一〇〇〇俵(四斗三合入)、粳五二八四俵(五斗入)、挽立米六一七八石三斗三升二合余があり(米換算合計九二二三石三斗三升二合余)、浅草・本所両御蔵の在庫米高は合計で米二万八五二三石四斗六升七合余であった。⁽⁴¹⁾ 徳川亀之助(家達)は駿河府中藩城主として八月九日東京を出発し駿河に向かうことになるが、城地・町方、代官支配地の受取が行われた七月の時点で、徳川家家老平岡丹波(道弘)、中老浅野次郎八・河野左門の三人は、新政府に対し先発隊三五〇人余(家族を含めると二八〇〇人余)への飯米二五〇〇石を「先達テ御封印相成候米蔵之内、御開封之上御渡御座候様仕度」と願ひ出ている。そして、同月さらに「本所蔵所之儀ハ直ニ蔵屋鋪ニ被下置候様仕度、左候ハ、浅草蔵所ニ入有之候米金等、本所ノ方ヘ引移、同所オイテ諸事取扱、浅草之方ハ速ニ取片付仕懸役々等引払申度」と、本所御蔵の引渡願書を新政府に提出したのであった。しかし、この時にはこれらの願ひは聞き入れられなかったようであり、この代わりの措置として米三万俵・金二万両が下賜されたのであった。⁽⁴²⁾ なお、浅草・本所御蔵米・粳については、駿河府中藩の慶応四年五月から十二月までの財政帳簿・米方収入に、前述の同年閏四月二十九日時点での繰越米が「辰五

月有高」⁽⁴³⁾として記載されていることから、結局徳川家に引き渡されたものと考えられる。幕府支配の浅草・本所御蔵は、大総督府の命により封印された五月時点で幕府御蔵としての機能を停止したと認められ、同年末以降浅草御蔵は新政府の御蔵として新たな役割を担っていくのである。

新政府は江戸鎮台の設置と前後して、同年五月十九日社寺・民政・市政の各裁判所をおいた。民政裁判所は、八月八日には会計局、十月十八日には会計官出張所と改称され、明治二年（一八六九）七月には大蔵省に吸収されていく⁽⁴⁴⁾。慶応四年六月に、旧幕府勘定所役人は民政裁判所に出仕すべきことが布達されたのをうけて、浅草・本所御蔵関係者では御蔵奉行・金奉行兼帯の花田武兵衛、松村銑之允、篠山金次郎、佐々木多満作、松野熊之助をはじめ御蔵奉行無足見習一人、御蔵手代組頭三人、同組頭格一人、御蔵手代二五人、同助手代一四人、浅草御蔵門番同心頭取役三人、同門番同心八人、同門番同心見習二人、浅草御蔵番肝煎二人、同御蔵番見習二人、本所御蔵番肝煎一人、同御蔵番三人、同御蔵番見習一人の計八三人が勤仕請印をしたのであった（このほか病氣理由に請印しなかった者の中に御蔵手代二人・同助手代四人・御蔵門番同心二人・同門番同心見習一人・御蔵番二人がいた⁽⁴⁵⁾）。こうして浅草御蔵は名実ともに幕府支配を離れたのであった。

（二） 浅草・本所以外の江戸の御蔵

江戸の御蔵（米蔵）について、『東京市史稿』（市街篇・第四）には「別本慶長江戸図和田倉ニ「一の蔵地」、後の大手外ニ「二の蔵地」、竹橋外ニ「三の蔵地」ト有り、慶長江戸図「和田蔵」有り、大橋〇大手。外ニ「伊奈（松平）備前守御蔵」（伊奈忠次）・「大久保石見守御蔵」（大久保安安）・「彦坂（小）刑部御蔵」（彦坂元成）有り、平川門外東ニ「青山

播磨御蔵」(青山忠成)・「板倉伊賀御蔵」(板倉勝重)・「島田次兵衛御蔵」、西ニ「加藤喜左衛門御蔵」・「内藤修理御蔵」(内藤清成)・「御蔵」・「松風助右衛門御蔵」二カ所・「小林十左衛門御蔵」・「長谷川藤右衛門御蔵」ト有り、往古江戸絵図和田蔵無ク、○神尾刑部宅有り。紅葉山下ニ「百間蔵屋敷」有り、浅草ニ「御蔵やしき」有り、正保江戸図和田蔵無キコト往古江戸絵図ニ同シク、○阿部豊後邸ト為ル。代官町往古江戸絵図駿河大納言邸タリシ跡ニ「御蔵」ト有り、清水門外ニ「御蔵屋敷」、浅草ニ「御蔵」ト有り、承応・明暦二図之ニ同シケレトモ清水門外ノ蔵屋敷ヲ見ズ」(丸括弧内は引用者)とある。また、『同』(港灣篇・第壱)もほぼ同内容の記事を載せ、「浅草倉裏ハ、恐ラクハ此ノ和田倉ヲ転移シタル者ナル可シ」とする。⁽⁴⁶⁾大野瑞男氏は、この史料を使いつつ、正保元年「正保江戸図」において伊奈氏らをはじめとする代官頭・所司代・御金奉行等の有力奉行御蔵がなくなっていることの意味をつぎのように説明する。「代官頭ないし奉行らが江戸城外郭に個別に米蔵を預かり支配していた代官頭・奉行預蔵体制が、慶長末期の代官頭の死去もしくは処罰によってその巨大な在地支配力が消滅するとともに解体し、寛永末〜慶安期に至って浅草米蔵を中核とする幕府直轄蔵体制の成立をみたと考えることができよう。(中略)寛文期においても北の丸・和田蔵の米蔵の持つ役割を全く無視することもできない。ただ、これらの米蔵も元禄ごろまでには解体され、享保末期までに浅草・本所に集中された」。そして、江戸の御蔵について、和田蔵は天和三年(一六八三)に、北の丸御蔵は元禄十一年に、谷の蔵御蔵は元禄十一・十二年に、雉子橋御蔵は元禄十六年にそれぞれ解体されたとし(北の丸御蔵は代官町に移建)、さらに「このほか代官町米蔵の代わりに宝永五年創設された竹橋米蔵(粃蔵)・紅葉山・鉄炮洲・浜の米蔵の存在が知られる」とする。⁽⁴⁷⁾こうした大野氏の指摘を念頭におきつつ、以下江戸の御蔵についてみることにしよう。

【和田御蔵】「慶長江戸之図」・「慶長江戸図」などに名が記される和田御蔵は、江戸における幕府の米蔵としては古

いもの属す。⁽⁴⁸⁾「蠹餘一得」には、「慶長十二年の江戸図に此所に和田蔵として御蔵二棟を図せり、是御門の名のよつて起る所也」と記され、⁽⁴⁹⁾同様の記事が「御府内備考」にもある。⁽⁵⁰⁾しかし、正保元年の「正保江戸図」からは、その存在を認めることができない。元和六年創建の浅草御蔵に吸収合併されたことも考えられるが、詳細は不明である。また、寛文十年「寛文江戸図」や延宝七年「江戸方角安見図」(乾)などに再び和田御蔵が記載されることから、明暦大火後に再び置かれたのではないかといわれている。⁽⁵¹⁾なお、元禄三年「江戸大絵図」・同六年「江戸正方鑑」・享保元年「分道江戸大絵図」(乾)などからは記載が消えている。⁽⁵²⁾

【谷之御蔵】谷之御蔵(谷ノ御蔵)は矢之御蔵(矢ノ御蔵・野ノ御蔵)とも記されるが、正保二年に両国横山町続き米澤町・浜町辺の大川端に建てられた。薬研堀は御蔵敷地内の入堀であった。創建当時の規模は不明であるが、慶安四年までに二五棟一二五戸前(総地坪数二万七六九二坪)となり、明暦の大火で二三棟が焼失したが、寛文二年から延宝七年までに再建されたといわれる。そして、寛文十年「寛文江戸図」・延宝七年「江戸方角安見図」(乾)でもその存在が確認できる。天和二年暮れにも罹災し、翌年正月に類火にあつた軽輩に同御蔵焼米を支給するなどした。その後、貞享二年には桁行三〇間、梁間五間の御蔵五棟(五戸前)を築造したが(土居葺の上は土で塗覆い、戸前の外は銅戸であつた)、元禄十一年にも火事で焼失したため、翌年築地小田原町・本郷町辺に移築した。しかし、そこは海岸端であつたため潮風で更米となつてしまい、御蔵の立地条件としては不適格であつた。このため享保二年には浅草御蔵に併合されることになつた。⁽⁵³⁾

なお、「正宝事録」・「撰要永久録」などは、同じく享保二年に鉄砲洲御蔵が浅草御蔵に移されることになり、御蔵八棟のうち二棟が浅草御蔵に移築、六棟は入札払いされることになつたと記すが、同時に「元禄十二卯年、川口町・南

本郷町・南小田原町之内、御用地ニ上り、其跡右米蔵ニ成、矢之御蔵と申候」との注を朱書している。⁽⁵⁴⁾ また、宝永五年「分間江戸大絵図」・享保元年「分道江戸大絵図」(乾)などでは、築地・鉄砲洲地域には幕府御蔵は一カ所しか記されていない。⁽⁵⁵⁾ こうしたことから、移転後の谷之御蔵と鉄砲洲御蔵とは同一のものであったと思われる。

【雉子橋御蔵】雉子橋御蔵が建てられた年および規模は不明であるが、正保元年「正保江戸図」には「御蔵屋敷」との記載があるので、それ以前の建造であることは確かである。また、寛文十年「寛文江戸図」・延宝七年「江戸方角安見図」(乾)・元禄三年「江戸大絵図」・同六年「江戸正方鑑」・宝永五年「分間江戸大絵図」などでも確認できる。「竹橋余筆別集」収載の「雉子橋御蔵米大豆焼申覚帳」によると、同御蔵は明暦三年(一六五七)正月十九日の火事で被災し、関東米四八五石余を焼失した(当時は少なくとも五五戸前はあったが、棟数は不明)。⁽⁵⁶⁾ この時焼失した米はすべて関東米であったが、同御蔵には関東以外の米も収納された。焼失時にも他地域米が納入されていたかどうかは定かでないが、「濃州辰年納并卯ノ年古米江戸下御勘定目録」によれば、美濃郡代岡田将監(善政)支配地からの承応元年納米・慶安四年古米の江戸御蔵詰分は一万一四八四石があり、このうち谷之御蔵へは五八三〇石三斗二升四合が、雉子橋御蔵へは四五〇四石三斗三合(うち三九九石八合は古米分)がそれぞれ納入されたのであった(前述)。この時すでに浅草御蔵が存在しているが、この頃は谷之御蔵・雉子橋御蔵も浅草御蔵の機能の一端を分担していたものと思われる。この雉子橋御蔵について、「御府内往還其外沿革図書」(二)では正徳元年頃に御蔵地が「明地」となったと記すが、享保元年「分道江戸大絵図」(乾)には「御くら」との記載がある。しかし、享保五年「分間江戸大絵図」・同十年「分道江戸大絵図」では記載が消えている。⁽⁵⁷⁾ こうしたことから、雉子橋御蔵は正徳期頃(あるいは享保初年頃)に廃止されたとみられる。

【代官町御蔵】代官町御蔵は、正保元年「正保江戸図」・明暦二年「新添江戸之図」・寛文十年「寛文江戸図」でも確認できる。御蔵は寛永八年以降に徳川忠長館跡に建てられたといわれている⁽⁵⁸⁾。しかし、その後、慶安二年には、徳川綱重（長松）の館が造営されて一旦御蔵が解体されたようであるが、寛文元年に館を桜田門外に移転して、跡地が再び御蔵になった。「御府内備考」は、この御蔵について、「竹橋御門内西の方にあり、昔館林殿の御館跡なれば、寛文元年神田御殿へ御移徙の後出来し御蔵なるべし」と記す⁽⁵⁹⁾。延宝七年「江戸方角安見図」（乾）、元禄三年「江戸大絵図」、元禄六年「江戸正方鑑」でも「御蔵」・「御米蔵」・「御クラ」などと記されるが、享保元年「分道江戸大絵図」（乾）では記載がない。宝永五年に代官町北の丸構造り（北の丸経営）が行われているので、この時に廃止されたと考えられる。なお、代官町御蔵は、天和四年（貞享元年）二月に書院番斎藤左源太（利長）・小性組島弥左衛門（一信）が普請奉行となって修復が行われた⁽⁶⁰⁾。

【竹橋御蔵】竹橋門の近くにも御蔵があり、寛文十年「寛文江戸図」・延宝七年「江戸方角安見図」（乾）・元禄三年「江戸大絵図」では「御ツキヤ」・「御つきや」、元禄六年「江戸正方鑑」では「御蔵・御ツキヤ」、享保元年「分道江戸大絵図」（乾）では「御蔵」と記される。竹橋御蔵の創設時期については不明であるが、寛文年中には糶が詰められたとあるので（後述）、この時期に存在したことは間違いない。そして、竹橋御蔵は春屋としての機能とともに非常用米の備蓄蔵としての役割も担っていた。享保十九年の「浅草御蔵役人勤方納米改方等之定書」の中には、「竹橋御蔵糶之儀、折々心を附、可被相改候事」とある⁽⁶¹⁾。また、延享二年の「御勝手向御用定」からは、遣方米から詰め置かれた米四〇〇〇石余は年々詰め替えられ、古米は遣方に使用されたことがわかる。さらに、糶七三〇石余も貯えられたが、「是ハ寛文年中ハ被詰置、其後段々ふけ損シ、當時有高書面之通御座候」とある⁽⁶²⁾。後述するように、大坂城西の丸春屋では毎年軍事物資としての味噌造りが行われ、隣接する味噌蔵に貯蔵されたのであり（元禄期まで大番が管理）、「ツ

キヤ」の一角に非常用米としての糶が貯えられていたとしても不思議はない。四〇〇〇石の貯米はその後なくなったようであるが、幕末期には竹橋御蔵地内に鉄砲蔵も併設されて、嘉永元年・同五年には鉄砲蔵の修理が行われた。また、安政三年には御蔵の修理も行われており、御蔵は幕末期まで存続していたのである。⁽⁶³⁾

【浜御蔵】「蠹余一得」には、浜御蔵は浜御殿内（総地坪七万六八〇〇坪、御蔵地は三七〇〇坪）にあつて、御蔵五棟四二戸前であつたと記される。⁽⁶⁴⁾ 浜御殿地は、承応元年徳川綱重（長松）に鷹狩地として与えられたが、その後寛文四年に埋立・拡張され、下屋敷が造営されたために甲府殿浜屋敷とよばれるようになった。宝永元年には御用屋敷と改称され、さらに綱重の子綱豊が將軍職に就いたことから同所は浜御殿とよばれた。場所は、新鑄座町・芝口町の海手にあつたところである。なお、浜御殿は、宝暦六年に焼失し、その後は再建されなかつた。浜御殿内に御蔵が建てられた時期についてははっきりしないが、享保十五、六年頃と考えられる。「享保撰要類集」には、享保十六年六月の「出火有之時分浜御殿御米飯蔵江火防罷出候町人足之覚」などが収載されており、「浜御殿御米飯蔵」火災の際には「す組」（船松町・本湊町・南小田原町・木挽町・南八丁堀町）一五二人、「め組の内」（宇田川町より南の方金杉橋まで）一二八人の計二八〇人が消火のために駆け付けることが決められた。⁽⁶⁵⁾ 「浜御殿御米飯蔵」とあるので、浜御蔵が整備される途中のことと思われる。なお、浜御蔵への町火消し担当組は、その後「は組」・「み組」両組計九五五人に代わっている（後述）。

浜御蔵は、享保末年から延享期頃は米が詰められていなかった可能性がある（少なくとも享保十八年と延享二年には在庫米はなかつた）。延享二年の「御勝手方御用定」には、浅草・本所・竹橋御蔵の記載はあるが、浜御蔵についてはない。しかし、寛政期頃からは舩蔵としての機能を果たしたようであり、「御蔵旧例書」には御蔵三棟二六戸前に舩一万五六六四俵・稗一万五〇〇九俵が詰められていたと記される（但し、一五戸前は明蔵となっており、詰舩についても順次摺りた

てられて文政末年頃には「当時御詰高無之」とある⁽⁶⁶⁾。また、万延二年二月「東都御囲糶有高書付」によると、前年十二月晦日時点では糶一万六九二九石余が詰められていたのであった⁽⁶⁷⁾。なお、天保十二年三月の記録には、「浜御殿地内御蔵三棟修復」とあるので⁽⁶⁸⁾、この頃にも少なくとも御蔵三棟はあったことがわかる。

【猿江御蔵】享保十六年六月頃に、猿江（猿江藤左衛門新田）にも米蔵が建てられた。「柳営日録」の六月晦日の条には「今度猿江にて御米蔵三十戸前出来、白子屋受負にて四十日切二建候由」とある⁽⁶⁹⁾。また、「世説海談」には、「今度御米蔵新規に左之通仰せ付らる、本庄（所）・猿江二三間ニ拾間御蔵百戸前、浜御殿ニ右同断」（括弧内は引用者）とある⁽⁷⁰⁾。「世説海談」の数値をこのまま信じるわけにはいかないが、享保十六年頃に猿江に御蔵が建てられたのは確かである。というのは、「享保撰要類集」収載の享保十六年六月二十七日付「出火之節所々御米飯蔵火防手当テ申付置候書付」において、本所筋で火事があった時には猿江藤左衛門新田御米飯蔵へ本所町々から火消し人足六九四人が駆け付けることが定められている⁽⁷¹⁾。また、同じく「享保撰要類集」収載の享保十八年二月付「浜・猿江両御蔵火事之節欠附人足之儀ニ付伺書」からは、火事の際の駆付火消し人足は、（一）浜御蔵について、「は組」町々五九〇人・「み組」町々三六五人が隔月で勤めること、（二）猿江御蔵については、本所町々からの人足をほぼ半減して三四九人で勤めることを、町奉行大岡越前守（忠相）・同稻生下野守（正武）連名で老中松平左近将監（乗邑）に伺い出たことがわかる⁽⁷²⁾。伺いは、直接的には町入用や負担の軽減を求める名主・町人からの要望をうけてのものであったが、町奉行は理由の一つに「浜・猿江両御蔵共ニ御米当時無御座候」ことをあげている。前年の西国筋虫付損毛による米不足などで両御蔵在庫米がなくなっていたのであろう。

猿江御蔵が建てられた理由は明示されていないが、米価引き上げのためであったと思われる⁽⁷³⁾。御蔵は囲米用として

使用されたのであろう。なお、猿江御蔵のその後は不明であるが、享保十九年には本所にあった材木蔵が猿江に移され、跡地には本所御蔵が建てられた。猿江御蔵はこの頃に廃止されたものと考えられる。

【開成所御蔵】文久三年十月八日、一橋門外開成所地内へ非常御囲米用御蔵二棟が建てられることになり、御蔵奉行花田武兵衛・勘定藤野新七郎・勘定吟味方改役井出役浅井金八郎に普請中の立会が命じられた。詰米高等は不明であるが、元治元年（一八六四）七月に竣工した。⁷⁴

以上、浅草・本所御蔵以外の江戸の御蔵（米蔵）についてみてきたのであるが、先に記した大野氏の指摘とは実態がかなり違っていたことが明らかとなった。以下、江戸の御蔵の概略をまとめておこう。慶長十二年頃にはすでに存在した和田御蔵は元禄期までには姿を消し、正保二年に両国横山町続き米澤町・浜町辺に創建された谷之御蔵は、元禄十一・十二年には築地小田原町・本郷町辺に移転し、その後享保二年にさらに浅草御蔵に移転・併合された。鉄砲洲御蔵とは、谷之御蔵の築地小田原町・本郷町辺への移転後の呼称と考えられる。雉子橋御蔵は正保期にはすでに存在したが、関東米のみならず承応・慶安期には美濃国からの年貢米を収納していたことがわかる。雉子橋御蔵は正徳期頃（あるいは享保初年頃）に解体された。代官町御蔵は寛永八年以降に徳川忠長館跡に建てられたといわれているが規模などは不明である。代官町御蔵は、その後一旦取り壊されたようであるが寛文年中には再建された。そして、その後宝永五年の北の丸構造り（北の丸経営）の際に廃止されたと考えられる。竹橋御蔵は寛文期には建てられており、春屋としての機能とともに非常用備蓄蔵としての機能を果たしていた。浜・猿江両御蔵はいずれも享保十六年頃に建てられたが、猿江御蔵は同十九年頃には廃止された。一方、浜御蔵は寛政期以降は初蔵として利用された。なお、元治元年には開成所地内に非常用御囲米御蔵二棟が建てられた。

江戸初期に数多くあった代官・奉行預かり蔵は慶長末年頃には消滅し、さらに和田御蔵・谷之御蔵・雉子橋御蔵・

代官町御蔵・猿江御蔵なども享保末年までには浅草御蔵（および本所御蔵）に吸収されたのであった。そして、役職整備の面からみる限りにおいては、寛永期には浅草御蔵の基本的な支配・管理体制が整ったのであり、「浅草御蔵を中核とする幕府直轄蔵体制」も同様に寛永期には成立したということができよう。なお、江戸には浅草御蔵のほか、宝永期までは雉子橋御蔵や代官町御蔵が、また享保二年までは谷之御蔵が浅草御蔵と並存していたのであり、これら御蔵の役割説明が今後の課題となろう。

（三） 小菅納屋（小菅御蔵、小菅御粃蔵）

文化四年、年貢粃・買上粃・上納粃を貯蔵する施設として小菅納屋が建設された。浅草・本所御蔵では収納に余裕がなく、御府内に近接し、しかも輸送に便利な地として小菅が選ばれたのであろう。小菅納屋は、元文元年から寛政四年までであった小菅御殿の跡地に建てられた。⁽⁷⁵⁾

小菅納屋の規模は不明であるが、文化四年に、浅草・本所御蔵から同所保有米のうち一万五〇〇〇石と、大貫次右衛門（光豊）ほか一五人の幕府代官（支配地は武蔵・上総・下総・上野・下野・常陸・安房・駿河・遠江国のうち）の同年物成のうちから粃一万九四六六石三斗三升三合二勺、同差出し粃一七石五斗などが詰められ、貯蔵が開始された。⁽⁷⁶⁾ 小菅納屋起立の遠因は、天明飢饉の教訓をもとに、老中松平越中守（定信）が寛政元年に困粃（貯穀）政策を推進したことに求められる。そして、江戸においては、江戸近在村々作徳粃のうちから困粃をするよう命じたのであった。⁽⁷⁷⁾

人言」には、「江戸之御困米は已前よりも高をましけり。駿府清水之御困米をも粃におさめかふることにはしぬ。その外城詰御用米てふも、末年までには三つ一つにもたらざりけるを、戌年にも十萬石余も御つめもどしにはからひたり。

（中略）其外濃州・飛州・長崎・山田などへも是までなかりし事ながらおい／＼に困米等被仰付、或は大井川出水にて

わたりとまり侍れば、米価にはかに高く成候て、旅人難儀に及ぶをもて、島田・金谷へも「⁽⁷⁸⁾ 米被仰る」とあつて、江戸で囲米増量をはかるとともに、各地で新規囲米・囲粃が開始されたのであつた。江戸近在の場合をみると、この松平定信の囲粃政策をうけて、寛政元年から同三年までの間に五〇〇〇両分の買上粃八四四三石と町々御救残米二二六七石余が囲米・囲粃され、さらに以後も関東粃の買上と年貢米による粃の詰増しが行われている。⁽⁷⁹⁾ なお、これらの粃が貯蔵されたのは、江戸近郊の在方納屋と思われるが詳細は不明である。

その後、前述したように文化四年に小菅納屋が建設されたわけであるが、表4に小菅納屋における文化四年から弘化元年までの囲米・粃高推移を示した。これは、勘定所御取箇方の中の廻米方による取調・書上によつてゐる。ここから(一)小菅納屋には、関東八カ国の幕領を中心に奥羽・東海道・畿内・中国・四国筋の幕領年貢米・粃や買上粃が収納され、粃は必要に応じて摺り立てられ浅草御蔵に回送されたこと、(二)その一方、浅草・本所御蔵の収納粃(江戸に回送された城詰米を含む)を預かり保管することがあつたこと、(三)囲粃は、米方御用達や町方・在方米商人にも払粃されたこと(払粃代は、米価掛り取扱い金に入れられた)などがわかる。弘化元年の時点での囲粃高は一四万二四三九石五斗二升一合で、その内訳は年貢粃一〇万四七七八石五斗七升、買上粃三万九二八石六斗六升八合、上ケ粃六八二石五斗八升三合、差出し粃四〇石七斗であつた。また、これ以外に天保八年から蓄えられた差出方掛り上ケ粃八七九石五斗八升があつた。⁽⁸⁰⁾ なお、弘化期以降も小菅納屋には詰粃が行われて、万延元年十二月晦日時点での小菅納屋囲粃高は粃二七万五九七八石余(うち廻米方掛り分八四四石余・竹垣三右衛門取扱い分六〇六石余・伊奈半左衛門取扱い分二六三三石)であり、文久元年十二月晦日時点では粃二三万八〇九四石余であつた。⁽⁸¹⁾

ところで、囲粃は、小菅納屋以外でも行われた。文化三年・同四年にかけて、米価掛り取扱い金をもつて関東筋在

表 4 小菅納屋囲米・粃高の推移

年	保有米・粃高	備 考
文化 4 年	米 15,000.0000石 粃 19,483.8332	米15,000石浅草・本所両御蔵より受取。粃19,466.3332石は、大貫次右衛門ほか15人代官支配所同年貢米のうちから詰粃。粃17.5石差出粃。
5 年	粃 1,705.0000	米14,265.6585石を石橋 [弥] 兵衛ほか 2 人へ払米。米734.3415石は同払米の際の欠減り。粃17,778.8332石摺立て (浅草御蔵へ) 回送。
6 年	米 2,006.0000 粃 1,705.0000	米2,000石大貫次右衛門ほか 2 人の代官支配所 (武蔵国) 同年年貢米のうちから詰米。米 6 斗差出粃。
7 年	米 86,998.8900 粃 1,705.0000	米85,000石大貫次右衛門ほか13人の代官支配所 (関東八カ国) 同年年貢米のうちから詰米。前年の差出粃 6 斗を払米。米1.11石盗難被害。
8 年	米 833.6100 粃116,479.1703	粃114,761.1703石榑原小兵衛ほか33人の代官支配所 (関東八カ国・伊豆・駿河・遠江・三河・甲斐・美濃・伊勢・摂津・河内・播磨・和泉) 同年年貢米のうちから詰粃。粃13石差出粃。米84,097.18石浅草御蔵へ回送。米69.21石同回送の際石減り。米1,998.89石を千住掃部宿米問屋喜八ほか 1 人へ払米。
10年	粃116,466.1703	米833.61石米方御用達伊藤庄助へ払米。文化 8 年の差出粃13石を払粃。
13年	粃116,461.1703	粃 5 石米方御用達伊藤庄助へ払粃。
14年	粃 79,595.4093	粃36,865.761石摺り立て (浅草御蔵へ) 回送。
文政元年	粃115,605.5293	粃36,000石大貫次右衛門ほか14人の代官支配所 (関東八カ国) 同年年貢米のうちから詰粃。粃10.12石差出粃。
4 年	粃 39,595.4093	粃76,000石摺り立て浅草御蔵へ回送。文政元年の差出粃10.12石を払粃。

6年	粍 27,595.4093	粍12,000石摺り立て浅草御蔵へ回送。
7年	粍 13,021.3500	粍11,363.0593石摺り立て浅草御蔵へ回送。 粍3,211石水濡れにつき払粍。
9年	粍 33,021.3500	粍20,000石同年年貢米のうちから詰粍。
10年	粍 53,021.3500	粍20,000石同年年貢米のうちから詰粍。
12年	粍 20,000.0000	粍20,000石同年年貢米のうちから詰粍。 粍53,021.35石摺り立て浅草御蔵へ回送。
天保元年	粍 30,000.0000	粍10,000石買上。
2年	粍 60,000.0000	粍30,000石同年年貢米のうちから詰粍。
3年	粍 55,000.0000	粍10,000石買上。年貢米による詰粍のうち5,000石、買上粍のうち10,000石を摺り立て浅草御蔵へ回送 (保有粍内訳、年貢分45,000石、買上分10,000石)。
4年	粍 10,000.0000	年貢米による詰粍のうち粍35,000石、買上粍10,000石を摺り立て浅草御蔵回送。
5年	粍 21,626.4820	粍11,626.482石買上。
6年	粍 23,532.3380	粍1,896.856石買上。
7年	粍 7,993.8710	粍4,492.533石肥後国天草郡佐伊津村百姓石本平兵衛上ケ粍 (天保3年~11年まで1カ年500石宛上納分)。 粍28,015.871石(年貢粍の分7,000石、買上粍分8,529.467石、上ケ粍の分4,470.533石)摺り立て浅草御蔵へ回送。 石本平兵衛上ケ粍のうち22石盗難被害。
8年	粍 36,876.2440	天保3年以来浅草御蔵回送となった買上粍28,529.467石、上ケ粍4,470.533石(合計33,000石)の分として、関東八カ国の代官所同年年貢米のうちから粍26,865.5石を詰戻し。 粍390.504石越後国蒲原郡水原村百姓市嶋徳次郎上ケ粍。 粍1,611.429石備中国窪谷郡倉敷村庄屋水沢常太郎・上田武右衛門、同村年寄平右衛門上ケ粍。 粍14.94石差出粍。
9年	粍 37,510.7440	新粍134.5石を買上粍・上ケ粍詰戻し不足分のうちへ納入。 粍500石市嶋徳次郎上ケ粍。

10年	粍 47,568.3280	買上粍・上ケ粍詰戻し不足分などとして、関東八カ国の代官所同年年貢米のうちから粍10,000石詰粍。粍185.402石買上。粍4.12石差出粍。買上粍のうち更痛みの分粍131.938石を私粍。(保有粍内訳、年貢粍の分7,000石、買上粍の分33,576.802石、上ケ粍の分6,972.466石、差出粍の分19.06石、合計粍47,568.328石)(その他差出方掛り上ケ粍95.309石あり)。
11年	粍 72,027.2130	粍24,484石武蔵・相模・伊豆・遠江・三河・伊勢国の代官所同年年貢米のうちから詰粍(予定は30,000石)。粍19.639石買上。粍6.21石差出粍。粍50.964石市嶋徳次郎天保8年上ケ粍燭立てにつき欠減り。
12年	粍112,627.8740	粍32,928.5石関東八カ国・播磨・備中・讃岐・出羽国の代官所同年年貢米のうちから詰粍。粍10,800.273石(天保3・5年関東粍・上ケ粍、羽州山形城詰粍、同8年河州粍)浅草・本所御蔵より移し替え。粍9.08石差出粍。粍3,137.192石燭立て欠減り(天保2年年貢詰粍、同5年買上粍、同8年年貢米にて買上粍へ詰戻し分・備中国上ケ粍合計34,954.862石燭立て)。
13年	粍119,110.0210	粍5,880.5石武蔵国の代官所同年年貢米のうちから詰粍。粍1,273石出羽・播磨国年貢粍去年戻しの分詰粍。粍1.71石差出粍。粍673.063石去年浅草・本所御蔵より移し替え粍燭立て欠減り。
14年	粍142,443.0210	粍23,328.36石武蔵・上総・下総・甲斐・伊豆・駿河・伊勢・山城・摂津・河内・播磨国の代官所同年年貢米のうちから詰粍(小菅納割賦高粍24,966.69石、うち粍1,626.83石年延べ、納め不足11.5石は石代納)。粍4.46石差出粍。
弘化元年	粍142,439.5210	粍3.5石雨漏れ腐れにつき私粍。(保有粍内訳、年貢粍の分104,787.57石、買上粍の分30,928.668石、上ケ粍の分6,682.583石、差出粍の分40.7石)(その他差出方掛り上ケ粍879.58石あり)。

(註)『雜留』七(国立公文書館・内閣文庫所蔵)により作成。弘化元年は8月まで。

方作徳粍のうちから粍三万五六四七石が買い上げられ、武州足立郡鳩ヶ谷宿ほか一〇カ所の在方納屋に保管された(この分は、翌五年に摺り立てられ浅草御蔵に回送された)。また、同七年にも同様に、関東筋の在方作徳粍三万八〇五三石が買い上げられ、足立郡草加宿ほか一〇カ所の在方納屋に囲粍された(この分は、同十四年に摺り立てられて浅草御蔵に回

送された)。これらは米価引き上げのためにとられた措置であったが、文化七年の場合、代官大貫次右衛門支配地では米方御用達松屋庄助に幕府普請役が付き添い関東筋を廻り、相場を見計らい相対値段で買い上げたのであった。⁽⁸²⁾

その後、文久二年十二月に、幕府は江戸廻廻を行う大名の領国籾を買い上げて、これを小菅納屋に囲い置くことを決定した。しかし、浅草御蔵渡米が不足する事態となったために、翌年正月になると正米での買上も認めて、これを浅草御蔵渡米にあてることにしている。⁽⁸³⁾

万延元年九月には本所御蔵囲籾四万石・小菅納屋囲籾二万石が、そして、元治元年の九月にも本所御蔵囲籾三万石・小菅納屋囲籾三万石が摺り立てられた。⁽⁸⁴⁾これは浅草御蔵での不足米を補うためのものであった。そして、慶応元年二月になると、勘定所は、浅草蔵奉行から旗本・御家人への切米扶持方支給に際して米繰り悪化が心配されるとの報告を受けて、百姓作徳米三万石の買上、浅草蔵出米二〜三万石の買戻し、小菅納屋囲籾の一〇万石摺立増しの伺書を作成・提出し(勝手掛り老中宛か)、許可されている。⁽⁸⁵⁾したがって、小菅納屋囲籾はこの三年分だけで少なくとも一五万石が摺り立てられたのであった。

小菅納屋の支配・管理については、一応武蔵国に支配地を持つ代官が担当したものとしてよいであろう。「新編武蔵風土記稿」に「文化四年籾米貯フヘキ倉稟数多建サセラレテ、郡代付ノ御代官ノ持トナレリ」とあり、⁽⁸⁶⁾「武蔵通志」にも、「文化四年丁卯貯穀倉ヲ建、代官ニ附属ス」と記される。⁽⁸⁷⁾小菅御殿跡地は、関東郡代伊奈氏失脚後は関東郡代付代官の大貫次右衛門によって支配された(寛政四年から文化三年までは勘定奉行が関東郡代を兼帯。同年、関東郡代職が廃止され、大貫は馬喰町御用屋敷詰代官となる。文政六年辞職)。したがって、文化四年に小菅御殿跡地に建てられた小菅納屋は、文政六年まで馬喰町御用屋敷詰代官の大貫次右衛門によって支配・管理されたとみられる。

天保四年には、同じ小菅御殿跡地に今度は町会所の籾蔵(「小菅御構内町会所籾納屋」・「小菅御構内町会所納屋蔵」・「小

菅建添地納屋蔵」・「小菅御殿跡町会所囲穀納屋」など多様な呼称がある。以下、町会所囲穀納屋とよぶが建てられ、同所の警備・構内掃除などが「小菅納屋詰」の代官手代らに委ねられた。「県令集覧」からは、天保期以降は武蔵国に支配地をもつ馬喰町御用屋敷詰代官、関東代官（支配のための陣屋を持たない）、下野国東郷代官のいずれかの代官が「小菅納屋詰」の手代をおいていたことがわかる。⁸⁸ この手代について、「新編武蔵風土記稿」には、「寛永頃ヨリ、阿出川平左衛門ト云モノ代々居住シテ守レリ、此平左衛門ハ、始伊奈半十郎ノ家人ナリシニ、伊奈氏断絶ノ時ヨリ郡代附ノ手代トナリ、今モソノ子職ヲ継テコノ地ノ事ヲ司レリ」とある。⁸⁹ 天保期の「小菅納屋詰」は手代の阿出川平左衛門とその子で同見習の庄作であり、「小菅納屋詰」手代は同家の代々世襲であった。

『七分積金』（都史紀要七）は、小菅納屋について、「その（小菅御殿）跡地に文化四年粃米を貯える倉稟数棟を建てることとなり、郡代付きの代官持となった」（括弧内は引用者）と記述する。⁹⁰ 関東郡代が廃止されているので、「郡代付きの代官持」でなかったことは前述した通りである。さらに、『七分積金』では、文化四年に建てられた小菅納屋を、五カ所あった「町会所納蔵」の一つとしてとりあげているが、これは誤りである。文化四年に建てられた小菅納屋は町会所の納蔵ではなかった。天保五年四月に町奉行より書き上げた「町会所取計方大意」には、つぎのようにある。⁹¹

一 囲穀詰置候蔵々の儀は、向柳原町会所并筋違建添地、深川建添地三ヶ所にて蔵数三拾貳棟有之候、右之外小菅建添地之儀も、去々辰中同済之趣を以納屋蔵取建中ニ付、右は追々建揃候上申上候積ニ御座候

町会所囲穀納屋は霊岸島建添地にもあったといわれるが（文政六年以降）、天保三年（「去々辰中」）以前から表4に示されるほどの大量の粃を貯蔵していた小菅納屋を町奉行が書き忘れる筈がない。また、天保飢饉の際には、町会所囲穀は市中春米屋につかせて白米とし、これを安価で放出したといわれるが、小菅納屋の場合、表4でみる限りそうした

事実はない（浅草御蔵への回送となっている）。

文化四年に建てられた小菅納屋は、幕府勘定所御取箇方の中の米価掛り（米価方掛り）が担当・窓口となった粃蔵であった。前述のように、天保四年になって、町会所廻粃納屋が同じ小菅御殿跡地に建てられたが、普請請負業者である蔵田清右衛門のこの時の請負願書にはつぎのように記される。

以書付奉申上候

一此度小菅御構内江粃蔵御掛りニ而新規御取建御普請御座候由承知仕候、然ル処右御場之儀者米価御掛ニ而新規御納屋御取建之最初より引続御普請御修復等私一手ニ而是迄相勤来申候、殊ニ昨年以來当年江掛ケ御差出シ方御掛ニ而新規御納屋御建増御普請引請被仰付、難有仕合奉存候、右ニ付奉御願上候者、御構内之儀者数年御普請私相勤罷在来候処、此度御取建御座候御普請之儀も私引請被仰付（以下略）

「粃蔵御掛り」とは「町会所掛り」のことである。なお、蔵田は文化四年の小菅納屋取建以来同所普請を請け負ってきたのであり、蔵田と共に岡田次助も今回（天保四年）の町会所廻粃納屋取建普請請負の願書を提出したが、兩人は「町会所普請定受負之者」ではないことを理由に受注できなかった。また、同年に、町会所廻粃納屋建設にともない、阿出川平左衛門をはじめ庄作・囲内小作人八人に納屋・建添地の「見守」が命じられ、平左衛門には一カ年三両、庄作・小作人八人には一カ年二両ずつが町会所金の中から支給されることになった。⁽⁹²⁾

小菅納屋における粃の出納・管理の一端を、「文久二戌年小菅納屋御勘定目録」をもとに作成した表5からみてみよう。この勘定目録は、竹垣三右衛門（直道）が馬喰町御用屋敷詰代官として小菅納屋を支配・管理していた時の文久二年分を慶応三年七月に勘定仕上して勘定所に提出したものである。

表5 小菅納屋囲糶納渡内訳

(文久2年)

	糶 高 ・ 金 高	(内 訳)
納 方	糶 238,094.325石	御囲糶
	┌ 糶 237,249.775石	米価方掛り
	└ 糶 844.550石	廻米方掛り
	糶 41,157.185石	戌御詰糶
	糶 6.945石	差出糶
	糶 1,624.295石	御廻米納方御用達拝借返納
	金 545両1分永192文	虫粉其外遣払残金
	金 256両1分永216文7分	虫粉御払代
	納方合計 糶 280,882.750石・金801両3分永158文7分	
渡 方	糶 280,007.537石	御囲糶
	┌ 糶 279,162.987石	米価方掛り
	└ 糶 844.550石	廻米方掛り
	糶 875.213石	燭立減石
	金 184 両1分永195文5分	
	金 165両2分永175文5分	御詰糶燭立賃
	┌ 金 2両 永179文1分	糶殻再燭立賃
	└ 金 4両1分永216文4分	糶殻之内虫粉篩出人足賃
	└ 金 2分永 3文7分	敷糠并飜糶燭立人足賃
	└ 金 2分	明俵撰分ケ其外取片付賃
	└ 金 3両 永100文	増敷糠并持運其外人足賃
	└ 金 3分永 33文3分	炭茶代
	└ 金 3両3分	定居手代・同見習御手当
	└ 金 1両1分永188文3分	敷糠持運人足賃
	└ 金 2両 永 49文2分	御詰糶移替人足賃
	金 22 両3分 永 16文7分	
	┌ 金 18両3分永 16文7分	御勘定方御普請役御手当
	└ 金 4両	定居手代・同見習御手当
	渡方合計 糶 280,882.750石・金207両永212文 2 分	
	差 引 金594両 2 分永196文 5 分	虫粉其外御払代遣払残金

(註)「文久二戌年小菅納屋御勘定目録」(三井文庫所蔵)より作成。

小菅納屋には、竹垣三右衛門・屋代増之助（忠良）・羽田十左衛門（正見）など計二三人の代官支配地および永井飛驒守（直矢）など計五人の大名預所から、文久元年・二年分の年貢粃として同二年十二月中までに計四万一一五七石余が収納されたが、このほかに廻米納方御用達三人からの拝借粃同年返納分一六二四石余、「虫粉其他遺払残金」五四五両余などが納められ、前年度からの繰越圀粃分二万三〇八〇九四石余と合わせて、同二年末時点での圀粃高は合計二万八八二石七斗五升（米価方掛り分二万七九一六二石余・廻米方掛り分八四四石余）・金八〇一両三分永一五八文七分となった。一方、渡方としては、煽立減石粃八七五石余のほか、詰粃煽立賃、粃殻再煽立賃、粃殻再煽立関係人足賃・手当等として金一八四両一分余、詰粃煽立御用中勘定方普請役・定居手代（阿出川莊平太・同見習正三郎）等への手当金二二両三分余があった。そしてこの結果、翌三年への繰越分は粃二万七石五斗三升七合・金五九四両二分永一九六文五分となったのである（繰越粃分は、勘定目録では渡方の中に記されている）。なお、同年に小菅納屋詰された粃は、奥羽・関東・東海道・北国・畿内・中国・西国筋の代官支配地および高槻・岸和田・新発田・松前・桑名の各藩預所からのものであり、広範囲な地域から廻粃されたものであることがわかる。

同所詰粃の煽立人足賃や移替人足賃など各種人足賃が計上されているが、専属の小揚がいたかどうかは不明である。「小揚賃」と書かれていないところからみると、近隣村からの農民雇用であったと思われる。また、同年は浅草への回送が行われていないが、文政十二年の例でみると、小菅納屋摺立米の浅草御蔵への運送は笠倉屋嘉兵衛差配の茶船方や綾瀬川沿いの小谷野村で廻船業を営んでいた富沢幸助らによって行われている。積出・搬送は、小菅納屋周辺農村からの雇用農民や運送業者に委ねられたものと考えられる。

幕府管理の小菅納屋は、幕府の崩壊とともに役目を終えた。また、町会所の小菅圀粃納屋も同様であった（町会所は

明治三年十二月に閉止。これらの納屋について、「小菅県引渡演説書」にはつぎのようにある。「文化度を追々旧幕府勘定所掛ニ而困糶納屋取建候ニ付、右納屋敷・船入堀敷共潰地引方相成、去己巳年伺之上当県舎新営付敷地相成候場所ハ納屋取払相成候義ニ有之、(中略)前条旧幕府勘定方ニ而取建候納屋之内、当時現在之分十四棟有之、内一棟ハ学校、一棟ハ牢屋、一棟ハ同所付病院并女徒刑人手業場(後略)⁽⁹³⁾」。明治二年に納屋の大半が壊され、残っていた納屋は小菅県に引き渡されて、学校・牢屋等に転用されて使用されたのであった。

以上のように、文化四年から武蔵国葛飾郡の小菅御殿跡地に建てられた小菅納屋は、糶の貯蔵施設としての性格を持ちつつ、浅草御蔵を補完する役割を果たすものであった。それは、同所の困糶が必要に応じて摺り立てられ浅草御蔵に回送されたことなどからうかがうことがきよう。また、前述したように、小菅納屋は同地を支配した幕府代官によって支配・管理された。納払勘定帳の作成は代官が、同所の警備は同所定居の代官手代などが担当したのである。しかし、(一)小菅納屋は、最初は勘定所御取箇方の米価掛り(米価方掛り)が担当して建てたものであること、(二)困糶は、米価方掛り・廻米方掛り・差出方掛りの三つに区分されていたこと、(三)天保三年には、同じく取箇方の差出方掛りが担当・窓口となつて小菅納屋の建増し普請が行われたこと、(四)糶は、奥羽から西国筋に至る非常に広範な幕領から廻米・糶されたこと、(五)糶の煽立には幕府勘定方や普請方の立会があつたこと(おそらく摺立も同様)などから、小菅納屋は、代官の管理下に置かれてはいるものの、勘定所御取箇方掛りと緊密な連携をもつ糶蔵であったといえるであろう。

さらに、同所困糶のほとんどは米価掛りの分であつたが、この米価掛りは、文化二年十月に、低落した米価の引上げを図る買上米政策実施の過程で勘定所御取箇方の中に設置されたものである。⁽⁹⁴⁾小菅納屋の困糶払代金は米価掛り取扱い金の中に加えられたが、文化三・四・七年には、米価引上げのため同取扱い金を以て関東筋在方作徳糶の買上が

行われた。したがって、小菅納屋囲碁は江戸の米価調節機能を間接的に担うものであったといえよう。

(四) 今市御蔵

今市御蔵は、今市御蔵所などともよばれ、日光街道今市宿の北に設置された。慶安元年に、日光御殿番への切米が今市御蔵から支給されていることから、⁽⁹⁵⁾この時にはすでに存在したことが確認できる。しかし、正確な設置年は不明である。おそらく將軍の日光社参時に使用された今市御殿(今市旅館)が創建され、さらに東照社大造替も行われた寛永期頃に設置されたものと思われる。御蔵の敷地は六六七坪で米蔵は四棟があつた(最初の一棟は承応元年に建替え、元禄四年・寛延四年(一七五二)・寛政四年に各一棟ずつ建増し)。また、文久三年三月には、関東幕領村々から買い上げた作徳米および京都市護職松平肥後守(容保)からの返納米を収納するために、今市御蔵に「壱万石程も御詰米出来候納屋御取建」ることが決まり、建設費用の見積もりを出すことになった。⁽⁹⁶⁾しかし、実際に着工されたかどうかは明らかでない。

今市御蔵の機能・役割については、『いまいち市史』に詳しいので、以下その所説に依拠してまとめておこう。⁽⁹⁷⁾

今市御蔵米は、「今市御蔵詰米」・「日光今市御詰米」・「今市町御蔵詰御用米」・「今市御城米」などと多様な名称でよばれたが、その基本的な性格は、常備米としての詰米であり、年々一定量の年貢米が詰米された。安政元年の場合で、今市御蔵詰米の納方および渡方の内訳をみてみよう(表6)。納方のほとんどは「当年御詰米」と「前年諸渡方残米」であつた。「当年御詰米」は、御蔵掛りであつた小林藤之助代官支配地・同人当分預所から二三〇六石、山内総左衛門(薰正)代官支配地・同人当分預所から一一四七石、大竹左馬太郎(勝昌)当分預所から五七七石の計四〇三〇石

表6 今市御蔵詰米納渡内訳

(安政元年)

納 方		渡 方	
前年諸渡方残米	米 3,540.9021石	切米・扶持方等	米 2,910.4950石
当年御詰米	米 4,030.0000	門主登山扶持方	米 24.4600
当年差出米	米 3.2150	日光配当米	米 918.9150
当年出目米	米 110.7520	祭礼之節馬飼料等	米 200.0000
上菰御払代	金1両永153文2分	役所入用米	米 158.0000
		疊替・修復入用等	米 24.1990
		その他	米 71.4770
			(金1両永153文2分)
合 計	米 7,684.8691 金1両永153文2分	合 計	米 4,307.5460 (金1両永153文2分)

(註) 『いまいち市史』通史編Ⅱ、222・228頁所収の表の一部を転載。渡方米の合計は4,307.5460石となるが、市史では合計が4,300.6150石(差引残米合計は3,384.2541石)となっている。表中の渡方数値の一部に若干の誤りがあるものと思われる。

であった⁽⁹⁸⁾。これらの代官はいずれも下野国に支配地をもっていたことから、詰米は同国幕領村々から取り立てられたものであったことがわかる。事実、「金銀米納方御定」・「野州今市御蔵詰之事」には、「下野国御年貢米之内、日光今市御蔵へ御詰米有之候」、「野州今市御蔵掛り御代官吟味之上、年々御遣方・御詰米外、御代官所野州御物成米之内御蔵最寄村々も詰候積り、年々御代官と割賦いたし、伺書差出候節吟味之上割賦御印状差出候事」とある⁽⁹⁹⁾。「前年諸渡方残米」は、前年からの繰越分三五〇石余である。渡方は、日光奉行支配の役人、別頭・一坊・神人などの日光山関係者、八王子千人頭・同心、御蔵詰手代・御蔵番への切米扶持米・給米などが二九一〇石余、寛政四年以降に「新御領」村々上知引替分として支出されるようになった日光山諸給人への配当米である「日光配当米」が九一八石余、祭礼の際の馬飼料等二〇〇石など計四三〇〇石余であった。そして、差引合計の三三八四石余が翌年に繰り越された。

今市御蔵米は詰米とよばれたが、城詰米や囲米のように一

定の米高を翌年まで詰米・囲米し、新米などで詰め替えた後に古米を払米や諸渡方に使用するというものではなかった。前年の詰米を元に翌年の諸渡方が行われ、残米が繰り越されたのである。しかし、安政元年の場合でも明らかに、前年度からの繰越米（「前年諸渡方残米」）が相当残されており、その年に使用される「当年御詰米」は必ずしも多くはなかった。つまり、繰越米で翌年の諸渡方の大半が確保される体制がとられていたのであって、新米の詰米分は詰替米的な役割を担ったものと考えられるのである。

今市御蔵米の果たした機能は、宇都宮城の城詰米と密接な関係があった。宇都宮城の城詰米は、寛永一〇年から開始されたが、この城詰米は慶安元年・二年、寛文三年には將軍日光社参の御供衆への扶持米として使用されている。また、承応元年、明暦二年、万治三年（一六六〇）〜寛文四年にかけては、將軍の廟所・仏殿普請、日光御殿・神橋修復などの大名御手伝普請にかかわる扶持米として使用された。⁽¹⁰⁰⁾御手伝普請に際しての扶持米は、宇都宮から今市御蔵に運び込まれ、そこで支給されたのであった。その後、將軍の日光社参は三回、大名御手伝による日光諸堂社の普請は一八回ほど行われている。⁽¹⁰¹⁾しかし、その際に宇都宮城の城詰米が利用された形跡は今のところない。このことは、日光山・日光神領に関わって宇都宮城の城詰米が果たしてきた機能・役割が次第に今市御蔵に吸収されていったことを示していると考えられる。

文久三年の事例でみてみよう。この年、日光御宮修復に際しての作事方への渡米が在庫米では不足する事態が起った。七月から十月までの諸渡方はおよそ二四〇〇石余が必要と見積もられたが、七月時点での有高は一六三三石余であった。したがって差引七六七石余の米が不足する見通しとなったのである。そこで御蔵掛り代官は、御蔵最寄りの幕領・大名領作徳米、大名領払米のうちからおよそ一〇〇〇石を買い入れたいと幕府勘定所に伺い出た。これに対

し、同年七月に勘定奉行・同吟味役は「申立之通り為取計可申積ニ御座候」と許可したのである。⁽¹⁰²⁾そして、翌元治元年には米一〇〇〇石が買い入れられたのであった。ここからも今市御蔵米が扶持米・給米として使用されたことが確認できる。

さらに、元治元年三月のいわゆる天狗党の乱の際には、諸家の兵士が日光山を警護するために続々と登山してきた。こうした状況を背景に、日光奉行は勘定奉行に対して、兵糧米不足の時には自分手形をもって今市御蔵から米を受け取りたいとの願書を提出した。勘定奉行は米五〇〇石を見当に許可し、これを受け日光奉行は早速受取りのための準備を始めたのであった。このように、今市御蔵米は日光山・日光神領における軍事動員に際しての兵糧米としても使用されたのであり、城詰米同様の性格・機能を有していたのであった。

慶応四年の三月頃には、今市御蔵には米六一一三俵余が貯えられていた。日光奉行新庄右近将監(直温)は、今市御蔵掛り代官山内源七郎(崇正)に対し、不穏な情勢のもとでは急場に臨んでの米の受取りが困難であるとして、米五〇〇俵を日光山内に預かることを申し入れた。そして、新庄の預り手形で米を引き渡した結果、御蔵の残米は一一〇〇俵余となった。しかし、この米も四月には江戸からの脱走兵に略奪されてしまったのである。

今市御蔵は、今市御蔵掛りの幕府代官の管理のもとにおかれたが、掛り代官は、寛政期以降は下野国などに支配地を持つ関東代官(支配のための陣屋をもたない)や下野国真岡代官、同国東郷代官などがつとめている。そして手付(あるいは手代)二人が今市御蔵に詰めて(「今市詰」、御蔵番(定員四人、田中家と柴田家が代々世襲で各家二人ずつ)とともに御蔵米の出納・警備の任にあたった。なお、明和年間頃から、御蔵の防火の番として、近隣の瀬川村から一九人・千本木村から一人の計三〇人が今市御蔵所火消御用人足として徴発されるようになっていた。

慶応四年五月十八日、神奈川裁判所副総督鍋島直大は大総督府より下総・下野地方の鎮撫を命じられ、その結果、五月二十二日には下総古河宿に下総野鎮撫府が設置された(六月三日宇都宮に移る)。また、六月二十九日になると、下野国知県事鍋島道太郎は「日光今市御蔵掛り」を命じられた。⁽¹⁰⁸⁾ 今市御蔵は、下野国知県事支配の時代、さらには日光県下でも米蔵として使用された。しかし、幕府管理の御蔵としての今市御蔵は、同年三月末頃にはその役割を終えた。

(五) その他の御蔵

(I) 浦賀御蔵と下田御蔵

相模国三浦郡浦賀にも幕府御蔵が置かれた。享保五年十二月、幕府は下田奉行を廃止して浦賀奉行を置き、同時に下田役所・番所を浦賀に移した。下田には、浦賀奉行所の出先機関として主に難船処理にあたる下田御用所が置かれた。「下田御番所御取立帳」には、(一)下田役所には茅葺きの「拾間蔵」があつたが大破したため、寛文末年に瓦葺きの「千俵蔵」に建て替えられた。そして、(二)与力・同心の切米・扶持方はこの御蔵から支給されたが、元禄五年からは岡方村郷蔵が「千俵蔵」の代わりを果たすようになったと記される。⁽¹⁰⁹⁾ 寛政五年の記録に「御米蔵跡 七畝六歩坂下町裏通在之」とあるのは、「千俵蔵」のことと思われる。

下田役所および番所を廃止して浦賀役所・番所を置いたのは、下田湊が風波の影響により船の入湊が難しいためとされている。⁽¹⁰⁶⁾ しかし、江戸湾口への移転は、単に入湊の便を図るといふにとどまらず、江戸へ搬入される諸商品の正確な掌握という目的をもつものであつたことは間違いない。諸船は、以後浦賀において船改めをうけ、その後江戸湾に入ることになったのである(享保七年五月以降、船石数に依じて石銭を徴収した)。番所の浦賀移転は、享保期の経済政策などとの関連で理解しておく必要がある。

浦賀奉行は、設置時には一人であったが文政期には二人となった。そして、その後一人・二人を繰り返し、文久二年七月以降は一人となって維新时期をむかえた(文政二年正月〜天保十三年十二月と弘化元年五月〜文久二年七月の間は二人、なお、文久二年七月六日には奉行に浦賀表在住が命じられた)。浦賀奉行の属僚は、時期により構成・人数に変化・増減があるが、文久二年の時点では、浦賀奉行支配組頭一人、与力二四騎(うち与力見習四騎)、与力過人一騎、同心九〇人(うち同心組頭五人、同心組頭見習三人、仮抱二七人)、足輕四〇人、船頭九人(うち三崎押送形韋駄天丸船頭一人)、水主一三三人(うち三崎押送形韋駄天丸水主一人)などがいた。浦賀奉行の役高は一〇〇〇石、役料五〇〇俵(元文三年、なお、嘉永六年以降の場所高は二〇〇〇石)であったが、文政三年十二月以降は役知(役料)一〇〇〇石となった(浦賀最寄りで役知が支給された。慶応三年九月に役金制に変更となるが、役知村々引渡は同四年四月⁽¹⁰⁷⁾)。また、このほか浦賀奉行による預所支配があり、相模国三浦郡一帯に享保六年に八一九石余、文化八年九七二石余、文政四年以降天保十四年六月まで六五一七石余、その後弘化四年六月までが二九九三石余、そしてそれ以降も八一二石余〜三五二七石余などとなっていた。⁽¹⁰⁸⁾浦賀奉行支配組頭は、役高一五〇俵で役料は二〇〇俵、役金一〇〇両であった。与力は、享保期には一〇騎で、一騎につき七五俵(四斗入り、以下同じ)の切米であったが、文政四年以降一〇〇俵となり(同年に六騎増員となるが、実際には二騎分の切米二〇〇俵で同見習四騎が認められて計一八騎)、さらに天保十四年以降は現米八〇石となった。文久二年には、与力は見習を含め二四騎となっているが、一九騎に八〇石ずつ、一騎に八〇石のうち地方取り分二石五斗を除き七七石五斗、見習四騎に五〇俵(二〇石)ずつを支給していた。一方、同心は、文政四年に二四人が増員され七四人となったが、全員に二〇俵二人扶持が支給された(それまでは五〇人中四一人が二〇俵一人扶持、九人が二〇俵二人扶持。文政四年以降は、それまでの同心組頭五人に三人の新規組頭見習を加え、組頭には二人扶持、同見習には一人扶持の手当をそれぞれ加算して支給)。「吏徴別録」では、天保十四年五月以降一〇石三人扶持が支給されたとしているが、文久二年

の場合では、同心九〇人のうち六三人は切米一〇石、仮抱えの二七人が切米二〇俵(三斗五升入)であり、扶持方は、同心組頭五人に六人扶持ずつ(三人扶持の手当が加算されている)、組頭見習三人と預所地方掛同心二人には四人扶持ずつ(一人扶持の手当が加算されている)、平同心五三人には三人扶持ずつ、そして仮抱えの二七人には二人扶持ずつ、がそれぞれ支給されたのであった。⁽¹⁰⁹⁾

浦賀御蔵は、西浦賀村館浦に置かれ、安政三年に同村荒巻に「所替・建増」された。移転後の御蔵敷地は約六〇〇坪、御蔵建坪一二四坪、御蔵棟数五棟七戸前であり、敷地内には番人小屋・会所なども建てられた。また、近くの屋敷地に手代居小屋があった。⁽¹¹⁰⁾ 浦賀御蔵(「御蔵所」)は馬喰町御用屋敷詰代官や関東代官によって支配・管理された御蔵であり、浦賀奉行所関係支出米や非常用備蓄米などが収納された(「浦賀御詰米」とよばれた)。文政四年に相模国御備場松平肥後守(容衆)支配地五〇〇〇石が浦賀奉行預所となったが、その際の「進達留」には「是迄非常之節為御用意大貫次右衛門御預御蔵之内江玄米千五百石、私共江御預御備金千両御座候」とあつて、⁽¹¹¹⁾ 浦賀御蔵には一五〇〇石の詰米が、また浦賀奉行のもとには一〇〇〇両の備金があつたことがわかる。また、「県令集覧」によると、各代官の「浦賀御蔵所詰」手代は二人あるいは三人(三人の場合、一人は見習の可能性もある)いたことがわかるが、彼らは浦賀「御蔵所」最寄りの小屋に定居の者であつた。つまり、彼らは浦賀御蔵支配代官の交代とは関係なく連年御蔵の警備や出納に携わつたのである。そして、御蔵詰手代には二人扶持ずつが、また、御蔵番(一人)には一人半扶持が支給された。なお、嘉永六年の詰米からは、それまで定居手代が納方を一手に取り計らっていたのを改め、浦賀御蔵詰を行う代官の手付・手代による立会出役が義務付けられた。⁽¹¹²⁾

寛政・享和期の状況を記した「金銀米納方御定」には、「相模国浦賀御年貢米者浦賀御蔵江納」とあり、また、安永末年頃の「相州浦賀御蔵詰米之事」には、「是者、浦賀附御代官所年々御物成米之内を以諸渡方ニ相詰、翌年新米を

以詰替、伺書差出候節吟味仕候、尤右御蔵詰米割賦者御勘定所ニ而者致し不申、御印状も差出不申候」⁽¹¹³⁾とある。

「文久二戌年浦賀御蔵御勘定目録」の内容を示した表7から浦賀御蔵の機能・役割の一端をさぐってみよう。この史料は、文久二年に浦賀御蔵を管理した馬喰町御用屋敷詰代官竹垣三右衛門(直道)が、同年分の勘定仕上を慶応三年三月に行つて幕府勘定所に提出したものである。⁽¹¹⁴⁾この年浦賀御蔵に詰められた米は、竹垣三右衛門代官所および同人別廉当分預所である武蔵国久良岐郡・相模国鎌倉郡村々からの年貢米一五〇七石余と浦賀奉行預所相模国三浦郡村々からの年貢米五三二石余、差出粃・返納米五石余などであり、これに前年からの繰越米一四二三石余などを加えると合計三四六八石余となった。また、金方収納は、浦賀奉行支配組頭・与力・同心・足輕など奉行所諸役人への切米・宛行米の半石代金として幕府御金蔵より受領した二六八五兩三分余があつた。一方、渡方は、浦賀奉行支配組頭をはじめとする奉行所諸役人への切米・宛行米・扶持米(切米・宛行米は、支給高の半分米渡し、半分金渡し)、御備場付御用船船頭・水主などへの扶持米、御蔵詰手代・御蔵番扶持米、御用船用米をはじめとする伊豆七島関係支出など、合計二九一〇石余・金二六八五兩余であり、差引五五七石余が翌年に繰り越された。このうち、浦賀奉行所諸役人・船頭・水主などへの渡米は浦賀奉行の裏判手形で支払われたが、御蔵詰手代・御蔵番扶持米は代官の裏判手形で、伊豆七島関係諸支出は韭山代官江川太郎左衛門の裏判手形で、それぞれ支払われたのであつた。

文政四年に相模国御備場松平肥後守(容衆)支配地五〇〇〇石が浦賀奉行預所となつたことは前述したが、その際浦賀奉行は浦賀支配に関する伺いを老中水野出羽守(忠成)に提出している。その中で、浦賀御蔵に関しては、(一)浦賀御蔵の非常用意困米一五〇〇石・浦賀奉行預りの備金一〇〇〇兩について、「右両様共無益儀、以来御用意ニ及間敷哉、御困米之方は別而更米其外御失費之儀も可有御座哉と奉存候」とし、また、(二)与力・同心への切米扶持方支給

表7 浦賀御蔵詰米納渡

(文久2年)

費 目	石 高 ・ 金 額	内 容
諸渡方残米 浦賀御蔵詰米 同 差出粃 八丈島流入扶持返納 御金蔵より受取	1,423.3250石 1,507.6415石 532.4090石 4.2115石 0.4920石 金2,685両3分永249文6分	万延元年詰米4,430.4741石より文久元年10月までの諸渡方・同斗方減米引残 竹垣三右衛門代官所・別廉当分預所年貢米 (文久元年分) 浦賀奉行預所年貢米 文久元年詰米2,040.0505石納の際に差出米 流入船中扶持米受取過ぎ返納分 浦賀奉行支配組頭その他属僚への切米等半石代金
詰米・金合計 3,468.0790石・金2,685両3分永249文6分		
浦賀奉行支配組頭切米残米	19.7750石	1人、150俵 (3斗5升入で52.5石) の内12.95石浅草御蔵渡済み、残米半石分
同半石代 (19.775石代)	金 35両 3分永226文	同断半石代渡
同支配組頭役料	金 35.0000石	役料200俵 (3斗5升入で70石) の半石分
同半石代 (35石代)	金 69両1分永66文6分	同断半石代渡
浦賀奉行組与力・同見習切米	金 838.7500石	与力20騎・同見習4騎 (20騎へ80石ずつ・4騎へ50俵(20石)ずつ) の半石分 (*1)
渡	金1,602両 永120文9分	同断半石代渡
浦賀奉行組与力1騎切米	80.0000石	与力過人1騎
浦賀奉行組同心切米	409.5000石	同心90人 (63人へ10石ずつ、27人へ20俵 (7石) ずつ) の半石分
同半石代 (409.5石代)	金 782両 永66文8分	同断半石代渡

足輕宛行米	84.0000石	浦賀御備場付足輕40人へ4石2斗ずつ (計168石) の半石分
同半石代 (84石代)	金 160両1分永174文	同断半石代渡
船頭手当米	18.9000石	浦賀御備場付御船船頭8人・三崎押送形章駄天丸船頭1人へ4石2斗ずつ、半石分
同半石代 (18.9石代)	金 36両 永95文3分	同断半石代渡
浦賀奉行組与力扶持	11.5200石	浦賀奉行預所地方掛与力2騎へ3人扶持ずつ (計6人扶持、但し384日分)
浦賀奉行組与力野扶持	28.8000石	江戸・三崎在勤与力3騎へ5人扶持ずつ (計15人扶持、但し384日分)
同 同心組頭扶持	57.6000石	同心組頭5人へ6人扶持ずつ (計30人扶持、但し384日分)
同 同心扶持	408.9600石	同心80人(53人へ3人扶持ずつ、27人へ2人扶持ずつ計213人扶持、但し384日分)
同 同心組頭見習・同心扶持	38.4000石	同心組頭見習3人・預所地方掛同心2人へ4人扶持ずつ (計20人扶持、但し384日分)
同 同心野扶持	23.0400石	江戸・三崎・下田詰同心6人へ2人扶持ずつ (計12人扶持、但し384日分)
同 同心野扶持	7.6800石	千代崎台場詰同心4人へ1人扶持ずつ(計4人扶持、但し384日分)
足輕扶持	153.6000石	御備場詰足輕40人へ2人扶持ずつ (計80人扶持、但し384日分)
船頭扶持	34.5600石	御備場付御用船船頭8人・三崎押送形章駄天丸船頭1人へ2人扶持ずつ (計18人扶持、但し384日分)
水主扶持	255.3600石	御備場付御用船水主122人・三崎押送形章駄天丸水主11人へ1人扶持ずつ (計133人扶持、但し384日分)
軍艦付船頭・水主扶持	57.6000石	軍艦付船頭・水主30人へ1人扶持ずつ(計30人扶持、但し384日分)
御蔵詰手代扶持	11.5200石	御蔵詰手代2人へ3人扶持ずつ (計6人扶持、但し384日分)

御蔵番扶持	2.8800石	御蔵番 1 人へ扶持米 (1 人半扶持、但し384日分)
浦賀奉行組与力・同心野扶持	14.5150石	浦賀・三崎諸場所修復御用勤与力 1 騎・同心組頭 2 人・同心 4 人へ扶持米
同 同心組頭野扶持	0.4200石	浦賀表砲術角場修復御用勤同心組頭 1 人へ扶持米 (3 人扶持、28 日分)
同 与力・同心野扶持	14.1600石	浦賀最寄海上取締に付仮雇与力 2 騎・同心 2 人へ扶持米 (計24人扶持、118日分) (*2)
同 同断	11.0500石	浦賀御備船造立御用勤与力 1 騎・同心組頭 1 人・同心 3 人へ扶持米
手当米	3.5000石	江川代官支配所伊豆国大島百姓岩次郎祖母へ長寿手当米
島々百姓江被下米	63.9880石	江川代官支配所伊豆国島々百姓へ定式被下米 (御蔵・神津両島以外の分)
御用船用米その他	153.0000石	伊豆国八丈島御用船用米服部敬次郎ほか 3 人へ渡
流入扶持	0.3120石	上乘船頭・水主 8 人扶持米 (三宅島一八丈島)
同	2.0250石	流入 6 人出島後引渡までの扶持米 (一日 5 合、延日数405日)
同	4.8000石	八丈島送り流入 2 人、船頭・水主上乘扶持米
八丈島地役人扶持	5.7600石	八丈島地役人 1 人へ扶持米 (3 人扶持、但し384日分)
諸渡方計立減米	59.9540石	諸渡方米のうち2621.090石分の計立減米
諸渡方合計	2,910.9290石・金2,685両3分永249文6分	
諸渡方残米 (翌年繰越分)	557.1500石	

(註) 「文久二戊年浦賀御蔵御勘定目録」(三井文庫蔵)により作成。(*1)与力20騎のうち1騎については、切米80石のうち2.5石分地方取につき、この分を除く。(*2)与力1騎につき10人扶持ずつ、同心1人につき2人扶持ずつ支給。

については、これまでのように浦賀御蔵米からではなく、村方に預け置いた浦賀奉行預所収納米から浦賀奉行が渡すようにしたい、との意向を示している。⁽¹⁵⁾ このいずれもが「是迄之通」として却下されているが、ここからは浦賀御蔵支配代官と浦賀奉行所との関わりを見直し、自らの支配権限の拡大を図ろうとする浦賀奉行の姿をみてとることができる。

文久二年の場合は、浦賀御蔵を支配・管理した竹垣三右衛門が自らの支配地の年貢米を浦賀御蔵に詰米していた。しかし、浦賀御蔵には、必ずしも御蔵を支配・管理した代官支配地の年貢米のみが詰米されるとは限らなかった。一例を挙げてみよう。嘉永四年に浦賀御蔵を管理していたのは馬喰町御用屋敷詰代官青山録平(秀堅)であった。ところが、青山は、翌五年閏二月二十八日西丸広敷用人へ役替となり、青山に代わって浦賀御蔵を管理したのは同じく馬喰町御用屋敷詰代官の斎藤嘉兵衛であった。ところが、この年浦賀御蔵には斎藤嘉兵衛支配地年貢米のほかに伊豆韭山代官江川太郎左衛門(英龍)支配地の相模・伊豆両国年貢米のうち二五五四石三斗二升八勺三才が詰米されることになったのである(詰米は斎藤嘉兵衛に引き渡されている)⁽¹⁶⁾。また、天保十二年の場合、浦賀御蔵を支配・管理したのは馬喰町御用屋敷詰代官中村八太夫であった。そして、中村は、この年の十一月八日二丸留守居に役替となったのであるが、浦賀御蔵には、中村八太夫支配地から六八石六斗六升三合余のほか、伊豆韭山代官江川太郎左衛門支配地から二一〇石七斗七升二合余、さらには浦賀奉行預所の年貢米一五〇〇石四斗四升五合余(同年十月納め、浦賀奉行預所は西浦賀村ほか二一カ村で支配高六一七石三斗三升二合余。なお、年貢米のうち城ヶ島村分四石八斗五升九合余は石代納)⁽¹⁷⁾が納められたのであった。⁽¹⁸⁾ なお、浦賀奉行預所の年貢米については、従来から「向寄御代官」に渡すこととされてきたが、浦賀御蔵は同じ「向寄御代官」によって支配されることが多かった。したがって、輸送の便からも、浦賀奉行預所の年貢米(一部あるいは全部)は、浦賀御蔵に詰米されたと考えられる。

浦賀御蔵米は詰米とよばれたが、文久二年の事例をみる限り、城詰米や囲米のように一定の米高を翌年まで保存し、新米などで詰め替えたのち古米を払米あるいは諸渡方に使うというものではなかった。文久二年の浦賀御蔵勘定目録には、「去ル酉年御物成、去ル戌年御勘定元ニ組如斯」、「去ル酉御詰米其外合米三千四百六拾八石七升九合之内、去ル酉十一月去ル戌十月迄米貳千八百五拾石九斗七升五合諸渡方・米五拾九石九斗五升四合諸渡方計立減米引之、残米書面之通去ル戌年御勘定払ニ相立如斯」とあつて、文久元年の詰米を元に翌年の諸渡方が行われたことがわかる。しかし、「詰米」という表現が用いられることから、浦賀御蔵においても、先にみた今市御蔵同様に、基本的には諸渡方の後でも一定量の米が備蓄米として残されて翌年に繰り越される体制がとられていたものと考えたい（但し、文久元年の場合繰越米は諸渡高の半分程度と予想されるが、同二年の場合は繰越米が五五七石余と少量であつた）。ともあれ、馬喰町御用屋敷詰代官をはじめとする諸代官および浦賀奉行がその支配地・預所から年貢米を浦賀御蔵に詰米し、それが浦賀奉行所諸役人（足輕・水主含む）への切米扶持米・流人諸経費、伊豆七島百姓への被下米などに使用され、残米が翌年に繰り越されたのであつた。なお、前述のように、安永末年頃は幕府勘定所からの浦賀詰米割賦指定がなかったようであるが、幕末期になると、浦賀御蔵支配代官とは異なる代官の支配地から年貢米が詰められたりしているので、詰米に際しては幕府勘定所からの指示があつたとみてよいであろう。

幕末期に至り、海防問題の緊迫化にともなつて下田奉行が再び置かれた。下田奉行には小笠原加賀守（長穀）が任せられ（天保十三年十二月二十四日）、下田奉行所が再開された。同十五年二月に一旦廃止されたが、ペリー来航・日米和親条約締結などがあつて、嘉永七年三月再々度置かれ、伊澤美作守（政義）が浦賀奉行から下田奉行に就任した（天保十三年再置時には一〇〇〇石高・役料一〇〇〇俵、嘉永七年には二〇〇〇石高・役料一〇〇〇俵、万延元年閏三月廃職^(四)）。前述したように、下田には享保五年以前にも御蔵・郷蔵があつたが、再置後には非常用米（兵糧米）を収納するための御

蔵が設けられた。しかし、再置後しばらくの間は下田御用所か郷蔵が仮に使用されたと考えられ、安政四年に至って新規に建造された。御蔵の規模は、御蔵敷地五〇四坪、御蔵建坪一〇〇坪、御蔵二棟（梁間五間・桁行一〇間）、そのほか御蔵番人居小屋兼米渡会所一棟、手代居小屋一棟であった。⁽¹²⁰⁾天保十四年四月に、非常の際にはおよそ三〇〇俵の兵糧米が必要ということになって、幕府勘定所では当初伊豆・韭山代官江川太郎左衛門支配地年貢米を詰米することを考えた。しかし、既に江戸廻米を行ってしまった後ということで、小田原城の城詰米の一部を回送して詰米することになった（運送は江川太郎左衛門が担当。但し、翌年には下田奉行所が一旦廃止されており、城詰米が実際に移送されたかどうかは不明⁽¹²¹⁾）。

嘉永七年の下田奉行所再開後しばらくの間は、下田奉行支配向の諸役人への切米扶持方は江戸浅草御蔵から船で運ばれていた。安政三年に下田御蔵掛りに韭山代官江川太郎左衛門が任ぜられ、「相州浦賀御蔵之振合ニ准シ納払取計」うことになったが、同年分の米四〇〇石は九月から三回に分けて浅草御蔵より受け取り、江川代官の手によって品川沖から搬送されている。⁽¹²²⁾しかし、下田御蔵が竣工したこともあつてか、同四年分からは下田奉行預所および江川代官支配地の年貢米の一部が下田御蔵に詰められ、支配組頭・支配調役組頭・支配調役をはじめ与力・同心・足輕・水主に至る下田奉行配下諸役人の切米扶持方、役料、合力米などの渡方に使用されるようになった。下田御蔵の詰米高がどれほどであつたかわからないが、先の安政三年の例からすると四五〇〜五〇〇石程度ではなかったかと推定される。そして、「下田御詰米」と呼称されることなどから、前述の浦賀御蔵とはほぼ同様の役割・機能を果たしたものと考えられる。つまり、下田奉行預所および江川代官支配地からの年貢米の一部を非常用米として詰米し、原則としては翌年詰替後にそれを下田奉行支配向諸役人への切米扶持方、役料、合力米などにあてるといふものであり、実際には前年からの繰越米を中心に諸渡方にあて、新米で詰め戻す形をとつたと思われる。

(II) 神奈川・藤沢・三島・蒲原御蔵

近世初期には、武蔵国神奈川、相模国藤沢、伊豆国三島、駿河国蒲原に置かれた御蔵でも詰米が行われた。延宝四年時点での詰米高は、三島の三〇〇〇石以外は⁽¹²³⁾一〇〇〇石であった（貞享四年の詰米高は蒲原が五〇〇石に減少している以外は同じ）。慶長期以降これらの地には、家康の駿府往復、あるいは家康・秀忠・家光の三代にわたる上洛、鷹狩りなどの遊覧のための休憩・宿泊施設として御殿が設けられていた。これらの御殿御蔵に詰米が行われたのは、後述の近江国永原御蔵の例から推測すると寛永十年のことであり、翌年の家光上洛に備えるとともに、譜代諸大名の居域に一定量の米を備蓄させた「城詰米制」政策の一環としての措置であったと考えられる。

これらの詰米を管理したのは、その地を支配した代官であった。貞享四年前半の時点では、神奈川が関東郡代（代官頭）伊奈半十郎（忠篤）、藤沢が沼津代官国領半兵衛（重次）、三島が三島代官竹内三郎兵衛（信就）、蒲原が大宮代官（蒲原代官兼帯）井出治左衛門（正基）であった。なお、貞享四年の場合、蒲原詰米が不足した際には駿府代官（加島代官兼帯）古郡文右衛門（年明）支配所の年貢米を納入するよう命じられている。⁽¹²⁴⁾三島詰米については、「伊豆鏡・秘書」の三島御殿御鷹部屋の組垣に関する項目の中に「御蔵・御陣屋、是ハ五本組、此組垣壺ケ年置ニ組替、但し平助馬場除申、其外江川分迄ヘ当ル」と記される。⁽¹²⁵⁾さらに、同史料には「三島御蔵屋敷中畑之内四反三畝廿式步成ル、御詰米瓦御蔵長七間横四間ツ、三軒、但シ戸前式口ツ、」とあり、御蔵は寛文末年に二六二両一分余で建て直されたという。「三島御詰メ米」は三〇〇〇石（三斗五升入り、八五七一俵三斗五升）があつたが、この米は三島代官支配地の玉川組・谷田組・三島組村々から詰められていた。元禄二年「三島組四ヶ町村辰之御年貢米払方目録」にも、「米三拾八石壺斗

五升瓦御蔵詰米」とあつて、⁽¹²⁶⁾その後も三島組村々から詰米されていたことがわかる。

蒲原詰米に関する史料として、「竹橋蠹簡」(巻五)に収載された勘定組頭宛の加島代官古郡文右衛門(重年)書簡および勘定奉行・勘定吟味役宛の駿府代官外山小作(雅国)書簡があるが、そこでは蒲原詰米についてつぎのように記される。⁽¹²⁷⁾

一 神原御殿御詰米、例年賀嶋領・吉原領に納申候、升目之儀三斗八升入ニ申付候故百姓迷惑仕候間、江戸浅草御蔵前なども三斗七升入ニ而納申度と去年も百姓共訴訟仕候、殊駿府御城米も三斗七升入ニ御訴訟相叶申候間、神原御詰米も三斗七升入ニ納申度と百姓訴訟仕候通井出藤右方へ相談仕候處、三斗七升入ニ納置候而ハ公義少之御損之様と存候間、御勘定所へ可被得御下知由藤右被申候、定而右之段藤右方へ可被申上候間、可然様ニ御頭衆へ被仰達可被下候、恐惶謹言

ここから、(一) 蒲原詰米は、蒲原御殿内の御蔵に詰められたこと、(二) 寛文二年に蒲原代官領が解体して以降、延宝七年頃までの時点では、蒲原御蔵詰米は加島代官および大宮代官(蒲原代官兼任)支配地から行われていたこと、(三) 駿府城詰米が、百姓の要求によつて一俵が三斗八升入れから三斗七升入れに変更されていたこと、(四) 蒲原詰米(蒲原御蔵)は、大宮代官で蒲原代官兼帯の井出藤右衛門(正祇)が支配・管理していたと考えられること、などがわかる。⁽¹²⁸⁾

一方、元禄一〇年あるいは同十一年と推定される駿府代官外山小作の書簡には、「拙者御代官所駿州蒲原御殿跡絵図仕書付差上申候」とあるから、この頃には蒲原御殿は解体され、跡地は駿府代官支配地となっていたのであった。

前記各地の詰米規定高は、宝暦元年には、藤沢が一〇〇〇石増して二〇〇〇石となり、蒲原が一〇〇〇石に復して⁽¹²⁹⁾いるほかは変わりが⁽¹³⁰⁾ない。しかし、前記の各御殿は、蒲原御殿の例が示すように一八世紀初頭までにすべて姿を消している。また、延享二年の「諸国城詰御用米」では神奈川、藤沢、三島、蒲原における詰米高は記載されていない。⁽¹³⁰⁾

さらに、天保十四年時点での貯穀有高を示す「御囲籾大豆有高」でも前記各地の詰米は記載されていない。⁽¹³¹⁾ 宝暦元年の規定通りに詰米が行われていたかどうかは不明であり、詰米されなかった可能性もある。貞享四年の場合も規定通り詰米されたかどうかは確認できないが、詰米されたとすれば御殿が廃止されたところについては代官陣屋の御蔵・郷蔵であったと考えられる。ちなみに神奈川御殿の場合、御殿は神奈川陣屋・郷蔵に隣接しており、⁽¹³²⁾ 藤沢の場合も、代官陣屋の北側に馬場をはさんで御殿が建てられていた。⁽¹³³⁾ なお、前述の宝暦元年の「諸国御詰米」には「千石 信州伊奈」と記されるが、こちらの詳細も不明である。

二 畿内および畿内周辺の御蔵

(一) 大坂城御蔵

(I) 大坂蔵奉行

元和元年六月、幕府は、松平下総守(忠明)を伊勢国亀山から大坂に移封し、同閏六月には高槻に近江国長浜から内藤紀伊守(信正)を移すなどして、大坂および周辺地域の支配整備にのりだした。また、同五年七月には松平下総守(忠明)を大和国郡山に移して大坂市中とその周辺を幕領に組み入れた。その結果、大坂周辺の幕領は約七万石となり、さらに、寛永元年には、死去した高台院(秀吉正室)領の大部分を幕領に編入したのであった。⁽¹³⁴⁾ 大坂城は、元和五年七月の松平忠明転封にともなって名実ともに幕府直轄の城となったが、⁽¹³⁵⁾ 元和四年には周辺幕領の年貢米が大坂城御蔵に納入されているので、⁽¹³⁶⁾ 大坂城御蔵は元和四年には成立していたとみられる。

大坂御藏（大坂城西の丸・玉造御藏の大坂城御藏および難波・天王寺・浜御藏など。なお、本丸多門にも糶が貯えられていた）を管理したのは大坂藏奉行であつた。「吏徴別録」では、元和七年に初めて置かれたとして⁽¹³⁷⁾いるが、それより二年前の同五年には、伏見藏奉行であつた守屋八兵衛（昌房）と曾根勘六が大坂藏奉行に移り、さらに飯高弥五兵衛（貞次）・加藤平四郎（某）の二人も大坂藏奉行となつて⁽¹³⁸⁾いる。その後、元和七年から寛永四年頃までは二人と増減がみられたが、寛永五・六年以降は四人となり、寛文五年に「只今迄相勤候御藏奉行累年手代私曲ニ付不殘御免、右之跡役新規四人被仰付」として⁽¹³⁹⁾、それまでの大坂藏奉行全員が罷免された。そして同年十月に新たに酒井七郎左衛門（定之）・本間十左衛門（次忠）・石川市右衛門（一利）・小林十右衛門（直政）の四人が任命された。なお、正徳期頃までは大坂藏奉行はほとんどが大番から任命されていたが、享保期以降は御納戸方や御勘定などからも任命されるようになって⁽¹⁴⁰⁾いる。

享保期から宝暦七年までの定員・人数については、二人から四人程度であつたと考えられるが、はっきりと確定できない。「柳営補任」では、寛文五年十月から享保九年六月までは四人、それ以降元文三年二月までは三人、同年三月より寛保三年（一七四三）閏四月までは二人、延享元年二月より宝暦元年二月までは三人、宝暦元年三月以降は二人が就任したことになっている（宝暦七年十二月から同八年十二月までは三人）。そして、宝暦八年十二月二日に大坂藏奉行大原彦四郎（紹正）が役替となつたあとは、「本役兩人、大御番ヨリ在役兩人ニ定ル」として⁽¹⁴¹⁾いる。また、「吏徴別録」では、「寛保三年癸亥六月三日御勘定奉行支配、是迄は大坂町奉行支配、此時より増一員合三員」、「延享元年甲子二月晦日定役三員、仮役二員に定む」とある⁽¹⁴²⁾。さらに、「雜留」の「大坂御払米取捌候者之事」には、「御奉行（大坂藏奉行）者大坂町奉行支配二候処、其節（寛保三年）より御勘定奉行支配被仰付、御藏奉行兩人ニ而相勤候処、三人ニ被仰付、又

候宝暦八寅年と兩人ニ相成申候」(括弧内は引用者)と記される。⁽¹⁴²⁾ 延享二年の「御勝手向御用定」にも、「是迄御藏奉行ハ大坂町奉行支配ニ候処、御勘定奉行支配ニ被仰付、御藏奉行式人ニ而相勤候処三人ニ被仰付」とある。⁽¹⁴³⁾ 一方、『大坂御城代公用人諸事留書』の享保十七年と推定される条には、「御廻米并御囲米等納り候付、多分之俵数御藏奉行四人ニ而者御囲弁兼候付、御番衆之内仮役兩人被仰付誓詞相調候事」とあり、延享二年の条には「御藏奉行本役一人相増五人ニ相成候付、御役宅出来之事」とある。⁽¹⁴⁴⁾ 定員と実際の人数との違い、仮役を含んでの人数か否かといった面があるかと思われるがはつきりしない。一応ここでは享保七年までは四人が、それ以降元文三年頃までは三人が、それ以後寛保三年までは二人が、延享元年(寛保四年)から宝暦八年までは三人が任命されたと考えられることを述べるにとどめたい。なお、宝暦八年以降幕末期まで定員は二人となっている。

ところで、この期の定員・人数の確定を困難にさせているものに大番による仮役(在役)があつた。大坂藏奉行の仮役は享保七年から始められたが、当初仮役は大番出役の浅草藏奉行が勤めた。享保七年四月九日に、三人の大坂藏奉行に加えて大番出役の浅草藏奉行朝夷伊織(義智)が大坂藏奉行仮役に任ぜられた。『寛政重修諸家譜』には「仮に大坂の御藏奉行をつとめ」と記される。⁽¹⁴⁵⁾ そして、翌八年五月に、朝夷伊織に代わって今度は大坂在番永井播磨守(直亮)組御手洗吉左衛門(通定)が任命されたのであつた。なお、同年八月には御手洗に代わって在番板倉下野守(重浮)組根岸又兵衛(正直)が仮役を務めるなど、以後は大坂在番の大番に仮役が命じられるようになっていく。⁽¹⁴⁶⁾ そして在番交代の毎年八月に仮役の大番も交代したのであつた。「柳営補任」では、元文三年に大坂藏奉行筒井主税(順明)の跡役が任命されずに、代わりに大坂在番の大番に仮役が命じられ、それから大番の仮役が二人となつたとする。そしてさらに、宝暦八年には大番による仮役の員数が二人に定められたとしている。⁽¹⁴⁷⁾ 仮役は当初一人であり、享保末年頃には

二人が任ぜられることがあって、元文三年頃より二人が通例となったということであろう。大坂蔵奉行の補充の形で、あるいはまた、西国筋虫付損毛にともなう廻米等の御用繁多を補う目的で仮役が任命されていることなどから、当初は臨時的な措置で置かれたものが次第に恒常的な職となったものといえよう。

大坂蔵奉行には合力米現米八〇石が支給され、寛文五年から元禄元年までは、配下に御蔵手代二人(金一〇両扶持方三人扶持ずつ支給)、小揚組頭四人(金五両扶持方二人扶持ずつ支給)、小揚一二〇人(金三両扶持方一人半扶持ずつ支給)などがいた。⁽¹⁴⁹⁾そして、元禄二年十二月から小揚が一〇〇人に削減されるとともに、享保七年十一月には御蔵手代組頭二人が認められ(役金五両ずつ支給)、同時に平手代八人が増員された。⁽¹⁵⁰⁾また、文化五年では、御蔵手代二〇人、小揚頭四人、小揚一〇〇人となっている。⁽¹⁵¹⁾なお、大坂蔵奉行には御蔵手代や小揚のほか、玉造御蔵や難波御蔵の御蔵番も付属していた。⁽¹⁵²⁾

初期の大坂蔵奉行の支配関係については不明な点もある。「忍之杜」には、「大坂御蔵奉行支配之古事、前々御城代支配に候處、元禄二巳九月京都町奉行支配に成、元禄八年乙亥十二月日大坂^(坂カ)町奉行支配に成」と記される。⁽¹⁵³⁾『大阪市史』や『新修大阪市史』では、元禄八年から大坂蔵奉行が大坂町奉行の支配となったことなどは記すが、それ以前の支配についてはほとんど記述されない。『京都御役所向大概覚書』には、「大坂御蔵衆之儀、先年ハ京都支配ニ候處、元禄^(ママ)子年^(ママ)小出淡路守・松前伊豆守役儀之内御断申上支配離れ、それハ大坂町奉行衆支配ニ被仰付候」とある。⁽¹⁵⁴⁾「竹橋余筆別集」の元禄二年十二月二十九日の「覚」では、二条・大津・高槻・大坂の四カ所御蔵における日雇賃や諸道具などの入用金銀について、これからは各所の御蔵奉行判形手形に京都町奉行裏判をもつて渡すよう命じている。⁽¹⁵⁵⁾ところが大坂町奉行支配に移行した時の同八年十二月十九日の「覚」では、「大坂御蔵奉行、今度大坂町奉行支配被仰付、

(中略) 諸色御入用金銀者御藏奉行裏判手形ニ大坂町奉行以裏判向後可被相渡候」としている。⁽¹⁵⁾ こうしたことから、大坂藏奉行は、元禄二年に京都町奉行支配となり、同八年に京都町奉行支配から大坂町奉行支配に移行したと断定してよいであろう。なお、元禄二年以前の支配の変遷の詳細については、今後の検討に委ねたい。

大坂藏奉行は、その後寛保三年から勘定奉行の支配に移行した。これは同年に大坂藏奉行鶴殿三郎右衛門(長寛)が「勤方不宜筋も有之二付」との理由から罷免され、大坂御藏詰米の払下げの実態調査のため勘定方・浅草藏奉行が大坂に派遣されたことが契機となったのであった。⁽¹⁶⁾

前述したように、大坂藏奉行が管理した御藏は、非常用の糶が貯えられていた大坂城本丸の多門(良の櫓)のほか、西の丸御藏、玉造御藏、浜御藏、難波御藏、天王寺御藏などがあつた(難波御藏・天王寺御藏については次節参照)。このうち西の丸御藏は、元和八年六月本丸・二の丸普請に際して一二棟が建造され、寛永二年には西の丸御藏への新堀が掘られ、その後玉造御藏二九棟が建設された。⁽¹⁷⁾ 元禄六年の時点でのおよその貯蔵高は、西の丸御藏は一二棟三五戸前で五万八五〇〇石余、玉造御藏は二九棟六四戸前で一五万四八〇〇石余、浜御藏は二棟七戸前で一万二六〇〇石余であり、このほかに糶一万九七四〇石八斗余があつた(三〇一石三斗九升六合は本丸の多門、残りは西の丸御藏八戸前に貯蔵⁽¹⁸⁾)。また、幕末の安政・文久期頃には、西の丸御藏は二五棟六〇戸前(塩増蔵三棟一〇戸前などを含む)のうち二〇棟四五戸前に糶およそ七万二五〇石が貯蔵され、玉造御藏(総地坪一万九〇〇〇坪)の三一棟七二戸前には糶およそ一万二〇〇〇石が貯蔵されていた。⁽¹⁹⁾ なお、正徳四年頃は、これらの御藏修復に際しては、修復入用銀のうちの竹・縄・藁・人足代銀が和泉・河内・摂津・播磨四カ国幕領村々に賦課され、徴収された。⁽²⁰⁾

大坂城本丸の多門・西の丸御藏・玉造御藏に貯蔵された米・糶・大豆・糶等の出納には、御藏奉行衆(大坂藏奉行衆)、

大番組の蔵目付衆、城代家来・両定番与力・両町奉行与力の蔵目付衆が立ち会うことになっていた。⁽¹⁶²⁾このうち城代家来・両定番与力・両町奉行与力の蔵目付は五カ所蔵目付とよばれた。⁽¹⁶³⁾そして、これらの御蔵の戸前封印は、御蔵奉行衆、大番組蔵目付衆、五カ所蔵目付の連判によつて行われた（大番組の蔵目付衆が交代の時には御蔵の封印はすべて付替）。城代（家来）・定番（与力）が関与したのは、大坂城御蔵に非常用備蓄米である城詰米が貯蔵されており、その直接的な管理が彼らに委ねられていたことによるものであろう。文化五年時点での定式御蔵日は、毎月四日・九日・十四日・十九日・二十四日・二十九日であり、扶持米は毎月二十一日の渡りであった（切米は二月・五月・十月の渡り）。なお、雨天の場合渡りは翌日に順延された。蔵方の勘定は例年七月と十二月（御用繁多の際は翌年一月）に行われたが、勘定目録作成には大坂蔵奉行衆、大番組蔵目付衆、五カ所蔵目付が立ち会い、連印した。また、勘定目録は大番組蔵目付衆が毎年八月交代の際に江戸表勘定所に持参・提出した。さらに、五カ所蔵目付の城代家来、両定番与力、東西両町奉行与力は一人役とされたが、難波・天王寺御蔵ができたことともなう御用繁多を理由に、宝暦三年五月に五カ所蔵目付たちは加人の申請をした。その結果、翌年二月に両定番与力の蔵目付についてのみ一騎ずつの加人が認められた。

御蔵に貯蔵された塩・味噌も兵糧米と同様重要な軍事物資であった。このため当初は大坂在番の大番が管理していたが、元禄十一年十二月頃に大坂蔵奉行の管理に移行した。⁽¹⁶⁴⁾塩は、三〇〇〇石を西の丸御蔵に、三〇〇石を本丸多門に納め、味噌は毎年一万八五〇〇貫目を製造し、常に二年分の味噌を西の丸御蔵に貯えたといわれる（三年の古味噌は入札払下げ）。⁽¹⁶⁵⁾文化五年頃は、味噌・鰯味噌漬は西の丸御蔵に貯蔵され（玉造御蔵にも塩噌方預りの御蔵があった）、塩噌蔵役の御蔵奉行（兼役）・塩噌奉行（大坂在番の大番二人）・城代家来（一人）・両定番与力（計二騎）・両町奉行与力（計

二騎）が出納の任にあたっている。⁽¹⁶⁶⁾そして、春屋で十月下旬から煮込みが始まり（大豆二〇〇石・麴米六八石・塩一〇三石六升を使用）、十二月上旬に終了した。その後直ちに一カ年分の勘定を行ない勘定帳を作成したが（大坂城代へも披見）、勘定目録は翌年の七月上旬にその年の払味噌勘定なども記入して作成し、塩蔵役連印のうえ塩味噌奉行衆が毎年八月交代の際に江戸表勘定所に持参・提出した。

（Ⅱ） 大坂御蔵米の内訳・性格

宝暦末年から明和初年頃の大坂御蔵には、在番・加番合力米、地役人切米扶持方などにあてられる遣方米として例年およそ米五万二〇〇〇石余・大豆二〇〇〇石余が納められ、このほかに「定式御囲米」として粳一四万石（米七万石）、⁽¹⁶⁷⁾「新規御囲米」として粳一五万五〇〇〇石（米七万七五〇〇石）があつたとされる。「定式御囲米」は、以前から大坂城に貯蔵されてきた城詰米のことであり、「新規御囲米」は、享保十八年以降新たに玉造御蔵や難波御蔵に貯蔵された城詰米七万七五〇〇石の呼称である。

大坂在番の大番や加番大名への合力米、大坂諸役人の切米扶持方などに使われた遣方米は、正徳四年の場合はおよそ三万石が収納された。正徳四年の「八ヶ国御納米大豆仕払目録之事」によると、⁽¹⁶⁸⁾この年五畿内と近江・丹波・播磨国幕領からの年貢高（取米）は一九万一四五石六斗四升六合であり、うち一万八二八五石四斗三升九合が十分一大豆銀納分（うち二三三七石六斗四升一合が現大豆納）、九万五一九八石四斗一升六合が三分一銀納・大和米所々地払共、七万八二〇五石五斗六升九合が米納であつた。米納分のうち一万五〇三四石八斗七升三合が万払いとされ、残りのうち三万六一八石七斗一升二合が大坂御蔵詰、三万五一石九斗八升四合が二条御蔵詰、二五〇〇石が天津御蔵詰となつた。

さらに大豆納の二三三七石六斗四升一合（摂津・近江・丹波・播磨国分）のうち一九三七石が大坂御蔵詰分、四〇〇石六斗四升一合が二条御蔵詰分であった。しかし、この年大坂御蔵への納入米は五万八〇〇〇石を予定していたため二万七三〇〇石余が不足することになった。そこで、この分は他国米が調達されて納入されたのであった。

享保二年の場合、五畿内と近江・丹波・播磨国幕領から五万八〇〇〇石の納入が予定されていた。そして、不足の場合は江戸の勘定所からの指示で丹波・石見・出羽・越後米などの他国米が割賦（幕府勘定所による年貢米・粃・大豆などの納入先・廻米先の割当）され足詰めされることになっていた。⁽¹⁶⁾ この他国米の割賦足詰めは、元禄期にはすでに行われていたことが確認できる。元禄十一年に、それまで大坂在番の大番など（番士および与力・同心）に支給されていた合力米のうちの銀子渡り分が蔵米渡りに変更になり、従来の納入米では不足する事態となった（遣方米は九万石必要とされた）。そのためこの不足分を補うために他国米の割賦足詰めが行われたのである。⁽¹⁷⁾ 『京都町触集成』から宝永七年に払米入札触れされた大坂御蔵詰米（前々年および前年大坂御蔵納分）の産地をみると、五畿内・播磨・備中・備後・讃岐・筑前・豊前・越後となっている。そして、享保期になると他国米の割賦あるいは買納が急増し、享保十二年に払米入札触れされた大坂御蔵詰米（前年および同年の大坂御蔵納分。但し、大豆は除く）の産地は、五畿内・近江・播磨・丹波・美作・石見・因幡・伯耆・出雲・安芸・長門・阿波・讃岐・伊予・土佐・筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・薩摩・若狭・越前・加賀・越後・出羽となっている。また、同十九年の払米入札触れの場合（前々年・前年の大坂御蔵納分）は、五畿内・丹波・播磨・備中・備後・美作・豊前・豊後・越前・甲斐・美濃・駿河となっていた。⁽¹⁸⁾ 土佐や薩摩には幕領が存在しないので、同国分は大坂における買納ということになる。

安永末年頃の状況を示すと推定される廻米方の「覚」には、「大坂・二条御蔵詰之儀、御廻留ニ有之候通、明和八寅^(マツ)

年々五畿内米を以相詰候積、当時取計候」とあつて、大坂御蔵収納米を五畿内米としたこともあつたかと思われるが、

幕末期には五畿内および周辺国々のみならず中国・四国・西国・北国・奥羽筋国々に広く割賦され、また他国米の買納もあつたのである。例えば、天保十四年の大坂御蔵詰米（大豆は除く）の国別内訳は、摂津・河内・和泉・山城（伏見・葭嶋新田分のみ）・播磨・丹後・美作・備中・備後・石見・讃岐・豊前・豊後・筑後・肥前・越前・加賀・越後・佐渡・出羽となつていた。⁽¹⁷³⁾そして、これらのほとんどの国々においては、年貢米は大坂御蔵のみならず江戸御蔵にも、あるいは江戸御蔵と二条御蔵にもというように複数御蔵へ納入されたのであつた。なお、宝暦十三年からは佐渡御蔵米も大坂御蔵に廻米された。⁽¹⁷⁴⁾

元禄六年頃における大坂御蔵からの支出項目は表8のようであつた。「定渡り」とそれ以外の渡方とに区別されるが、「定渡り」には、城番組与力・同心の切米扶持方、町奉行役料および兩組与力・同心の切米扶持方などを始めとする大坂諸役人への切米扶持方などがあつた。また、「定渡り」以外では、大坂在番の大番・与力への合力米、⁽¹⁷⁵⁾大番組同心扶持米、加番大名への合力米、⁽¹⁷⁶⁾大坂目付（二人、使番・兩御番より各一人）への合力米一〇〇石ずつ（扶持方は知行高に應じた一倍扶持）、城内外修復の大工・職人への扶持方、詰米などの際の日用人足賃・輪木宮筵等損料（元禄二年、百姓負担から公儀負担となる）などがあつた。

大坂城の城詰米は、寛永七年六月二十一日の「覚」に「御城米之儀弥入念可申付事」とあつて、⁽¹⁷⁷⁾この頃すでに存在していたことが推測される。寛永段階での詰米高は不明であるが、承応三年・寛文六年には二〇万俵とあり（三斗五升入換算で米七万石）、寛文七年以降貞享期までは米七万石とある（この城詰米は、享保十八年以降の新規城詰米と区別する意味で「定式御囲米」と呼称された。そこで、以後「定式御囲米」を用いる）。⁽¹⁷⁸⁾「定式御囲米」は、年貢米をもつて毎年冬頃

表 8 大坂御蔵詰米納渡内訳 (元禄 6 年頃)

納 方	米 70,000石 (定詰、2 万石冬詰・5 万石春詰) 大豆4,000石 (定詰)
定 渡 り	城内味噌・大豆 同糶代米・同薪代米 城番両組与力・同心切米扶持方 町奉行役料、両組与力・同心切米扶持方 同大和川・淀川筋廻り候町奉行与力・同心扶持方 船奉行与力・水主切米扶持方 弓奉行役料、同組同心切米扶持方 鉄砲奉行役料、同組同心切米扶持方 具足奉行役料、同組同心切米扶持方 金奉行役料、同組同心切米扶持方 材木奉行役料、同組同心切米扶持方 蔵奉行役料、手代扶持方 大工切米扶持方 太鼓坊主切米扶持方 米蔵番人切米扶持方 材木蔵番人扶持方 塩硝場番人切米扶持方 弦師切米 鉄砲鍛冶切米扶持方 弓弦之芋代米 太鞆常香・鈴糸代米 御蔵小揚扶持方
	(小計) 14,413石 9 斗 4 升程・大豆200石 (年により不同)
	大番頭兩人・番衆・両組与力合力米 大番両組同心扶持方 加番大名 4 人合力米 目付兩人合力米扶持方 城内外修復の大工・諸職人扶持方
	(小計) 31,064石 8 斗程・大豆3,357石 2 斗程 (年により不同)
	(渡方合計 45,478石 7 斗 4 升程・大豆3,557石 2 斗程)

(註)「京都役所方覚書・下」(『京都町触集成』別巻一、173・174頁、岩波書店、1988年)より作成。米は五畿内・丹波・播磨、大豆は摂津・丹波・播磨・豊後より納入。渡方には、米・大豆以外に、日用人足賃・紙墨筆代等191両余がある。

から翌年二月あるいは四月までに大坂城西の丸・玉造御蔵に詰められ、五月頃から二万石ほどを払米して代金を大坂御金蔵に除き置き、残り五万石ほどは新米詰替後に払米された。そして、この七万石の米代金は翌年の遣方にあてられていたが、元文あるいは寛保期以降は為替で江戸御金蔵に納められ江戸での遣方に使用されるようになった(それ以前にも必要に応じて江戸へ為替送金されていた)⁽¹⁷⁾。このように、「定式御囲米」は詰米高が七万石であったが、元禄期から享保初期の間に五万石に減額変更されていた可能性がある。享保十五年の「江戸・二条・大坂御除金并御囲米書付」には、「是は前々は五万石宛御囲ニ而有之候處、享保六丑年より七万石宛御詰米ニ可仕旨被仰渡候」とある。⁽¹⁸⁾また、享保十年二月には、江戸御蔵、大坂御蔵の詰米高をそれぞれ三万石(それまでより八万石減)、五万石(同二万石減)とすべきか否か議論されるが、同月十一日に、江戸はこれまでより六万石少ない五万石、大坂は従来通り七万石という⁽¹⁸⁾とで決着している。

「定式御囲米」は、享保十七年の西国筋虫付損毛に際しては西国大名への払米などに使用された。幕府は、この年十一月二十五日には西国・中国筋へ払い下げるべき石高を一八万石として、うち五万石は大坂御囲米、三万石は江戸買上米、一〇万石は同年の年貢米をもってあててることを決めている。大坂御囲米は九月二十一日から十月二十八日までの間に三万九六五〇石余、十月二十九日から十一月七日までの間に一万七五〇石余(計五万四〇〇石余)が西国筋に向けて船積みされ送り出された。⁽¹⁹⁾また、翌年二月には、必要米は二八万六二〇〇石余と見積もり、「西国・四国・中国筋御払可成分」は前年の大坂囲米払分五万石を含んで二七万五五〇〇石余とした。なお、享保十九年八月の記録によれば、「西国筋御払米高」は二六万一一〇〇石余であったとして、一〇万七二〇〇石余の分が米で、残りの一五万三九〇〇石余の分が代銀で返納されることになっていた。⁽²⁰⁾大坂御蔵の城詰米も年貢米をもって同十八年から詰戻しが始まったが、延享二年からは初詰に変更され、初一四万石が納められることになった。そして詰替は一〇年ほど後に行う

こととした。⁽¹⁸⁴⁾ 粃詰への変更理由は、(一) いったん詰米をして、その後に払米されるため、「三年米」となって更け痛みによる損失が多くなる、(二) 「定式御囲米」・「新規御囲米」合わせて四〇万俵余も払米することになると、上方筋における石代値段が下落して諸家(大名・旗本)の払米のためにもならないというものであった。⁽¹⁸⁵⁾ なお、このほかの理由としては、(三) 難波御蔵に詰め置かれた「新規御囲米」については、当初は年貢米で詰め替えられたため、大坂城西の丸・玉造御蔵でも毎年の詰替を行うことは負担が大きかったことなどが考えられよう。

一方、享保十八年から貯蔵が開始された「新規御囲米」七万七五〇〇石は、前年の西国筋虫付損毛に際して西国大名などに貸与された「諸国城詰米」の返納分の一部である。返納米は、二条・大坂・駿州清水の各御蔵にそれぞれ一万石、七万七五〇〇石、一万石を納入するよう指示されたのであった。⁽¹⁸⁶⁾ なお、延享元年には、大坂御蔵詰されていた「新規御囲米」のうち三万五〇〇〇石が浅草御蔵に回送されて同所で貯蔵されるようになった。⁽¹⁸⁷⁾ 「新規御囲米」は、年貢米をもつて冬頃から翌年四月頃まで詰め置かれ、八・九月頃から段々払米されて、代金は大坂御金蔵に納められた。そして、この分は遣方とはせずに金蔵内に除き置かれた。元文三年以降は、二条御蔵の「新規御囲米」払代とともに一カ年一〇万両程ずつ大坂御金蔵に除き置かれたが、寛保二年にはこのうちの三八万両余が関東筋出水に際しての入用にあてるため江戸に送られている。⁽¹⁸⁸⁾

「新規御囲米」は宝暦元年以降粃詰に変更された。ところが、宝暦三年に、「定式御囲米」のうちの二万石余の分については年々米で詰め替えるように指示されている。また、これにともない「新規御囲米」のうちの三万石余の分についても同様の措置がとられた。これは「定式・新規共不残詰粃罷成候而者米直段之障ニも可相成哉ニ付」との理由からであって、⁽¹⁸⁹⁾ 米価対策のためにとられた措置であった。

こうした米・粃の詰替や後述する天明七年の「定式御囲米」の江戸回送などは、大坂御蔵詰米・粃が米価調節機能も担っていたことを端的に示すものといえよう。なお、その後宝暦九年になって、在番・加番合力米、地役人切米扶持方などにあてられる遣方米を除き、「定式御囲米」・「新規御囲米」はすべて粃詰になった。そして、それにもなつて、一〇年に割合つて一カ年粃三万石余ずつの詰替、古粃の払下げを行うこととなった。⁽¹⁹⁾

これらの「定式御囲米」・「新規御囲米」の払米は、大坂蔵奉行が入札をとり行い、落札値段をもって直ちに米が渡されていた。しかし、享保二十年からは、大坂町人松安庄右衛門が願い出て、「定式御囲米」・「新規御囲米」および遣方残り米・大豆を引き受けて切手払いとするようになった。代銀納入の際に米を引き取るように変更されたわけであるが、庄右衛門には一〇万石につき三五〇両の割合で払米取捌き諸入用が支給されることになった。庄右衛門には堂島川通りに拝借地が与えられた(宝暦二年から半分に減地され、同七年に取上げとなった)。そして、しばらくは一人で払米を取り扱っていたが、払値段引上げのため、寛保二年からは同じく大坂町人の大和屋三郎左衛門が加わって二人の取扱いとなり、払米取扱い石高は等分に引き分けられることになった。⁽²⁰⁾

一八世紀半ば以降の大坂御蔵詰米・粃高の推移をみておこう。「新規御囲米」の米七万七五〇〇石分の粃一五万五〇〇〇石であるが、この分は明和四年から払粃されることになった。代粃は「御繰合宜相成候節追々相詰候積」とされたが、現実には「其後は御繰合不宜候付」との理由から天明七年に至つても詰め戻されなかった。また、この天明七年には、「米価高直に付」との理由で、「定式御囲米」のうちの粃七万石余が摺り立てられ、江戸に回送された。江戸で米価が高騰したのは、前年の凶作の影響によるものと思われる。大坂御蔵の城詰米が江戸の米価対策として使用されたわけであるが、このために同年の「御囲米」詰粃高は七万六〇〇〇石余にまで減少した。⁽²¹⁾

寛政元年から八年ほどかけて詰め戻す計画がたてられたが、享和元年の時点の「定式御囲米」・「新規御囲米」詰粃

高は二三万八三一石であり、達成率は八割であった。文政五年に粃二八万三二一六石余まで回復するものの、天保期に入ると、天保飢饉の対策として「御囲米」の回送や放出が行われたものとみえ、天保四年末には粃一四万七九九三石余となり、同九年には粃八万三六七六石余と再び一〇万石台を割り込んだ。その後再び詰め戻しが行われ、天保十四年十一月には詰粃高は一三万八〇〇〇石余にまで回復した。文久元年十二月晦日時点での「定式御囲米」・「新規御囲米」詰粃高は、米五〇〇〇石・粃一九万七五一石余であり、このほかに遣方米残高・新年貢米など翌年の遣方米にあてる分として米一万一三五四石余があった。⁽¹³³⁾なお、大坂御蔵には、このほか大豆七四六石余、糶一万八四三四石余、銅三三六万四一〇四斤余（鉸銅四七五二斤余・山鉸銅三八〇〇斤・棹銅三三五万五五一斤余）、鉛四万八五六一斤余（生野棹鉛二三三斤余・紅毛棹鉛一万一五〇五斤余・紅毛巻鉛一万九九一二斤余・唐板鉛一万四九一〇斤）、銑鉄一万五二九一貫余が貯蔵されていた（文久元年十二月晦日時点⁽¹³⁴⁾）。

以上、大坂城御蔵を中心に大坂御蔵の管理・運営、詰米の実態等についてみてきたのであるが、ここで大坂御蔵の機能・役割を一応つぎのようにまとめておこう。

大坂御蔵で必要とする遣方米は、年間およそ四万石から六万石程度であり、畿内・中国・四国・西国・北国・奥羽筋などから納入された（一八世紀前半までは五畿内・近江・丹波・播磨国が中心）。これらの米は、大坂在番の大番や加番大名、在番の与力・同心などへの合力米、定番組の与力・同心、大坂諸役人への切米扶持方などにあてられた。寛永期には開始されていたと考えられる大坂城の城詰米は、七万石が規定高であったが（一時五万石）、享保十八年以降は西国筋虫付損毛に際して貸与した「諸国城詰米」の返納分の一部を新たに収納することになった（米七万七五〇〇石、「新規御囲米」と呼称された）。享保十八年以前の城詰米は「定式御囲米」とよばれたが、「定式御囲米」は延享二年から、また「新規御囲米」は宝暦元年からそれぞれ粃詰となった。なお、宝暦三年より「定式御囲米」・「新規御囲米」とも

一部米詰が復活したが、同九年には全面的に粃詰に移行した。城詰米は、軍事兵糧米としての機能を担うものであったが、享保期以降は、飢饉時の救恤米として、また「米価高直」を理由に江戸へ回送されたように米価調節米としても利用されたのである。そして、城詰米を粃詰としたのは、単に長年の備蓄に耐え、かつ運用に便利なためというのではなく、米詰の場合は城詰米（「定式御用米」・「新規御用米」）だけでも年間一四万七五〇〇石が市場に放出されることになって、米価に少なからぬ影響を与えることが懸念されたためであった。大坂への入津米総量は、近世中・後期には一〇〇万石を下らないといわれるが、その大部分は西日本諸大名の蔵米であり、米価の下落は大名財政にも直結する問題であったのである。

大坂御蔵に収納された各代官所・預所からの年貢米は、正徳四年が約三万石（詰米予定高五万八〇〇〇石）、享保二年は五万八〇〇〇石（予定）であり、天保十二年は約三万五〇〇〇石、同十四年は約五万八五〇〇石（粃は米に換算、ほかに大豆一三〇〇石）、嘉永元年は約五万七一〇〇石（同、大豆一五〇〇石、大坂御蔵からの江戸廻米分は除く）であった。⁽¹⁹⁵⁾一七世紀後半以降における各代官所・預所からの大坂御蔵への廻米は、「大坂廻ニ被仰付、於大坂御払ニ被仰付候」とされる佐渡からの廻米分（宝暦十三年から開始、一万石〜一万七〇〇〇石）など一部払米を前提としたものも含まれているが、⁽¹⁹⁶⁾基本的には合力米・切米扶持方などの諸支出や城詰米の詰替用などにあてられるためのものであったといえる。換言すれば、大坂での払米は、城詰米の詰替処分以外を多く含むものではなかったのである。⁽¹⁹⁷⁾

なお、大坂御蔵の出納米を分析した大野瑞男氏は、城詰米の粃詰への変更は「米に比して更け痛みが少なく、長年の備蓄に耐え、かつ運用に便利なため」とする。そして、天保十二年に西日本幕領年貢米の七割方が江戸御蔵に収納されている実態をふまえつつ、幕府勘定所廻米方の大坂御蔵詰米の割賦について、「大坂諸役人の俸給、在番加番合力、大坂・大和代官の経費、城など諸修復の費用などを積み、それに要する米・粃・大豆を割賦したのであり、二条・駿

府・甲府等も全く同様であつた。ここに幕領米は基本的に江戸に集中する体制をみることができ、恐らくは寛文ないし元禄期までにこの体制が確立したのである」としている。⁽¹⁹⁸⁾ 城詰米の粃詰化については、米価問題との関わりを考慮しない点に不満が残るが、後者についての結論は承認しうる。一九世紀初め頃の江戸浅草御蔵納米が三八万石、四三万石前後と考えられるのに対し、同期の大坂御蔵への納米はその六分一から七分一程度と推定される。大坂は、大名領蔵米の換金市場として日本最大であつたが、幕領年貢米の収納に関しては、大坂御蔵の比重は決して大きなものではなかつたのである。

(二) 難波・天王寺御蔵

難波御蔵は、享保十八年に、建坪一〇二〇坪一七棟三四戸前の規模で建設された。御蔵から道頓堀川までの四五五間(約八二七¹⁹⁹尺)は、新たに掘られた運河(難波入堀)で結ばれていた。普請費用は銀一三二貫五一九匁九分三厘であつた。⁽¹⁹⁹⁾ 新規に御蔵が設置された理由は、すでに述べたように、享保十七年の西国筋虫付損毛に際して諸大名に貸与した城詰米の返納が行われることになつて、納入先の一つに大坂城御蔵が指定されたことによる。しかし、大坂城御蔵のみでは収納しきれないために新たな御蔵が必要になつたのである。玉造御蔵・難波御蔵に詰められた米七万七五〇石の分は、後に述べる天王寺御蔵米・粃とともに大坂「新規御囲米」とよばれた。「新規御囲米」は、その年の年貢米で翌年四月までに詰め替えられ、古米は八・九月頃から払米されて、代金は大坂御金蔵のうちに除金として除き置かれることになつた。⁽²⁰⁰⁾

天王寺御蔵(高津新地御蔵)は、宝暦二年に天王寺村の錢座跡地に八棟が新設されたのが始まりである。同御蔵は、

宝暦十五年八月に修復されるが、八棟三八戸前であったことが確認できる。⁽²⁰¹⁾ 天王寺御蔵が新設されたのは、宝暦元年に、難波御蔵に詰米された「新規御囲米」を粃詰に変更するよう幕府から指示されたためである。難波御蔵ではそのための収容量が不足しており、新たな御蔵が必要とされたのである。天王寺御蔵には、同三年から年貢粃が送られ詰め置かれることになった。⁽²⁰²⁾ 粃詰とするよう命じられてはいるが、三万石余の分は実際には米で詰められており、宝暦九年からすべて粃詰となったのである。

寛政三年に、天王寺御蔵は廃止され、難波御蔵に併合された。米蔵は難波御蔵敷地内に九棟三五戸前で移築された。しかし、移築によって五万一六〇〇石収容量が減ることになった。このため同九年七月から難波御蔵三棟八戸前の建て増しが行われ、米一万四〇〇〇石の収容量拡大が図られた。これによって難波御蔵は二九棟七七戸前で、米一四万七〇〇石⁽²⁰³⁾（粃で二八万一四〇〇石）が収納されることになったのである。

難波御蔵・天王寺御蔵の戸前は、大坂蔵奉行衆・五カ所蔵目付のうち両人が立ち会って連判封印した。大番の蔵目付衆の立会はなかった。⁽²⁰⁴⁾ 御蔵番は、両所とも当初五人ずつであったが、難波御蔵へ統合後は九人となったとされる。⁽²⁰⁵⁾

なお、難波御蔵・天王寺御蔵には、明和六年より長崎上納銅（長崎から大坂金蔵への納入金銀のうち鉸銅等で振替納入された分）が貯蔵された。文化五年十一月の時点では、鉸銅二七万四七五二斤余・秋田山鉸銅二万三三八〇〇斤・間吹銅三二万四二四〇斤・棹銅二五一万四三二四斤余の計三二四万七一一七斤余の貯蔵が確認できる。⁽²⁰⁶⁾

慶応四年正月八日、勘定奉行並小野友五郎は勘定方奥野由郎ほか一人を大坂城中に遣わして御金蔵銀・錢八万両および難波御蔵米一万石を大坂三郷の住民に与えたといわれる。また、同日あるいは前日に、榎本武揚らによって大坂城中から一八万両とも二五万両ともいわれる貯蔵金銀が搬出されたという。当時大坂御蔵にどれくらいの米が残って

いたのかは不詳であるが、同月十日には煙硝蔵が爆発し、玉造御蔵はほとんど焼失してしまった。⁽²⁰⁷⁾ 一方、難波御蔵には⁽²⁰⁸⁾ 八万三〇〇〇俵余が残されていたが、この分は慶応四年の三月二十六日に長州藩より大坂裁判所に引き渡されている。⁽²⁰⁸⁾ 「大坂鎮台所役人立会之上封放シ引渡」が行われたのであったが、御蔵は正月頃から封印されていたものと思われる。征討大將軍嘉彰親王が大坂に入ったのが正月十日であり、十二日には薩長芸三藩に大坂市中の取締りが命じられる。そして、同月二十二日には大坂鎮台が置かれているので(同月二十七日大坂裁判所と改める)、⁽²⁰⁹⁾ 大坂御蔵は慶応四年正月をもって幕府管理を離れたとみることができよう。

(三) 二条御蔵

(I) 二条御蔵と二条蔵奉行

二条城は、徳川家康の命により慶長七年五月に造営された。翌八年三月二十一日に、家康は伏見からこの二条の新邸に入り、同月二十五日に拝賀の礼を行った。二条城はこの後も普請が行われ、天守・御殿・長屋・多門・築地などが整備された。また、寛永元年からも後水尾天皇の二条行幸などに備えて二条城の修築が行われて、本丸の増築や二の丸外曲輪、御殿・櫓・多門などが造営された。⁽²¹⁰⁾ 二条御蔵もこうした一連の普請事業の中で建造されたのである。⁽²¹¹⁾ 建造当初の御蔵の規模・詰米高は不明であるが、正徳期頃には、城内では天守下、二の丸台所前、本丸高麗橋前の三カ所に三棟一一戸前(計一万二四〇〇石余)が、城外に一一棟二二戸前(計三万四六〇〇石余)があり、合計一四棟三三戸前に四万七〇〇〇石余が詰米された(城外の二戸前は京都代官が使用)。また、本丸多門(四戸前)には、元禄十三年から同十五年まで糶二〇〇〇石余が貯蔵されていた。⁽²¹²⁾

なお、元禄六年頃は、白銀一〇〇〇貫目（本丸御蔵、二条御殿番三輪市十郎および御蔵衆三人の預かり、年々二条在番両大番頭・二条城番が立会封印）・錢四一〇九貫文（二の丸台所前御蔵、御蔵衆三人の預かり）・銅六八四七貫目（同）・鉄三一三貫目（同）も城内御蔵に貯蔵されていた。⁽²³⁾これは「京都二御金蔵無之候ニ付、毎年金銀諸方定渡り御払方臨時渡共、前々右仁右衛門御代官所納金銀を以相渡、自然臨時渡多銀高不足有之候得者、大坂御金蔵より御老中御証文を以請取之、銘々江相渡申候」といわれるように、⁽²⁴⁾二条城には御金蔵がなかったためと考えられる。白銀一〇〇〇貫目というのが、おそらくは寛永年中銀にて三輪七蔵（二条御殿番）へ預けたのが始まりとされる「二条除金」に相当するのであろう。⁽²⁵⁾

二条城は、寛延三年八月二十六日の落雷によって天守を失い、天明八年正月晦日には大火によって本丸のほとんどと二の丸太鼓櫓などを焼失した。⁽²⁶⁾御蔵にどの程度の影響があったのかわからないが、寛政二年の時点では、城内に五棟一七戸前、城外に一二棟二四戸前で、ほかに証文蔵一カ所・縄藁入蔵一カ所があった。⁽²⁷⁾なお、二条御蔵の修復に際しては、縄・藁代銀が山城・大和・丹波国三カ国から徴収されることになっていた（正徳四年頃）。縄・藁代銀入札は月番の京都町奉行所で二条蔵奉行などが立ち会って行われた。そして、落札値段をもって三カ国御蔵入役高に割賦され、村々から集められた代銀が請負人へ渡されのである。⁽²⁸⁾

二条御蔵には、京都代官が管理した城外の御蔵もあって支配蔵入地年貢米の一部が収納された（前記城外御蔵のうちの一棟二戸前を使用していたが、天和三年より一戸前の使用となった）。⁽²⁹⁾そして、公家衆方領米や女中扶持方などは、元禄六年および正徳四年頃にはこの京都代官支配の御蔵から支出された。しかし、延享二年以降の記録では二条御蔵からの渡りと記される。⁽²⁰⁾京都代官支配の御蔵も二条御蔵と解釈することは可能であろうが、享保・寛保期以降に、二条蔵奉行支配の二条御蔵からの渡りに変更になったものと思われる。なお、禁裏・仙洞御料からの年貢米は、当初は五畿内郡代や京都代官が支配した禁裏御米蔵（御所御蔵）などに直接納入されていたが、近世後期には二条御蔵（二条城内

の倉庫」に一旦納められて、そこから必要に応じて禁裏御米蔵に移されるようになったといわれる。⁽²²⁾

寛永六年十一月八日に、「丹波郡代」五味金右衛門（豊直）は、板倉周防守（重宗）に代わって後水尾上皇御料（仙洞御料）を支配することになった。⁽²²⁾したがって、これ以後、五味が仙洞御料の年貢米の徴収・納入に携わったことは確実である。禁裏御米蔵については、寛永五年には五味金右衛門が管理していたといわれる。⁽²³⁾また、その後寛永十一年にも、「禁裏御米蔵場ニ五味備前守節者筋目之家来并与力同心付置、御物成納払仕、御表向御払之儀者不及申、御内証御入用小帳取之、聊之儀をも相改吟味仕候」・「法皇・女院御所御米蔵場ニも家来兩人宛并下役人付置、右同前相勤させ申候事」とあるように、⁽²⁴⁾禁裏御米蔵や法皇・女院御米蔵の支配・管理（年貢米の出納・監査を含む）は五畿内郡代・八カ国郡代（代官奉行）の五味備前守（豊直）が行っていたことが確認できる。そして、五味が万治三年八月に死去した後⁽²⁵⁾は、跡役の小出越中守（尹貞）と水野石見守（忠貞）（伏見の代官奉行）が禁裏御米蔵の支配・管理を引き継いだ。その後、寛文四年に京都代官が新設されて、以後禁裏・仙洞御料の支配や禁裏御米蔵などの支配・管理を担当するようになった。そして、延宝八年に五味藤九郎（豊旨）が没したあとは、小堀仁右衛門（正憲）が京都代官に任命され、以後幕末期まで小堀氏が京都代官として禁裏御米蔵の支配・管理にあたったのである。⁽²⁶⁾なお、小堀氏には役料一〇〇〇俵（三五〇石）が支給された。

延宝八年以降、禁裏御米蔵や二条城外の御蔵二戸前（天和三年以降は一戸前）を支配・管理した小堀氏について、「小堀仁右衛門勤方之事」にはつぎのようである。⁽²⁷⁾

一二条御城外御蔵壹ヶ所先規仁右衛門方江預り置候而、京土居之内村々并山城・河内・摂津・丹波御蔵入之御物成米之内三千百石余納置、公家衆方領米、法皇・女院御所・東山院様・東福門院様・明正院様・深信解院様被召仕候女中其外、禁裏・

表9 二条御蔵禁裏関係米「定渡り」

(天保13年)

費 目	米 高
東宮被進米	800石
鷹司殿助情(成)米・別段被下米	400石
堂上方役料・切米扶持方	1,352石余
堂上方九十二人方領米	3,380石
堂上方薙髪女中切米扶持方	954石余
御所使番・仕丁・門番等切米扶持方	827石余
新嘗会下行・八幡勅使参向下行	638石余
諸寺社祭礼神事料・念仏料	1,742石余
五山硯学学問教育料・合力米	350石
合 計	10,443石余

(註)「甲辰雜記」(『誠齋雜記』東京大学史料編纂所蔵)により作成。

院中之諸役人御切米御扶持方、所司代并御所方御附衆裏判を以
定役人之者共付置相渡させ申候

一一品宮様・敬法門院様・慈受院様御合力米并新上西院様女中・
照高院御門跡御家来・諸公家衆・二条御蔵奉行・山脇道立・禁裏・
法皇諸役人并所々御門番・辻番・上使屋敷番人江御切米御扶持
方米高三千三百石程、山城・河内・摂津・丹波御蔵入之村々御物
成米之内郷蔵ニ納置、年中割方役人付置、書替手形を以相渡申
候事

史料は、正徳四年頃の状況を示していると考えられるが、京都
代官小堀氏は、京都土居之内村々および山城・河内・摂津・丹
波国の蔵入地の物成米のうちおよそ六四〇〇石を管理し(城外御
蔵にはこのうち三二〇〇石余を収納)、諸御殿の女中、禁裏・院中
の諸役人、番人等への切米扶持米を支給していたのであった。

家衆への方領米であり、一六%が諸寺社祭礼神事料・念仏料、一三%が公家衆役料・切米扶持方であった。表中の東
宮被進米は、天保六年六月儲君治定、同十一年三月十四日に立太子礼のすんだ統仁親王(後の孝明天皇)に対して二〇
〇〇俵(八〇〇石)が進献されたものである。また、新嘗祭下向米は、元文五年に四六四石四斗二合を二条御蔵より支

出したのが始まりであり、以後毎年支出されるようになったのである。⁽²²⁸⁾ 一方、臨時の渡りについては、この年は不明であるが、弘化元年の場合は禁裏への足米三〇〇石、鷹司家への助成米・被遣米四〇〇石などがあつた。そして、文久期にはこれらに加えて下向米一九二石〇三、三一七〇石、禁裏取替米五五〇石〇一、一四七〇石、親王方への被進米四〇〇石、九条家への被遣米四〇〇石〇五五〇石などが支出されたのであつた。⁽²²⁹⁾

二条御蔵を管理したのが二条蔵奉行であつた。「蠹餘一得」では、「(寛永)三年乙丑^{丙寅}四月、(中略)御蔵奉行二人伏見より二条へ移」(括弧内は引用者)と記す。⁽²³⁰⁾ しかし、これは最初に書かれた干支が正しく、年および訂正された干支の方が誤っている。『徳川実記』の寛永二年四月二日の条に、「伏見定番春日左衛門家吉・柘植三之丞宗次伏見城より二条にうつり(中略)蔵奉行二人もうつる」とある。⁽²³¹⁾ なお、「吏徴別録」は、二条蔵奉行の始まりを寛永二年とし、木村宗左衛門・高橋七兵衛(正次)・福島八左衛門(勝重)の三人が任ぜられたとするが、『寛政重修諸家譜』では十分な確認ができない。⁽²³²⁾

また、定員についてもはっきりしないが、当初は二人から四人程度であつたと思われる。寛文八年九月、同九年十月の時点では、藤井勘兵衛(勝忠)・高橋七兵衛(正次)・尾崎十兵衛・海野治右衛門(次大夫・重次)の四人が二条蔵奉行であつた。⁽²³³⁾ しかし、元禄十二年四月二十二日に、それまで大津蔵奉行であつた長坂新右衛門(基隆)を加えて以後しばらくは四人でつとめるよう命じられているので、⁽²³⁴⁾ 元禄十二年以前には三人であつたことが判明する。延宝末年・天和期にはすでに三人であつたので、おそらくは寛文から延宝にかけての時期から三人で勤めるようになったものと考えられる。そして、元禄十二年四月から享保五年七月までは再び四人でつとめている。⁽²³⁵⁾ それ以後また三人となるが、同六年三月六日に多賀彦八郎(政常)が死去すると二人となつた。

二条蔵奉行に関して、「吏徴別録」には「享保六年辛丑閏七月六日、仮役始大御番より」と記される。⁽²³⁶⁾これは、この年の閏七月六日に高井蔵人（眞政）が二条蔵奉行仮役となったことをさしている。『寛政重修諸家譜』では、高井について「享保五年九月三日より御蔵奉行をつとめ、六年閏七月六日仮に二条の御蔵奉行となりてかの地にいたり、七年十月十五日帰府す。十三年七月二日御蔵奉行の組頭に転じ」と記されており、⁽²³⁷⁾大番出役の浅草蔵奉行からの仮役であった。また、高井につづいて翌年二条蔵奉行仮役となった石原太郎兵衛（政矩）の場合も、「享保六年八月三日より御蔵奉行を勤め、七年七月四日よりかりに二条の御蔵奉行をつとむ。十五年五月十二日死す」とあつて、⁽²³⁸⁾同様に大番出役の浅草蔵奉行から仮役に任ぜられたのであった。「柳営補任」では「二条在番大御番ヨリ在役一人宛」と記すが、⁽²³⁹⁾二条在番の大番からの仮役は享保八年以降のことであつたと考えられる。いずれにしても享保六年から二条蔵奉行仮役が置かれ、本役のだ員は二人となつて幕末に至るのである。

二条蔵奉行は、寛政二年九月、京都町奉行支配を離れ、勘定奉行支配となつた。⁽²⁴⁰⁾元文三年以降、合力米現米四〇石であり、⁽²⁴¹⁾配下に御蔵手代六人、八人（正徳期頃までは御蔵奉行一人につき二人ずつ付属、その後見習も置かれた）、⁽²⁴²⁾御蔵番三人（元禄六年頃は二人、正徳期には三人）、小揚三八人（うち頭三人、元禄三年前は頭四人、平六〇人）がいた。二条蔵奉行は、元禄六年時点では三人が任ぜられていたが、彼らの切米扶持方（二人は切米一五〇俵、一人が切米一〇〇俵扶持方三人扶持）は京都代官小堀仁右衛門支配の御米蔵から支出されていた。正徳四年頃には四人に役料四〇石が二条御蔵から支給されているが、切米（一人一五〇俵ずつ）については、これまで通り京都代官小堀仁右衛門支配の御米蔵から支出されていた。⁽²⁴³⁾御蔵手代には、元禄十二年十一月以前は一人につき切米七石扶持方二人扶持が支給されていたが、同月以降は金一〇両扶持方三人扶持ずつの支給となつた（給金分は大坂御金蔵で受取り）。⁽²⁴⁴⁾また、御蔵番には一人につ

き切米三石五斗扶持方一人扶持ずつがそれぞれ支給された。小揚への賃金は、最初は蔵米を納入する農民から取り立てられていたが、元禄三年以降、小揚頭に対しては一人につき金五両扶持方二人扶持ずつ、平小揚には一人につき金三両扶持方一人半扶持ずつが支給された（給金分は同じく大坂御金蔵で受け取ることとされた）⁽²⁴⁵⁾。

二条御蔵の監察については、二条御蔵目付が二条在番の番士の中から任命されて担当していたが、元禄十一年十二月からは「京職の与力」が代わって行うことになり、さらに翌十二年四月以降は、「京職の与力」による監察も中止されたといわれる⁽²⁴⁶⁾。しかし、実際にはその後も京都所司代与力などによる一定の監禁が行われていたものと考えられる⁽²⁴⁷⁾。

(II) 二条御蔵米の内訳・性格

二条御蔵詰米の割賦および収納米の使途についてみてみよう。貞享期頃においては、二条御蔵への詰米は専ら近江国から行われており、「温知柳宮秘鑑」には、「二条御蔵詰之国 近江、米近江米不足之時分者山城・河内・摂津三ヶ国之内と詰ル」と記される⁽²⁴⁸⁾。そして、元禄期も同じ状況であったと考えられる。しかし、正徳四年の場合、米三万五千九斗八升四合が五畿内と近江・丹波・播磨国から、大豆四〇〇石六斗四升一合が摂津・近江・丹波・播磨国から各々納められたのであった（米六〇〇〇石は同年冬、残り二万四〇五一石余は翌年春に詰められた）⁽²⁴⁹⁾。享保二年の場合も同じで、詰米三、四万石は五畿内と近江・丹波国から納められ、年によつては播磨国からも納められた⁽²⁵⁰⁾。延享二年九月時点で二条御蔵納を行っていたのは山城・和泉・河内・摂津・近江・播磨・美作・備中・備後の九カ国であった⁽²⁵¹⁾。このうち近江国は、寛政二年以降は天津御蔵納となった（近江国幕領年貢米は、享保八年に一旦天津御蔵納となったが、その後は二条御蔵へも納入するなどしていた）⁽²⁵²⁾。なお、文久二年の二条御蔵への納米（米四万三〇〇〇石・大豆四〇〇石）割賦国は、

山城・摂津・河内・和泉・丹波であつた。⁽²⁵³⁾

元禄六年の二条御蔵詰米は、二万二三〇〇石余（冬詰四〇〇〇石、残りは春詰）・大豆五〇〇石余であり、宝暦末年から明和初年頃は、公家衆方領米・女中扶持方・在番合力米、地役人切米扶持方などにあてられる遣方米として例年およそ米三万六〇〇〇石余・大豆五〇〇石余であつたとされる（後述するように、御蔵にはこの遣方米以外に「定式御囲米」・「新規御囲米」計二万石が詰められていた）。⁽²⁵⁴⁾

二条御蔵詰米の支出状況についてみよう。前述したように、二条御蔵からの支出米には、享保・寛保期からは京都役人への切米扶持方や在番合力米以外に公家衆方領・女中扶持方など禁裏関係諸支出が含まれるようになったが、それまでは京都支配のための幕府諸役人への役料・切米扶持方がほとんどであつた。元禄六年の場合を示したのが表10である。支出米は、「定渡り」とそれ以外の二条在番関係渡りとに大別されているが、まず「定渡り」からみる。

公家衆役料・合力米とあるが、内容は明示されていない。しかし、正徳期の例からすると、武家伝奏の廷臣二人に対する伝奏料（一七五石ずつ）、議奏五人に対する議奏料（四〇石ずつ）などであつたと推定される。⁽²⁵⁵⁾江戸時代においては、慶長八年二月十二日に広橋兼勝・勧修寺烏丸光豊が任命されて以来、幕府と朝廷との交渉などにあたる武家伝奏がおかれ、慶応三年十二月九日に廃止されるまで継続した。そして、武家伝奏の役料は一七五石または五〇〇俵であつた。⁽²⁵⁶⁾一方、江戸時代の議奏は、寛文三年正月に霊元天皇の践祚にあたって後水尾天皇が葉室頼業ら廷臣四人に天皇の養育係を命じたのが始まりとされ、のち宮中諸務の統括、近習衆の統制など職掌が拡大した（また、員数も五人に増加した）。延宝七年以降、幕府から役料四〇石ずつが支給されるようになり、貞享三年十二月七日には議奏を正式名称とした。⁽²⁵⁷⁾

表10 二条御蔵詰米納渡内訳 (元禄6年)

納 方	米 22,300石余 (江州米、4,000石冬詰、18,300石春詰) 大豆 500石余 (江州大豆、年により増減あり)
定 渡 り	<p>公家衆役料、合力米 京都火消被仰付候大番扶持方 (300人扶持) <530石余> 所司代組同心切米扶持方 (1531石余) 両町奉行役料、両組与力・同心切米扶持方 (5171石余) 禁裏御所付の面々与力・同心切米扶持方 (3750.02石余) 山岡七右衛門役料、与力切米扶持方 (1753.16石余) 鈴木市兵衛役料、与力同心切米扶持方 (898.18石余) 都筑惣兵衛切米、同心切米扶持方 (153.55石余) 隠岐五郎大夫同心切米扶持方 (73.55石余) 三輪市十郎 (切米)、坊主切米扶持方 (227.18石余) 城内時之太鼓御用抹香・鈴糸等代 (1.416石) (医師) 武田吉(杏)仙切米 鷹峯薬園預り兩人切米、同荒子切米扶持方 (192.98石) 女五宮付田中筑後切米 連歌師里村昌陸扶持方 (35石余) 高橋彦八郎切米扶持方 (大工頭) 中井主水扶持方 <70石余> 中井源八郎扶持方 三宅新十郎切米扶持方 (呉服師) 後藤縫殿 (助) 切米 (200石) 二条御蔵手代切米扶持方 (63.6石余) 二条御蔵番切米扶持方 (16.6石余) 二条御蔵小揚扶持方 (105.3石余) 城内御蔵詰米外御蔵場より駄賃</p>
	(小計) 15,465石9斗程 (年により少々増減あり)
	<p>大番頭兩人・番衆・両組与力合力米 大番両組同心扶持方 二条目付兩人扶持方 大番衆の内破損奉行扶持方</p>
	(小計) 4,212石程・大豆450石程 (年により不同、不意の渡方あり)
	(渡方合計 19,677石9斗程・大豆450石程)

(註) 「京都役所方覚書・下」(『京都町触集成』別巻一、81~84、91~93、170・171頁)、『京都御役所向大概覚書』上巻、174~179頁より作成。〈 〉内の数値は正徳4年のもの。米は五畿内米を少し詰めることもある。渡方には、米・大豆以外に、日用人足賃・紙墨筆代等33両1分余がある。また、元禄7年以降は、賀茂葵祭下行米790石が「定渡り」に加わる。

京都火消しを命じられた大番衆へは、扶持方として三〇〇人扶持（五三〇石余）が支給された。「大御番格式之留」の「大御番頭常之勤方之覚」には、毎年九月より翌年三月までの間、御城近所出火の際は、大番頭の指図をうけて消火にあたる事が定められている。なお、扶持米は月割りで支給された。⁽²⁵⁸⁾

京都所司代（定員一人）に対しては、付属の同心一〇〇人への切米扶持方の総計一五三一石余が支給されている（同心には切米一〇石扶持方三人扶持ずつの支給）。関ヶ原の戦い後の京都所司代は、慶長五年九月十八日に奥平美作守（信昌）が任命されたと伝えられている。⁽²⁵⁹⁾ その後は同六年九月に板倉四郎右衛門（勝重）が任ぜられたといわれるが、正式には従五位下伊賀守に叙任され、与力三〇騎・同心一〇〇人を付属された慶長八年二月の時点であったと考えられる。⁽²⁶⁰⁾ ところが、元和六年に父に継いで京都所司代となった板倉周防守（重宗）については、付属の与力三〇騎・同心一〇〇人を廃し、その年俸が重宗に与えられた。⁽²⁶¹⁾ そして、承応三年十一月二十八日に京都所司代となった牧野佐渡守（親成）以降与力五〇騎・同心一〇〇人が付属することとなった。⁽²⁶²⁾ 京都所司代の役料について、「御役人代々記」では、「所司代は壱万石宛御加増有之上、戸田越前守殿は御役料壱万俵被下、稲葉丹後守（正通）殿は部屋住にて当役被仰付、新知三万石被下たり、土屋相模守（正直）殿・内藤大和守（重頼）殿・松平因幡守（信興）殿・小笠原佐渡守（長重）殿四人、大坂御城代之時御加増有たる故か御加増なし、御役料壱万俵ばかり被下、松平紀伊守（信慈）殿元禄十丑年四月十九日所司代被仰付以来、御加増も不被下、御役料も止」と記す。⁽²⁶³⁾ これによると、松平紀伊守（信慈）の京都所司代就任（元禄十年四月十九日）以後役料一万俵（現米四〇〇〇石）の支給が廃止されたとしている。だが、この記事は必ずしも正確ではない。なぜなら、松平紀伊守に対しては宝永三年十月に同年分の役料一万俵が支給され、同年以降も役料が支給された可能性があるのである。⁽²⁶⁴⁾ しかし、いずれにしても、元禄六年時点では、京都所司代に対して役料が支給されていたのであるが、それが表10に記載されていないのはなぜであろうか。それは、実は大津御蔵から支出されていたた

めであった。そして、付属の与力切米(与力五〇騎、切米八〇石ずつ支給)も、この時点では大津御蔵から支出されていたのである(与力切米は、その後元禄十二年までの間に二条御蔵からの支給に変更となる)⁽²⁶⁵⁾。

二条御蔵からは、京都町奉行(二人)に対する役料二二〇〇石(六〇〇石ずつ支給)と付属の両組与力・同心への切米扶持方三九七一石も支出された(二組与力二〇騎・同心五〇人で構成。与力には切米八〇石、同心には切米一〇石扶持方三人扶持ずつ支給)。京都町奉行は寛文八年七月に、京都所司代牧野佐渡守(親成)の辞任を契機に設置され、最初の町奉行には宮崎若狭守(七郎右衛門・重成)と兩宮対馬守(権左衛門・正種)が任命された(正式には同十年に追認)⁽²⁶⁶⁾。そして、これにより従来京都所司代が掌握していた京都町中の公事・訴訟の権限が町奉行に移ったのである。京都町奉行の成立当初は与力五騎・同心一〇人ずつが付属したが、寛文十年五月朔日に増員され、与力二〇騎・同心五〇人ずつが付属するようになった⁽²⁶⁷⁾。京都町奉行は元禄九年から三人となり、伏見奉行も京都町奉行が兼帯することとなった(それにもない、伏見奉行支配の与力一〇騎・同心四〇人が京都町奉行預けとなる。なお、与力・同心は、同十一年十一月十五日には再び伏見奉行に建部内匠頭政信が任ぜられたのを機に京都町奉行の支配を離れた)⁽²⁶⁸⁾。そして、京都町奉行は元禄十五年十月より再び二人となって幕末に至る。

「禁裏御所附之面々与力・同心切米扶持方」は三七五〇石余となっているが、これは禁裏附・本院附・仙洞附にそれぞれ付属した与力・同心の切米扶持方の合計である。禁裏附は、公武間の事務を統括し、禁裏諸用の記録・報告、公家衆の行跡監督、禁門取締りなどを担当した。寛永二十年八月晦日に天野豊前守(長信)・高木伊勢守(善七郎・守久)が任命されたのが始まりで(定員は二人)、それぞれ与力一〇騎・同心四〇人ずつが付属した⁽²⁶⁹⁾。この禁裏附に関わる分は、久留嶋出雲守(通定)と須田大隅守(盛輔)に付属した与力・同心の切米扶持方(与力には切米六〇石、平同心には切米七石扶持方二人扶持ずつの支給)の合計二〇五七石二斗四升余(久留嶋分一〇三三石一斗余、須田分一〇二五石一斗四升余)

であつた。なお、「吏徴別録」に、「享保八年癸未四月六日、御役料一五〇〇俵、此時より定例千石充の御加増止(中略)持高三千石已上は御役料八百俵被下、元文三年戊午三月廿日千石高」とあるように、⁽²⁷⁰⁾享保八年より役料一五〇〇俵(持高三〇〇〇石以上は役料八〇〇俵)が支給され、定例一〇〇〇石の加増が廃止された。そして、元文三年には役高一〇〇〇石と決められたのである。

上皇や法皇、女院には、幕府より仙洞附(法皇御所附)、本院附、新院附、女院附などが任ぜられ、院の事務の統括や御殿の取締りなどにあたつた。明正院附(明正天皇讓位より後西天皇讓位の寛文三年正月十三日までは新院附、以後明正上皇崩御の元禄九年十一月十日までは本院附と呼称、定員は二人)は、寛永二十年九月朔日に明正天皇の讓位を機に創設された。最初は榊原一郎右衛門(元義)・中根五兵衛(正次)の二人が任命され、兩人へは五〇〇石が加増された。⁽²⁷¹⁾元禄六年當時は市岡対馬守(正房)と小栗備中守(信盛)が任ぜられ、兩人には付属の与力・同心への切米扶持方の合計三九九石五斗七升余ずつが支給されている(一組与力三騎・同心二〇人で構成。与力には切米六〇石、同心にはおおよそ切米七石扶持方二人扶持ずつの支給⁽²⁷²⁾)。明正院附には役料の支給がみられないが、それは任命時に五〇〇石の加増が行われていたためであつたと考えられる。靈元院附(仙洞附)は、靈元天皇が讓位した貞享四年二月十八日に北条播磨守(元氏)と牧下野守(長高)が任ぜられて、五〇〇石が加増された。そして、同年三月二十一日に踐祚が行われ、四月二日には本院(明正上皇)・女院(靈元上皇中宮)がともに仙洞御所に移り、新院の靈元上皇は仙洞、女院は新上西門院と称することになった。⁽²⁷³⁾仙洞付には、元禄六年當時は柴田日向守(康能)と徳永備前守(昌清)が任ぜられ、兩人には付属の与力・同心への切米扶持方として四四三石三斗四升余、四五〇石三斗余がそれぞれ支給された(一組与力三騎・同心二〇人で構成。与力には切米六〇石、平同心には切米一〇石五斗、扶持方二人扶持ずつの支給⁽²⁷⁴⁾)。仙洞附には、正徳期まで任命時に五〇〇石の加増がなされたが、享保期以降はみられない。享保八年六月十八日付の「遠国御役人員数并役高組支

配」には「仙洞附式人役料千俵、与力四騎、同心廿人宛」と記されるので、禁裏附と同じく正徳期までは加増分が役料代わりで、享保期以降に役料の支給が開始されたものと思われる。⁽²⁷⁵⁾

つぎに、山岡七右衛門（景元）への役料（二二〇石）と付属の与力切米扶持方（二六三石一斗六升余）の合計一七五三石一斗六升余の渡方がある。山岡七右衛門について、『寛政重修諸家譜』では、「元禄六年六月七日二条の城番となり」と記す。⁽²⁷⁶⁾ 二条の城番とは二条城の門番のことであると考えられる。寛永二年（四月）に、大番の渡辺山城守（茂）が二条城代に任ぜられるが、その際にそれまで伏見城を警衛していた春日左衛門（家吉）と柘植三之丞（宗次）の二人を付属の与力や同心とともに二条城に移し、御門の警衛にあたらせた。⁽²⁷⁷⁾ 春日左衛門と柘植三之丞について、『寛政重修諸家譜』ではそれぞれ「元和元年父景定死するのち其遺跡を継、（中略）其後父にかはりて伏見城大手の御門番をつとむ。のち二条城大手の御門番となる」（春日）、「元和八年家を継、父にかはりて伏見城の番を勤む。のち（中略）伏見松の丸口極楽橋の御門番をつとめ、寛永二年二条城西門の番にうつり、そのち二条御鋌炮頭となり」（柘植）と記す。⁽²⁷⁸⁾ また、『徳川実記』には「春日左衛門家吉・柘植三之丞宗次伏見城より二条にうつり、左衛門家吉は与力三十騎、大手門番、三之丞宗次同心二十人あづかり西の門番」とある。⁽²⁷⁹⁾ なお、春日左衛門の跡をついだ寛新太郎（正成）については、『寛政重修諸家譜』に「（寛永）十六年七月十二日二条の城番にうつり、万治元年七月十三日京師にをいて死す」（括弧内は引用者）とある。⁽²⁸⁰⁾

元禄十二年四月、山岡七右衛門の任務は同月設置された二条門番之頭（定員二人）に引き継がれることになった。なお、二条城番には与力が付属したが、寛新太郎は二五騎、⁽²⁸¹⁾ 山岡七右衛門の場合は二六騎（二四騎は切米で、その合計一九石、二騎は扶持方で五人扶持と三人扶持）であった。

同じく二条城の門番（西門の番）であった鈴木市兵衛（藤寛）に対する役料（二二〇石）と与力・同心切米扶持方の合

計八九八石一斗八升余の渡りもあった。付属の与力六騎・同心二〇人への切米扶持方は、切米は与力五騎へ六〇石ずつ、一騎へ五二石五斗で、同心へは一人が七石、一九人に一〇石ずつであった。また、同心への扶持方は一律三人扶持ずつであった。二条城西門の番は、前述したように柘植三之丞から始まるが、元禄十二年三月に廃止された。そして、その任務は同年四月に設置された二条門番之頭にそのまま引き継がれることになる。二条門番之頭の名称が『徳川実記』等に登場するのは元禄十二年以降であるが、⁽²⁸²⁾『寛政重修諸家譜』では、鈴木市兵衛について、「元禄元年十月二十一日二条御門番の頭に転ず、十二年三月二十一日務をゆるされ」とあつて、⁽²⁸³⁾両者が同じ職務であつたことをうかがわせている。なお、二条門番之頭には役料として一二〇石が支給された。そして、一組が与力一〇騎・同心二〇人で構成され、与力には切米六一石三斗五升ずつ、同心にはおおよそ切米一〇石扶持方三人扶持ずつが支給された。⁽²⁸⁴⁾

二条御殿番の三輪市十郎(量久)には、付属の坊主一七人への切米扶持方二七石一斗八升余(切米は一〇石ずつ、一人のみ七石で、扶持方は二人扶持ずつ)と「時之太鼓御入用抹香代」一石四斗一升六合(二日四合ずつ)の合わせて二二八石五斗九升六合余が支給されている。二条御殿番は、二条城が築造された年の慶長七年に、三輪七右衛門(久勝)が御殿を預かったのが始まりである。以後三輪氏が代々二条御殿番をつとめることになったが、元禄十一年十二月に一〇〇俵加恩され、知行地三〇〇石と合わせて四〇〇石の禄高となった。なお、一〇〇俵分については切米として支給された。⁽²⁸⁵⁾

二条鉄砲奉行の都筑惣兵衛(昌孝)と隠岐五郎大夫(重忠)に対しては、付属の同心への切米扶持方などが支出されている。都筑惣兵衛には切米八〇石が支給されているが、隠岐五郎大夫にはない。これは、隠岐が元禄六年十月二十一日に当役に任ぜられたが病氣のため上京がなかったためと思われる。⁽²⁸⁶⁾二条鉄砲奉行には、正徳四年頃には役料六〇

石が支給されており、元文三年三月の「遠国御役人并御足高御役料定」では合力米現米六〇石と規定されている。⁽²⁸⁷⁾なお、付属の同心は五人ずつで、各々四人が切米一〇石扶持方三人扶持・一人が切米七石扶持方三人扶持であった。

以上が、「定渡り」の主な支出項目とその内容であるが、「定渡り」以外の支出項目についてもみておこう。まず大番頭・番士・与力の合力米および同心の扶持方がある。大番の二条在番は、寛永二年に渡辺山城守（茂）が二条城代となった際に大番三〇人を在番させたのが始まりといえるが、毎年二組ずつ交代（四月に交代）で勤務するようになったのは寛永十二年からである。二条城代渡辺山城守（茂）が城代職を離れたのを機にそうした体制に移行したが、この年は保科弾正忠（正貞）と阿部摂津守（信盛）が二組合わせて一〇〇人の番士とともに在番を勤めた。⁽²⁸⁸⁾その後、一組が大番頭一人・組頭四人・番士五〇人（組頭含む）・与力一〇騎・同心二〇人で編成されるようになった。寛永九年から支給された二条在番への合力米については、支給時期など一部に違いがあるものの、支給方法・割合などは大坂在番に對するものと同様である。⁽²⁸⁹⁾なお、『徳川実記』寛文十一年三月二十四日の条に、「京戌役の番士は、大津に於て給はりし稟米を、此後は二條の米稟にてたまはるべしと番頭に令せらる」とあるように、二条在番の番士の合力米は、寛文十一年三月までは大津御藏米から支給され、同年以降に二条御藏米が使用されるようになったのである（なお、金方の渡りは大坂御金蔵より支給）。⁽²⁹¹⁾また、表10では、同心の合力米渡りの項目がないが（大坂御藏詰米の支出状況を示した表8も同様）、これは同心への合力米はすべて金に換算されて支出されていたためである。⁽²⁹²⁾

文久二年閏八月十九日、大番の二条在番は廃止され、二条定番二人が置かれることになった。二条在番の大番頭の一人は二条定番に移り、付属の与力・同心もそのまま移行している。なお、定番には役料三〇〇〇俵が支給され、一組与力三〇騎・同心一〇〇人ずつが付属した。そして、与力には現米八〇石、同心には現米一〇石三人扶持ずつが支

給された。

二条目付兩人扶持方があるが、これは、一般的には大坂目付、上方目付(あるいは百日目付、半年代わりの目付)など
とよばれた目付二人に対する扶持方の支出である。この目付は、大坂城二の丸に屋敷をもち(城内には目付小屋二カ所
もあった)、大坂あるいは京都在勤の万石以下の幕臣の行動の監察にあたった。寛永五年に創設され、寛文二年までは
目付衆より一人、両番衆(書院番・小性組)より一人が大坂・京都に派遣されて、監察・見分にあたった。同三年から
は使番・両番衆より各一人ずつが任ぜられたが、この頃は一年に三度の交代であつた(この故に百日目付の呼称あり)。
翌四年閏五月十五日に以後半年代わり(三月六日・九月六日)とするよう命じられ、合力米一〇〇石を支給された。こ
の合力米一〇〇石は、目付の分限高(知行高)には関係なく、大坂御藏より支給された。また、大坂目付には扶持方も
支給されたが、こちらは分限高に依じて一倍(家禄の収納分と同額)が二条・大坂両御藏から支給されたのである。元
禄十二年からは使番より二人が任ぜられるものの(宝永五年と同六年は目付より一人、使番より一人)、正徳二年からは再
び使番・両番衆より各一人ずつとなった(延享三年は目付・使番から各一人ずつ)。なお、寛政五年以降は一年交代とな
り、天保十二年以降は使番から二人となった。⁽²⁹³⁾

破損奉行は、二条在番の大番組二組から一人ずつ任ぜられた。城中を見廻り、破損箇所があつた場合には破損奉行・
大工頭中井主水・同源八郎立会見分のうゑ両大番頭へ申し出て、さらに京都所司代にも連絡をして修復を行う手はず
になっていた。⁽²⁹⁴⁾ 破損奉行に支給された扶持方については、享保十七年十二月以前は分限高に依じて支給されたが、同
年以降は分限高に関係なく勤め日数に依じて一〇人扶持が支給されるようになった。⁽²⁹⁵⁾

最後に、二条城の城詰米についてもみておこう。二条城の城詰米がいつから貯蔵されるようになったのかは不明で
あるが、他の直轄諸城の例からすると寛永期には始まっていたものと思われる。そして、延宝四年には一万石と規定

されていたが、貞享四年の時点では「二条御蔵米壹万石之筈に候得共、近年渡方多候ニ付、納方も多く相納申候」ということで一万七〇〇〇石が詰米された。⁽²⁹⁶⁾その後、詰米高が定められなかった時期もあったようであり、享保十五年の記録に「前々は石高御極無之、年々御遣方残米有次第御蔵ニ囲置候所、享保六丑年〆壹万石ツ、御詰米ニ可仕旨被仰渡候」とある。⁽²⁹⁷⁾いつから規定高がなくなったのかは不明であるが、享保六年からは一万石であったことが判明する。そして、この城詰米は、年々十二月頃までに御蔵に詰め、翌年秋頃から段々払米にして、新米を詰め替え、払米代は遣方にあてられていた。また、城詰米の一部は京都での遣方米として使用されることもあり、その場合には京都町奉行から勘定奉行に伺書を提出することとされた。なお、元文あるいは寛保期以降になると、この城詰米（従来からの城詰米、享保十八年以降に貯蔵が始まった新規の城詰米である「新規御囲米」と区別する意味で、同年以降は「定式御囲米」と呼称された。以後、「定式御囲米」を用いる）の払米代は、為替で江戸金蔵に納められ、江戸での遣方にあてられるようになった（それ以前にも江戸へ送金されていた可能性がある）。⁽²⁹⁸⁾

享保十八年からは、二条御蔵には「新規御囲米」一万石が追加して詰米されることになった。これは、前述の大坂「新規御囲米」と同様に、同十七年の西国筋虫付損毛に際して諸大名に貸し渡した城詰米の返納分であり、年々三月頃まで御蔵に詰め置き、五月頃から段々払米して代金は翌年の遣方にあてたのであった。その後、元文三年からは、「新規御囲米」払米代は、遣方とせずに大坂金蔵に納め除き置くことにされた（場合によっては勘定所の許可を得て、取り寄せて遣方にあてることもあった）。⁽²⁹⁹⁾延享二年の時点で、二条御蔵には「定式御囲米」一万石、「新規御囲米」一万石が貯蔵されていた。また、宝暦末年から明和初年頃も同様であった。しかし、天明三年以降の凶作時に「新規御囲米」はすべて放出された。⁽³⁰⁰⁾そして、その後詰め戻しがなされたのであった。なお、「定式御囲米」は、幕末期には詰米高五〇〇〇石（粳一万石）に変更されていたようであり、天保十四年十一月の時点では「元高一万石」、有粳高は八〇〇〇

石とされる。⁽³⁰⁾ 文久元年十二月晦日時点での二条御蔵有高は、「二条御囲米」として米一万石・粃一万三〇〇〇石と遣方米の一三九一石余であったが、翌年六月晦日の有高は「定式御囲米」米五〇〇〇石・「新規御囲米」米一万石、遣方米五八二八石余となっている。⁽³²⁾

以上、二条御蔵について、御蔵の支配・管理、蔵詰米の納渡の状況についてみてきたが、ここで今までの検討から明らかになったことをまとめておこう。

(一) 二条御蔵は、慶長七年から寛永初年に至るまでの断続的な築造・修築のなかで設置されたものと考えられる。御蔵は二条蔵奉行によつて支配・管理されたが、蔵奉行が最初に任ぜられたのは寛永二年といわれている。寛文期から享保六年までは三〜四人であったが(天和期頃より元禄十二年までは三人)、享保六年以降は二人となつて幕末期に至つた。なお、享保六年からは二条蔵奉行仮役(一人)も置かれたが、当初仮役は二条在番の番士からではなく、大番出役の浅草蔵奉行が任ぜられた。

(二) 二条御蔵には、京都代官小堀仁右衛門が管理した御蔵もあり(天和三年以降は城外御蔵の二戸前)、支配蔵入地年貢米の一部が収納された。また、京都代官が支配した禁裏御料などからの年貢米は、当初禁裏御米蔵などに直接納入されていたが、近世後期には二条御蔵に納められるようになり、そこから必要に応じて禁裏御米蔵などに移されるようになったといわれる。

(三) 二条御蔵が必要とした米はおおよそ三万〜四万石であったが、それは五畿内および近江・丹波・播磨国などを中心に割賦された(貞享・元禄期頃は近江国が中心であった)。収納米は、京都所司代付属の同心切米扶持方、京都町奉行役料および与力・同心切米扶持方をはじめとする京都役人への役料・切米扶持方、伝奏、議奏などへの公家衆役料

などのほか、二条在番の大番への合力米、大坂目付扶持米などに使用された。公家衆方領米や女中切米扶持方などの禁裏関係諸渡や二条蔵奉行切米などは、元禄六年および正徳四年頃には京都代官支配の御蔵から支出されていたが、享保・寛保期以降には二条御蔵からの渡りとなった（二条蔵奉行支配の二条御蔵からの渡りと考えられる）。

（四）二条城の城詰米は、他の直轄諸城の城詰米と同様に寛永期には詰米が開始されたものと推定されるが、延宝四年に一万石、貞享四年には一万七〇〇〇石が詰められていた。詰米の規定高は一万石であったが、規定がなかった時期もあったようである。そして、享保十八年からは、それまでの城詰米（「定式御囲米」）に加えて、西国筋虫付損毛に際して諸大名に貸与した城詰米の返納分のうちの一万石を新たに詰米することになった（「新規御囲米」。「定式御囲米」は毎年払米されて、払米代は京都での遣方にあてられた（元文・寛保期以降江戸へ為替送金、江戸での遣方にあてられる）。また、「新規御囲米」も毎年払米され、京都での遣方にあてられていたが、元文三年からは大坂御金蔵除金とされた。なお、「定式御囲米」・「新規御囲米」ともにその後勅詰に変更されたが、「新規御囲米」は、天明三年以降の凶作時にすべて放出された（その後詰め戻しが行われている）。

（五）すでに指摘したように、二条御蔵に収納された米は、基本的に京都役人への役料・切米扶持方などにあてるためのものであった。したがって、京都での払米は、城詰米の詰替処分以外を多く含むものではなかったといえる。⁽³⁰³⁾

元治・慶応期の京都を舞台にした動乱の中で二条御蔵米がいかなる役割を果たしたのかわからないが、徳川慶喜によつて大政奉還が行われた約二ヵ月後の慶応三年十二月九日には王政復古が宣言された。そして、翌年正月三日から七日にかけての鳥羽・伏見の戦いを経て、京都は新政府の完全に掌握するところとなった（一月二十七日には太政官代が二条城に移され、参与役所も城内に設置された⁽³⁰⁴⁾）。二条御蔵は鳥羽・伏見の戦いをもって幕府御蔵としての任を終了したのである。

(四) 大津御蔵

大津御蔵が創建された時期は不詳である。しかし、大津御蔵が大津代官所と並んで大津城の本丸跡に建てられたこと、慶長十一年に大津城の天守が彦根城に移築され、⁽³⁰⁵⁾慶長末年には大津は有力な米市場となっていたこと、さらには、慶長・元和期には近江代官や大津代官が存在し、元和八年二月の「申ノ歳分御蔵有米符付之内^{大津詰}残り米帳」などで大津御蔵の存在が確認できることなどから、⁽³⁰⁶⁾慶長十年代から元和初年頃に建てられたのではないかと推測される。そして、元禄十三年までは二〇棟（ほかに御金蔵一棟）の規模を保って米四万七七〇〇〇石余が収納されていた。⁽³⁰⁷⁾ところが、寛文十一年三月以降は二条在番の番士合力米が二条御蔵からの渡りとなり、その後さらに、京都所司代役料支給が廃止されたり、付属している与力の切米渡りが二条御蔵からの渡りに変更されるなどして、⁽³⁰⁸⁾次第に取扱い米量が減少していった。そのため元禄十三年には、一四棟に収納されていた分を払米し、六棟八戸前（二万五八〇〇石余の収納）が大津代官雨宮庄九郎（寛長）に預けられた。大津御蔵には、正保四年・慶安元年・同二年の三カ年に貯えられた糶五〇〇〇石余もあったが、御蔵が老朽化したこともあって元禄十二年にすべて売却された。そして、同十三年からは新糶二〇〇〇石が二条城本丸の多門で貯えられることになった。⁽³⁰⁹⁾

大津御蔵に収納された米は、貞享期以前は近江米、丹波米、越前勝山米、大津入津米の買入米などであった。⁽³¹⁰⁾越前勝山が入っているのは、同地域が正保元年から貞享三年まで福井藩預所となり、さらに貞享三年から元禄四年まで幕領であったことによるものであろう。元禄六年には一万石が、正徳期から享保初年頃にはおよそ四〇〇〇石（五〇〇〇石が、延享二年頃にはおよそ三〇〇〇石が収納されたが、いずれも近江国幕領から納入されている。⁽³¹¹⁾そして、「金銀米納方御定」に、「近江国御年貢米者享保八卯年御代官取計方同大津御蔵詰ニ相成、其後寛政二戌年石原清左衛門猶

亦取計方伺、年々同所御蔵詰ニ相成候事」とあるように、⁽³¹²⁾享保八年から近江国幕領年貢米はすべて大津御蔵に納入するようになり、寛政二年に再確認されたことがわかる。享保十一年には近江米が二条御蔵にも納入されており、⁽³¹³⁾また、前述したように延享二年九月の二条御蔵納国にも近江国が入っていた。このように享保八年の方針が変更されていたために、寛政二年に再確認されたものと思われる。なお、大津御蔵の修復入用銀のうち竹・縄・藁人足代銀は近江幕領村々にかけられ、代銀が役高にに応じて徴収された。⁽³¹⁴⁾

元禄六年および正徳四年の大津御蔵の納方および渡方を表11に示した。元禄六年の納方は米一万石・大豆一五〇〇石程であり、正徳四年は米四二五六石五斗二升七合・大豆二一六石五斗七升一合であった。元禄六年の場合、渡方でもっとも多いのは京都所司代役料と付属与力(五〇騎)への切米各四〇〇〇石ずつであった。つぎに、大津代官で大津町支配も兼帯した小野半之助(宗清)の組同心二〇人に対する切米扶持方があった。また、大津御蔵衆切米扶持方は、三人の大津蔵奉行に対するものであり(二人は切米一〇〇俵五人扶持ずつ、一人が切米一三〇俵)、大津御蔵衆手代・御蔵番切米扶持方は、御蔵奉行一人に付き二人ずつが付属した御蔵手代(計六人)に対する切米扶持方六三石六斗余(二人に七石二人扶持ずつ)と御蔵番三人に対する切米扶持方一五石九斗余(二人に三石五斗一人扶持ずつ)である。小揚賃米は、小揚八〇人に対するものであり、年間おおよそ一二石五斗程とされた(小揚賃は、納米一石に付き九合ずつ、渡り一石に付き一合ずつ)。一方、正徳四年の場合は、もっとも多い渡りは伏見与力・同心・牢番切米扶持方の一五七六石余であった。伏見与力・同心・牢番切米扶持方は、伏見与力一〇騎(切米八〇石ずつ)・同心五〇人(切米一〇石扶持方三人扶持ずつ)・牢番一人(切米五石扶持方三人扶持ずつ)に対するものである。さらに、大津同心二〇人(切米一〇石扶持方三人扶持ずつ)・御蔵番三人(切米三石五斗扶持方一人扶持ずつ)への切米扶持方合計三二三石余があった。後述するよ

表11 大津御蔵詰米納渡状況

(元禄6年・正徳4年)

	費 目	元禄6年	正徳4年
納	(江州米、年により増減あり)	米 10,000石程	米 4,256.527石
方	(江州大豆、年により増減あり)	大豆1,500石程	大豆 216.571石
定 渡 り	八幡放生会下行米	—	371.600石
	京都所司代役料	4,000石	—
	京都所司代組与力切米	4,000石	—
	小野半之助組同心切米扶持方	308石余	—
	大津御蔵衆切米扶持方	* 133石余	—
	大津御蔵衆手代・蔵番人切米扶持方	79.5石余	—
	大津小揚賃米	112.5石余	44.275石余
	二条御城修復大工諸職人飯米	—	65.402石余
	伏見与力・同心・牢番切米扶持方	—	1,576.575石
	(大津同心・蔵番切米扶持方)	—	322.010石
	更米払	—	1,460.751石余
	大豆払	1,500石程	** 216.571石
(小 計)		— 大豆1,500石程	米 4,061.729石余 大豆 216.571石
	二条御蔵修復時奉行扶持	—	—
	法事之節下向米	—	—
	施行米	—	—
(小 計)		—	—

(註) 「京都役所方覚書・下」(『京都町触集成』別巻一、91、176、183.184頁)、『京都御役所向大概覚書』下巻、343・344頁より作成。*印は、330俵10人扶持を石高に換算(3斗5升入換算)。**印は、斗出分4.544石余を除く。「伏見与力・同心・牢番切米扶持方」と「更米払」の費目は、元禄6年の場合は費目自体の記載がない。「大津同心・蔵番切米扶持方」の費目は、元禄6年の「小野半之助組同心切米扶持方」と「大津御蔵衆手代・蔵番人切米扶持方」の費目の一部に該当する。なお、元禄6年の場合、渡方には米・大豆以外に御蔵場入用墨筆代7両余があった。

うに、元禄十二年に大津蔵奉行が廃止されるが、正徳四年の渡方からは御蔵奉行切米扶持方や御蔵手代切米扶持方がなくなっている。また、小揚賃米は、同年の米・大豆の納方四四七三石余、渡方四〇一七石余に対するものである（小揚賃割合は元禄六年に同じ）。二条御城修復大工諸職人飯米は、大工・木挽・屋根葺・左官などに対するものであった。払米は、大津御蔵詰米の三四％にあたる一四六〇石余であり、代銀二〇四貫九七二匁余が江戸御金蔵へ送られた（一石銀一四〇匁余とかなり高値であるが、これは前年からの凶作の影響と考えられる）。大豆についてはその全部が売却されている（元禄六年の場合も大豆はすべて売却されたが、代金は大阪御金蔵に送られた）。

大津御蔵には非常用備蓄米である城詰米も貯蔵されていた。延宝四年・貞享四年の時点での規定高は五万石、宝暦元年では二万石であった。⁽³⁵⁾ 貞享四年の記録には、洪水があり近江幕領米を二条・高槻御蔵に廻米したことなどもあって、延宝二年からは規定高を確保できなかったとある。⁽³⁶⁾ なお、元禄十二年四月の大津蔵奉行廃止にともない、それまでの詰米はほとんど払米され、延享二年時点での囲米はなかった。ところが宝暦元年に二万石とあることから、また再び詰米される予定であったことがわかる。しかし、規定通りに詰米されたかどうかは疑問が残る。宝暦末年から明和初年頃の状態を示す「大津御蔵御詰米之事」に「御囲米者無御座候」とあり、⁽³⁷⁾ 実行されなかった可能性が高い。また、天保十四年の「御囲米大豆有高」、文久元年の「御金銀米有高書付」にも大津囲米は記されていない。⁽³⁸⁾ さらに、安永末年頃の状態を示すと推定される廻米方の「覚」⁽³⁹⁾（「大津御蔵詰米高割賦之事」）には、「当時四百石余相詰、其余者冥加銀相加へ不残御払ニ相成候、尤江州米不残大津納ニ致置御払ニ相成候」とあって、⁽⁴⁰⁾ 四〇〇石だけは払米されずに残されたことがわかる。あるいはこれが非常用米としての役割を担ったのかもしれない。

ところで、「大津御米御払代銀上納書拔」によると、大津御蔵米・大豆払米代上納銀は安永四年（二七七五）が七九二貫一〇一匁余、同六年が七七六貫三六匁余、天明三年が五八九貫九四匁余、寛政五年が八二三貫三一八匁余な

どとなっていた。⁽³²⁰⁾ 年によつて変動があるが、この時期にはおおよそ一万石ほどが払米されていたものと思われる。また、天保期以降の幕末期においても、大津払米は毎年一万〃二万石にのぼっている。そして、文久元年の事例によると、幕府は大津と浅草の払米相場を利用して差益を得るなどしていた。⁽³²¹⁾ このように、安永・天明・寛政期などに一万石余の払米が行われていたことは、当然のことながらそれだけの米が収納されていたということを意味する。延享二年、および宝暦末年から明和初年頃は、遣方米として毎年おおよそ三〇〇〇石の米が収納されたが、明和期あるいは安永期以降に大津御蔵への廻米高が増加したことが予想される。大津御蔵の収納米が増加し、増加分を含めてそのほとんどが払米されるようになったものと考えられる。

大津御蔵を管理したのが大津蔵奉行（大津御蔵衆）であつた。大津の地に代官のみならず蔵奉行が置かれたのは、寛永期には近江国に幕領一七万石余が存在し、元禄期頃まではおよそ五万石が御蔵に収納されたこと、そしてまた、大津が近世初頭より北陸諸国の年貢米集積地として重要な位置を占めていたことなどによるものである。しかし、いつから置かれたのかははっきりしない。大津蔵奉行（大津御蔵衆）に関する比較的早い時期の史料としては、慶安二年十月八日付けの「江州野洲・栗太・蒲生郡内亥之年御勘定目録」がある。そこには大津御蔵納分の受取人として福島八左衛門と貴志九左衛門の名が記される。⁽³²²⁾ 福島八左衛門については、前述したように、『寛政重修諸家譜』と『断家譜』では「台徳院殿、大猷院殿につかへたてまつり、大津の御蔵衆となり稟米百俵、月口五口をたまふ。延宝二年九月十六日大津にをいて死す」・「台徳院様御代淀御蔵奉行、後嵯峨御蔵奉行、大猷院様御代江戸江下向、御目見後二条御蔵奉行、其後大津御蔵奉行、延宝二年甲寅九月十七日没」と記される（なお、その子の福島八左衛門勝秋も跡目相続直後の延宝二年十二月十日から同六年四月まで大津蔵奉行を勤めた）。⁽³²³⁾ 一方、貴志九左衛門については不明である。しかし、「京

都町奉行所書札覚書」の中に、寛文九年五月時点で福島八左衛門と貴志九左衛門の両人が二条在番合力米支給に関与していたことを示す史料がある。⁽³²⁴⁾ 両人が慶安・寛文期に大津蔵奉行（大津御蔵衆）であったことは間違いない。

大津蔵奉行は、大津代官と同じく京都町奉行支配であったと考えられるが、⁽³²⁵⁾ 前述のように、京都所司代の役料が廃止されたり、付属の与力切米が二条御蔵渡りに変更されるなどして取扱い米量が減少したことなどを理由に、元禄十二年四月二十二日に廃止されるに至った。なお、元和・寛永期頃の大津御蔵の支配についてはよくわからない。おそらく当初は大津代官が担当し、大津蔵奉行設置後に御蔵の支配・管理が引き継がれたものと思われる。また、寛永期頃は、五畿内郡代・八カ国郡代（あるいは代官奉行）などとよばれた小堀遠江守（政一）や五味備前守（豊直）が払米などを含む御蔵の支配に関与していた可能性もある。しかし、今それを証明するに足る十分な史料をもたないため、ここでは指摘するにとどめたい。

大津蔵奉行の定員は明らかでないが、一七世紀中頃までは二人で、延宝期頃から元禄期までは二人ないし三人で勤めたものと考えられる。大津蔵奉行は元禄十二年四月二十二日に廃止されたが、最後の大津蔵奉行となった長坂新右衛門（基隆）は二条蔵奉行に役替となり、布施庄左衛門（某）と藤沼猪之助（勝由）の両人はその職を辞している（同年九月十六日に、両人は小普請入りとなる）。⁽³²⁶⁾ 大津蔵奉行の属僚については、「吏徴附録」に御蔵手代一人（三人扶持）、御蔵番三人（現米三石五斗一人扶持高）とあるが、正確な記述ではない。前述したように、元禄六年には、御蔵奉行一人に付き御蔵手代二人ずつ（計六人、切米七石二人扶持ずつ）、御蔵番三人（切米三石五斗一人扶持ずつ）、小揚八〇人（切米はなく、蔵入れ・蔵出しなどの際に一定の小揚賃を米で支給）が付属していたことが確認できる。⁽³²⁷⁾ なお、大津御蔵には、二条在番の大番組番士が大津御蔵目付として年々大津に派遣されていたが、元禄十二年四月には、大津蔵奉行とともに

に廃止された。⁽³²⁸⁾

大津蔵奉行廃止後は、大津御蔵は大津代官が管理し、支配地幕領を中心とした年貢米の収納と諸渡方残余米の払米を行うことになった。『徳川実記』の元禄十二年四月二十二日の条には、「けふ令せらるゝは、大津官稟今より後米貯蓄せらるゝのみなれば、稟数を減じ、代官の所管たらしめ」とある。⁽³²⁹⁾ また、延享二年の「御勝手向御用定」には、「年々御年貢米三千石程相納、御囲米ハ無御座、諸渡方ニ仕残米御払ニいたし、代銀為替ニ相渡、江戸御金蔵江相納御遣方ニ罷成候、但大津御代官引請納払仕候」とある。⁽³³⁰⁾ さらに、宝暦七年十二月の「御料高御代官并御預高書付」では、代官石原清左衛門（正頭）に「大津御蔵方懸り」と記されている。⁽³³¹⁾

延享二年の幕府勘定所「御勝手方勤方」には、京都町奉行と大津御蔵との関わりについて、「大津御蔵納払之事是は沓ヶ月納払帳面、毎月京都町奉行より差越候に付、前月之有高と見合吟味仕候、并御蔵残米御払之度々、米直段米銀員数書付差出次第相改候事」とある。⁽³³²⁾ ここから、京都町奉行が大津御蔵詰米の納払に関与し、一カ月毎に納払帳を幕府勘定所に提出していたことがわかる。また、払米の都度米価も報告することになっていた。これは、従来大津代官は京都町奉行の支配であったこと、享保七年から安永元年まで大津町支配は京都町奉行に委ねられていたこと、な⁽³³³⁾どが要因と考えられよう。

以上みてきたように、大津御蔵は元禄十二年までは大津蔵奉行によって、また、それ以後は大津代官によって管理された。そして、元禄・正徳期頃までの大津御蔵の機能・役割は、(一) 非常用米としての城詰米の貯蔵、(二) 京都・大津・伏見役人などへの切米扶持方支給、(三) 諸渡方残余米の払米、などであった。そして、一八世紀半ば以降になると、大津御蔵の機能・役割は大津御蔵収納米の払米に重点が移ったと考えられる。

安政二年二月十九日から大津代官として大津御蔵を管理していた代官石原清一郎（正美）は、「納米有高」三〇一九石余・「納金銀」八〇〇〇兩余などの保有米金高書上を東海道鎮撫総督の橋本実梁に提出するとともに、慶応四年正月九日には旧管地の支配を従来通り仰せつけられた旨願い出た。願いは同月十一日に聞き届けられて同人支配が継続することになるが、翌日には御蔵から八〇〇〇兩が引き出され、土佐藩の東征費用にあてられたというから、正月上旬の時点で幕府管理の大津御蔵はその役目を終えたといえよう。なお、石原氏の支配・管理も長くは続かず、同年三月七日大津裁判所が設置され、政府議定長谷信篤が総督に就任した。

（五） 高槻御蔵

高槻御蔵は、元和元年閏六月十八日に内藤紀伊守（信正）が近江国長浜から四万石で入封し、城の修築を行った際に、本丸の南方にいわゆる「二万石御蔵」を建造したことがその始まりとされる⁽³³⁵⁾。高槻周辺は、豊臣政権期から京坂を結ぶ要衝としてとくに重要視され、二万石の太閤蔵入地が設定された。そして、そこからの年貢米を保管するために淀川に面した高浜村には御蔵が置かれていた⁽³³⁶⁾。また、富田庄にも御蔵があり、高槻御蔵はこの富田庄の御蔵の機能を継承したものであったといわれる⁽³³⁷⁾。高槻城には御蔵が四棟あったが（ほかに焰硝蔵・材木蔵が二棟ずつ）、幕府直轄の御蔵は「二万石御蔵」とよばれ、幕府から御蔵奉行が任命された。高槻蔵奉行について、「吏徴附録」は天和元年十一月二十日に勘定より伏屋兵介（『寛政重修諸家譜』では伏谷彦助）が任命されたのが始まりとしている⁽³³⁸⁾。しかし、『寛政重修諸家譜』によると、本多角右衛門（頭房）について、「東照宮に仕へ奉り、摂津国高槻の御蔵奉行を勤む。元和三年八月十五日死す」とある⁽³³⁹⁾。したがって、『寛政重修諸家譜』の記事に信をおくとするならば、高槻蔵奉行は元和期には置

かれており、本多角右衛門(頭房)が就任していたことになるが、現時点ではこれを確認する史料をもたない。⁽³⁴⁰⁾

高槻蔵奉行の定員も確定できない。しかし、「末吉家文書」の年貢勘定目録には、寛永十三・十四年、同十九年から正保四年まで本田(本多)角右衛門(頭直)(本多角右衛門頭房の子、寛右衛門)と田中彦右衛門の二人が高槻蔵奉行として名を連ねているとされる。⁽³⁴¹⁾その後明暦・万治期は田中兵左衛門(某)一人だけが記されるが、寛文期には本多十右衛門(頭定)と田中兵左衛門(某)の二人が高槻蔵奉行をつとめていることなどから、⁽³⁴²⁾二人が定員ではなかったかと思われる。高槻蔵奉行に対しては寛永期頃は稟米一〇〇俵・月俸五口が、天和元年以降は稟米一五〇俵が支給された。なお、高槻蔵奉行は、元禄二年十二月からは大坂蔵奉行とともに京都町奉行の支配に入ったと思われる。それ以前については大坂城代の支配であったかと思われるが推測の域を出ない。

高槻御蔵の管理は、高槻蔵奉行と高槻藩の家臣とが行った。慶安二年十二月十日の高槻城主永井日向守(直清)あて老中連署には、「高槻御蔵、從此以前彼地城主之家来御蔵奉行衆ニ立合、開御蔵之戸納払仕、相封付置候由候間、如先規可被申付候」とある。⁽³⁴³⁾高槻蔵奉行の属僚は明確ではないが、同所には米の搬入・搬出に関わる小揚が六〇人(うち組頭五人)いたことがわかっている。⁽³⁴⁴⁾高槻御蔵への納入に関する記録としては、摂津国西成郡十八条村の寛永五年の年貢免状に「八三石八升二合、高槻詰米」とあるのが古いものといえる。⁽³⁴⁵⁾また、支出については、寛永十一年に山崎八幡宮遷宮下向米一〇〇〇俵の支払いを高槻御蔵衆に命じたものがある。⁽³⁴⁶⁾

元和五年に幕領となった前述の摂津国西成郡十八条村では、寛永十年までは高槻・大坂御蔵詰であったが、同十一年から十六年までは大坂城本丸・西の丸、高槻の各御蔵詰と江戸廻米となった。そして、同十六年からは二条御蔵が加わり、同二十年からは玉造御蔵を含めた各御蔵詰や江戸廻米となった。寛永十六年以降幕領となった河内国志紀郡

小山村の場合は、同十七年は大坂西の丸御蔵詰と「大坂詰江戸廻」(江戸廻米)であったが、翌十八年に大坂玉造御蔵詰が、二十年には高槻御蔵詰と二条御蔵詰が加わった。なお、正保四年以降は江戸廻米がなくなっている。そして、その後は大坂・二条・高槻の御蔵詰が通例となる⁽³⁴⁷⁾。このように明暦・万治期になると、大坂周辺の幕領では大坂・二条・高槻御蔵詰と江戸廻米という形態が一般的になってくる⁽³⁴⁸⁾。しかも農村段階での代官主導による年貢米の貨幣化の停止、代官の手による年貢米の販売制限と停止がすすんで、大坂・二条・高槻の各御蔵奉行による年貢米の収納・販売体制が確立してくるのである。なお、高槻御蔵に収納された幕領年貢米量を示す史料は管見の限り見あたらないが、御蔵の名称や後述する城詰米の量などから判断して元和・寛永期頃は二万石前後が収納されたものと思われる⁽³⁴⁹⁾。そして、収納米は城詰米の詰替、役人の俸給、その他の支出にあてられ、残余は払米されたものと考えられる。

ところが、『京都御役所向大概覚書』に「高槻御蔵者御用無之ニ付、元禄三年入札被仰付、元禄四未春御払ニ罷成候」とあるように⁽³⁵⁰⁾、元禄四年五月に御蔵は入札払いされ(代銀九貫三一五匁七分が大坂御金蔵に納められた)、幕府管理の高槻御蔵は高槻蔵奉行とともに廃止されたのである⁽³⁵¹⁾。その結果、これまで高槻御蔵に納入されていた畿内幕領の年貢米は、以後大坂御蔵や二条御蔵へ納入されるようになった。廃止の理由は明示されていないが、幕府による国内支配の安定、高槻御蔵が大名の居城の中にあつたことから生ずる混乱の回避、畿内幕領年貢米の大坂・二条御蔵への集中による管理体制の強化などが考えられよう。

なお、高槻御蔵には、年貢米以外に、兵糧米・軍事米としての性格をもつ非常用備蓄米である城詰米も一万石が貯蔵された。高槻城の持つ軍事的・政治的役割などを考えると、元和期には兵糧米の貯蔵が始まっていたことは間違いないであろう。延宝四年時点での詰米規定高は一万石であり、当時は近江国幕領から調達されることになっていた(但

し、米不足の時には河内・摂津・和泉三カ国からも詰米された⁽³⁵²⁾。下鳥羽浜車仲間の書上には「同年（延宝四年）、江州御代官より摂州高槻え御詰米御役相勤候、元禄元年迄壹ケ年二車数式千輛ツ、相勤申候事」（括弧内は引用者）とある⁽³⁵³⁾。高槻御蔵廃止にともなう城詰米一万石の処置については、「高槻御蔵元禄三年午大津へ引ル、城付二千石残ル」とあるように、大部分が前年に大津御蔵に移送され、二〇〇〇石だけが残されることになった。そして、この二〇〇〇石の貯蔵・管理は高槻藩に命じられ、以後同藩の城詰米だったのである。その詰米規定高は、延享二年の時点で米二〇〇〇石、宝暦元年の時点では米三〇〇〇石となっている⁽³⁵⁵⁾。

(六) その他の御蔵

(I) 伏見御蔵と淀御蔵

畿内には、前述した大坂・二条・高槻の幕府御蔵以外に一七世紀初頭には伏見・淀・永原・水口などにも幕府の御蔵が置かれた。丹波国桑田郡田能村の宮座記録には「慶長年中之頃者、当村御年貢米伏見御城江納来候也」と記される⁽³⁵⁶⁾。また、淀船の由緒を記した「淀船旧例之覚」には、「其頃（慶長十九年）、大坂堀川之御蔵ニ御詰米一万石余有之、淀舟を以積登セ候様ニ被成度之旨伊賀守様より淀河村与惣右衛門殿・木村惣右衛門殿え被仰渡候ニ付、淀船持共身命を不惜、敵中え罷越、右之御米早速伏見迄積登セ、御蔵奉行曾根勘六殿・守屋八兵衛殿え相渡申候」（括弧内は引用者）とある⁽³⁵⁷⁾。慶長期において、徳川家康の畿内支配の拠点となった伏見に御蔵が置かれ、曾根勘六（某）・守屋八兵衛（昌房）の二人の伏見蔵奉行によって管理されていたことが確認できる。

さらに、ほぼ同じ頃、京都・大坂間の水上交通の要衝としての淀にも御蔵が置かれていた。前述したように、福島

八左衛門（勝重）について、『断家譜』では「台徳院様御代淀御藏奉行」と記す。また、河内国志紀郡・河内郡の元和三年年貢勘定目録には、「米貳千三百五拾壹石三斗貳合 柴田五兵衛・中村奎右衛門渡、是ハ淀ノ御藏ヘ入」と記される。しかし、翌年の勘定目録では、米一九三八石余・大豆二六〇石が同じく柴田五兵衛・中村奎右衛門（之重）渡となっているが、納める蔵が淀御藏ではなく大坂城御藏に変更され、さらに米二七六石余・大豆一一四石余が「伏見御城米」として曾根勘六・守屋八兵衛渡とある。そして、元和五年からはすべて「大坂御藏詰」として大坂城御藏に納入されるようになった。⁽³⁵⁸⁾ 淀御藏は、元和四、五年頃には廃止されたものと推測される。

前述のように、曾根勘六・守屋八兵衛は伏見蔵奉行であったが、元和五年には曾根と守屋は大坂蔵奉行に移り、大坂城御藏への年貢米集中機能が強化されている。伏見城は元和五、六年頃から解体が始まり、殿舎・石垣等が大坂城などに移されたが、⁽³⁵⁹⁾ 伏見御藏も同五年から解体と大坂城への移築が開始され、同八年頃までに完了した（伏見城の正式な破却は元和九年）。淀・伏見の各御藏は元和中期にはその役目を終え、寛永期からは大坂・二条・高槻の各御藏に、そして元禄前期からは大坂御藏と二条御藏に収斂されたといえよう。

なお、前出の摂津国西成郡十八条村の年貢免状では、寛永十三年の場合、大坂・高槻御藏詰、江戸廻米とならんで、「十八石ハ枚方御藏詰」と記される。枚方宿をはじめ淀川沿岸村々は、寛永十年三月以降永井尚政（下総国古河から十万石で山城国淀に転封）が支配しているが、管見の限りでは、前記以外に枚方に幕府の御藏があったことをうかがわせる史料は見当たらない。⁽³⁶⁰⁾ 御藏の存否・役割などは後考を俟ちたい。

（Ⅱ） 永原御藏と水口御藏

永原御藏は、近江国野洲郡永原村の永原城址に建てられた「永原御殿」の中にあつた。「永原御殿」は将軍の上洛・

下向の際の休憩・宿泊施設であるが、御蔵は蘆浦代官観音寺が管理したと考えられる。寛永十年には城詰米一〇〇〇石を収納するため、御蔵の改修が観音寺(朝賢)に命じられている。⁽³⁶¹⁾ 御蔵の規模は九間と三間で、屋根は瓦葺きとされた。永原御蔵米は詰替のため毎年払米されたが、慶安五年の例でみると、観音寺は入札に深く関与していたことがわかる。観音寺は、入札値段や売却時期などについて、五畿内郡代・八カ国郡代(あるいは代官奉行)などとよばれた五味備前守(豊直)・水野石見守(忠貞)と相談し、指示を受け、そのうえで江戸の勘定頭・勘定衆へ払米に関する伺いを提出したのであった。⁽³⁶²⁾ 寛永十二年には幕府勘定所職掌が上方と関東とに分課され、寛永末年には農政部門と財政経理部門とが合一した「勘定頭制」が成立したといわれるが、⁽³⁶³⁾ 寛永・明暦・万治期頃における江戸勘定頭、五畿内郡代・八カ国郡代、上方代官の三者の関係を考える上で、畿内周辺地域において五畿内郡代・八カ国郡代の果たした役割があらためて注目されよう。

永原御蔵は、延宝四年の時点では寛永十年と同様に一〇〇〇石の詰米が命じられているものの、貞享四年・延享二年の段階では規定されていない。貞享二年に御殿が取り壊されたこと(前年に御殿の施設が入札にかけられている⁽³⁶⁴⁾)、同年に観音寺が船奉行・代官職を罷免されたことなどによるものと思われる。宝暦元年時点で、再び一〇〇〇石の詰米が規定されているが、実際に詰米されたかどうかは確認できない。

水口御蔵は、寛永十年に建てられた水口城(水口御殿)の中にあった。水口御殿は、永原御殿と同様に、將軍の上洛・下向の際の宿泊施設として水口宿の西方に建てられたものである。水口御蔵は、御殿建設とほぼ同じ頃に設置され、城詰米の貯蔵が命じられたものと思われる。水口城には城番が置かれており、御蔵の支配にも関与したものと思われるが、城詰米の出納など直接的な管理は水口周辺を支配した代官に委ねられた。城詰米は、「三千石御詰有之候所、

猪飼次郎兵衛預之内近年減千石に成候」とあるように、当初は三〇〇〇石詰められていたが、代官猪飼次郎兵衛預りの時に一〇〇〇石に減少してしまったのである。延宝二年に水口御殿の修復が行われることになり、寛文十二年詰替の「水口御城米」が一石につき銀五一匁九分五厘で払米されているので、この頃に減少したのかもしれない。そして、天和二年に水口城には石見国吉永藩主の加藤内蔵助(明友)が一万石を加増され二万石で入封するが、この時、残っていた一〇〇〇石も払米されたのであった。幕府管理の水口御蔵は加藤氏入封をもって廃止されたのである。なお、貞享二年には、時の城主加藤佐渡守(明英)に対して新たに二〇〇〇石の城詰米の貯蔵が命じられている。⁽³⁶⁷⁾

(以下、次号に続く)

註

- (1) 「癸卯雜記下」(『日本財政經濟史料』第八卷下、芸林社、一九七二年、五七九〜六九一頁)。
- (2) 「城詰米制」については、柳谷慶子「江戸幕府城詰米制の成立」(『日本歴史』四四四号、一九八五年)、同「江戸幕府城詰米制の機能」(『史学雑誌』第九六編第一二号、一九八七年)参照のこと。なお、本稿でも、譜代大名居城や直轄諸城などで一定量の貯蔵が義務づけられた非常用備蓄米を城詰米とよぶことにする。しかし、享保十八年以降、西国筋虫付損毛に際し救恤米として使用された城詰米の返済が始まった。返済米を貯蔵することになった御蔵では、以前の城詰米と区別する意味もあって、同十八年以前の城詰米を「定式御囲米」、以後新たに貯蔵された城詰米を「新規御囲米」とよんだ。そして、勘定所でもこの使い分けをしている。新旧城詰米の混同を避けるため、本稿では必要に応じてこの名称を併用する。また、全国各地の代官所の御蔵や主要な宿場には寛政期以降囲米・囲切などの貯穀がなされるようになるが、規模の小さいもの、江戸町会所関係の囲切蔵、大坂三郷社倉囲切を貯蔵した大坂天満川崎御蔵、御料所村々囲切等は、本稿の分析対象から捨象しておく。
- (3) 「蠶餘一得」三集・卷十(『内閣文庫所蔵史籍叢刊・4』、汲古書院、一九八一年、五六六頁)。
- (4) 大野瑞男「浅草米蔵について」(『史料館研究紀要』第9号、一九七七年)。三田村鳶魚「札差考」(『三田村鳶魚著作

全集』第六卷、中央公論社、一九七五年、二四三頁）でも浅草御蔵の規模について記す。また、「撰要永久録」では、享保十七年に浅草御蔵町火消駆付人足が定められた際に、「御堀七ツ、御蔵数式百七拾五番、棟数七十餘、御門三ツ」と記す（『東京市史稿』市街篇、第二十二、一九三四年、七九〇頁）。御蔵規模に関しては各種史料で異同・混乱がみられる。

(5) 「文政町方書上」（『東京市史稿』市街篇・第四、一九二八年、五三・五四頁）。

(6) 「御詔言申上候一札之事」（『神奈川県史』資料編6・近世（3）、一九七三年、三三五頁）。

(7) 「御蔵旧例書」（東京国立博物館蔵、徳川宗敬氏寄贈史料のうち）。以下、本稿では、徳川宗敬氏旧蔵「御蔵旧例書」を使用して記述する。大野瑞男氏は、前掲「浅草米蔵について」の中で神宮文庫蔵の「浅草米稟旧例」を史料紹介している。この「浅草米稟旧例」は写本であり、内題は「御蔵旧例書」とあるとされる（以下、神宮文庫本）。一方、徳川宗敬氏旧蔵「御蔵旧例書」は、上・中・下の三冊からなり、こちらも写本である。そして神宮文庫本同様に誤写された箇所があるとともに、一部欠落がある（以下、徳川宗敬氏旧蔵本）。神宮文庫本の大野氏紹介史料と徳川宗敬氏旧蔵本とを比較すると、数値・人名・役職名、字句等明らかな違いは一二〇カ所以上におよぶ（宛字、漢数字と漢字の違い、送り仮名の有無、漢字と平仮名・片仮名の違い等単純な違いは除く）。そして、神宮文庫本が誤っている場合もあれば、逆の場合もある。また、例えば本所御蔵に関する記事で、徳川宗敬氏旧蔵本においては、「御蔵惣立坪三千八百式拾五坪」・「御蔵棟数式拾壹棟」・「同戸前数百五拾戸前」とあり、御蔵総建坪の箇所に「当時御建増、右之坪数相増」と朱書されている。一方、神宮文庫本においては、「御蔵惣立坪」の記載はあるが坪数の箇所が空欄となっており、「御蔵棟数三拾七棟」・「同戸前数式百四拾六戸前」とある。このことは、写本時において、単に原本を写したのではなく、その時に必要に応じて数値等が修正された可能性があることを示している。ともあれ、写本「御蔵旧例書」を使用する場合は、神宮文庫本と徳川宗敬氏旧蔵本の校合が必要となろう。なお、「御蔵奉行へ申渡」（写）（東京大学史料編纂所蔵）も「御蔵旧例書」の一部と重複している。

(8) 大野瑞男『江戸幕府財政史論』（吉川弘文館、一九九六年）、七五〇八四、八八〇九〇、一一七〇一一九、一五八〇六一、四二〇〇四二三頁。

(9) 「憲教類典」二之五（前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊・38』、一九八四年、二二二頁の享保十六年三月「御目見以上御役勤之内、御足高并御役料定」）。前掲徳川宗敬氏旧蔵「御蔵旧例書」。

- (10) 「札差事略」拾二(『札差事略』中、創文社、一九六六年、四四・四五・五二頁)。
- (11) 高柳眞三・石井良助編『御触書天保集成』下(岩波書店、一九四一年)、五一一九号。
- (12) 『新訂寛政重修諸家譜』第二十二(続群書類従完成会、一九六六年)、二九六頁(辻)。「同」第十九、二三二頁(牛田)。「同」第十八、三三九頁(堀内)。「同」第三、一〇六頁(山本)。「新訂増補国史大系・徳川実記」第八篇(吉川弘文館、一九七六年)、八三五頁。
- (13) 前掲「憲教類典」二之五(二三一頁)。
- (14) 「浅草本所御蔵御用留」(前掲『日本財政経済史料』第五卷上、八五頁)。前掲徳川宗敬氏旧蔵「御蔵旧例書」にも弘化期以前の「御蔵小買物御入用金」の記載があるが、「浅草本所御蔵御用留」とは年月に少し違いがある。
- (15) 「徳川禁令考」前集第三(創文社、一九五九年)、一五一一号。前掲徳川宗敬氏旧蔵「御蔵旧例書」。高柳眞三・石井良助編『御触書天明集成』(岩波書店、一九三六年)一八九三号。
- (16) 「吏徴」上卷(『続々群書類従』第七・法制部、続群書類従完成会、一九六九年、二六頁)。「吏徴別録」下卷(『同』第七・法制部、九三頁)。
- (17) 前掲『新訂増補国史大系・徳川実記』第三篇、二八四頁。前掲『新訂寛政重修諸家譜』第九、九三頁。「同」第十五、二五五頁。
- (18) 前掲『新訂増補国史大系・徳川実記』第三篇、二七八・二八〇頁(六月二十二日、七月八日の条)。大久保藤三郎については、「同」第二篇、四〇二頁、および前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十二、五一頁。
- (19) 前掲「吏徴別録」下卷(一一七頁)。
- (20) 「屋鋪渡預絵図証文」(『東京市史稿』市街篇・第二十三、一九三四年、一八三・一八四頁)。前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』九七頁。
- (21) 前掲「蠹余一得」三集・卷十(五六六頁)。
- (22) 「寛政録」・「享和録」(前掲『東京市史稿』市街篇・第三十二、一九三八年、六八・一〇〇二頁)。前掲徳川宗敬氏旧蔵「御蔵旧例書」。前掲「御蔵奉行へ申渡」。
- (23) 「浅草本所御蔵御用留」(『東京市史稿』港灣篇・第一、一九二六年、八二五・八二六頁)。「柳営日次記」(『同』救済篇・第四、一九二二年、五五二・五六七頁)。「同」(『同』市街篇・第四十二、一九五五年、二七九・九七三頁)。「安

政録」(『同』市街篇・第四十五、一九五七年、九五二・九五三頁)。

(24) 前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』七五〇八四頁。

(25) 大阪市史編纂室所蔵『藻井家文書』。

(26) 『藤井寺市史』第六卷・史料編四・上(一九八三年)、一四八〇一五〇頁。

(27) 『岐阜県史』史料編・近世三、一八九〇一九一頁。

(28) 前掲徳川宗敬氏旧蔵『御蔵旧例書』。

(29) 新潟市郷土資料館蔵『川村清兵衛家文書』。

(30) 大野瑞男『享保改革期の幕府勘定所史料―大河内家記録(一)』(『史学雑誌』第八〇編第一号、一九七一年)。また、『甲辰雜記一』(前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四六八・四六九頁)には、『江戸御蔵』貯米を三万石に引き下

げようとしたが、五万石貯米となったとの記事がある(享保十年二月)。

(31) 大野瑞男『延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)』(『史学雑誌』第八九編第六号、一九八〇年)。

(32) 拙稿『文久元年の幕府財政史料』(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十九年度)。

(33) 前掲大野瑞男『延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)』。

(34) 前掲拙稿『文久元年の幕府財政史料』。

(35) 万延二年二月「東都御囲糶有高書付」(前掲『日本財政經濟史料』第五卷上、一六八・一六九頁)。なお、文久三年三月には、浅草御蔵から非常御囲米として武州米一五二七石が西の丸御春屋へ、同米四〇七石が西の丸大手前歩兵屯所土蔵へそれぞれ搬入された(『浅草本所御蔵御用留』(前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四九七・四九八頁))。江戸の御蔵囲糶高については、『吹塵録』上(原書房、一九六八年、二二四頁)にも、「嘉永元年江戸蓄穀有高」として、前掲万延二年二月「東都御囲糶有高書付」と全く同じ史料が収載されているが、これは嘉永元年ではなく、万延元年の誤りと考えられる(『安政六未年元当分預所勤方書付』(前掲『岐阜県史』史料編・近世三、二二頁)によれば、万延元年六月には増田作右衛門代官支配地から糶二四〇石が小菅納屋へ納入されており、また、『御勝手帳』第四冊(前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊・49』、一九八五年、三〇七頁)によれば同年九月には小菅納屋囲糶二万石が摺り立てられている。従って嘉永元年十二月晦日と万延元年十二月晦日の間に囲米高が変化しており、出納がなかったことが原因の同一数値ではない)。

- (36) 前掲『吹塵録』上、二二三頁。
- (37) 前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。
- (38) 拙稿「静岡藩の成立と財政」(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十五年度)。
- (39) 『維新史料綱要』巻九(東京大学出版会、一九三八年)、五八頁。
- (40) 前掲『維新史料綱要』巻九、八五・一六一頁。
- (41) 『復古記』第七冊(内外書籍、一九三〇年)、一一八―一二〇頁。
- (42) 前掲『復古記』第七冊、一一五・一一六頁。
- (43) 前掲拙稿「静岡藩の成立と財政」。
- (44) 「大蔵省沿革志」(『明治前期財政経済史料集成』第二巻(原書房、一九七八年)、一九・二四・二九・六二頁)。
- (45) 「民政裁判所勤仕御請仕候者共之儀ニ付申上候書付」(徳川林政史研究所保管『徳川宗家文書』)。
- (46) 前掲『東京市史稿』市街篇・第四、一九二八年、四八・四九頁。『同』港灣篇・第壹、一九二六年、四一四頁。
- (47) 前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』八九・九〇頁。
- (48) 「慶長江戸図」(慶長十二年頃のもの)は、前掲『東京市史稿』市街篇・附図・第一所収。「慶長江戸之図」は、『同』皇城篇・附図所収。
- (49) 前掲『蠹餘一得』四集・巻一(五九一頁)。
- (50) 「御府内備考」巻之三・御曲輪内之一(和田倉御門)(大日本地誌大系『御府内備考』第一巻、雄山閣、一九七〇年、四八頁)。
- (51) 「江戸城跡・和田倉遺跡」(千代田区教育委員会、一九九五年)三三頁。前掲『東京市史稿』市街篇・第四、四八・四九頁。正保元年「正保江戸図」・寛文十年「寛文江戸図」は、前掲『東京市史稿』市街篇・附図・第一所収。延宝七年「江戸方角安見図」(乾)は、『古板江戸図集成』巻四所収(中央公論美術出版、一九五八年)。
- (52) 元禄三年「江戸大絵図」・同六年「江戸正方鑑」は、前掲『古板江戸図集成』巻六(一九五九年)所収。享保元年「分道江戸大絵図」(乾)は、『同』巻七(一九五九年)所収。
- (53) 以上、谷之御蔵に関する記述は「文政町方書上」・『東京府誌』・『東京通志』・『誠斎雜綴』(『東京市史稿』港灣篇・第一所収、一九二六年、四六七―四七〇、六八二・六八三・七三九頁)、「天和三録」(『同』産業篇・第七、一九六〇

年、七〇〇頁）、『御府内往還其他沿革図書』五（『東京市史稿』市街篇・附録、『御府内沿革図書』第一篇下、一九四三年、二五九・二六二頁および付図）、同七（同）第二篇上、六六・六七頁および付図）、『甲辰雜記』（前掲『日本財政經濟史料』第五卷上、六四頁）、前掲『御府内備考』卷之六・御曲輪内之四（薬研堀）（前掲大日本地誌大系『御府内備考』第一卷、一〇二頁）、『竹橋蠶簡』卷五（前掲『竹橋餘筆』所収、一二二頁）、前掲延宝七年「江戸方角安見図」（乾）、前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』（八九頁）によっている。

- (54) 「撰要永久録」（『東京市史稿』市街篇・第十八、一九三三年、九一三・九一四頁）。近世史料研究会編『正宝事録』第二卷・一五五一号（日本學術研究会、一九六五年、五三頁）。なお、『誠齋雜綴』（前掲『東京市史稿』港灣篇・第壹、七三九頁）にも、同年鉄砲洲御蔵が廃止されたとの記事がある。

- (55) 宝永五年「分間江戸大絵図」は、前掲『東京市史稿』産業篇・第九の附図。

- (56) 「竹橋余筆別集」卷十（前掲『竹橋餘筆』所収、六四四・六四五頁）。

- (57) 「御府内往還其他沿革図書」二（前掲『御府内沿革図書』第一篇上、一〇〇頁および付図）。享保十年「分道江戸大絵図」は、前掲『古板江戸図集成』卷七所収。

- (58) 「東京通志」（『東京市史稿』産業篇・第六、一九五八年、八四八頁）。「御府内備考」卷之五・御曲輪内之三（駿河大納言殿御館跡）（前掲大日本地誌大系『御府内備考』第一卷、九一頁）。

- (59) 「御府内備考」卷之四・御曲輪内之二（御蔵）（前掲大日本地誌大系『御府内備考』第一卷、六五頁）。

- (60) 「柳營日次記」（前掲『東京市史稿』産業篇・第七、一九六〇年、八二二・八二三頁）。前掲『新訂増補国史大系・徳川実記』第五篇、五〇七・五二九頁。

- (61) 前掲『徳川禁令考』前集第三、一五二一（二一四頁）。

- (62) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」。

- (63) 「柳營日次記」（『東京市史稿』市街篇・第四十二、一九五五年、四七五・四七六頁）。同（同）市街篇・第四十三、一九五六年、五〇七頁）。同（同）皇城篇・第三、一九一二年、一一一八頁）。

- (64) 前掲「蠶余一得」三集・卷十（五五八・五五九頁）。

- (65) 『東京市史稿』市街篇・第二十二、一九三四年、六五八・六五九頁。

- (66) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」。前掲徳川宗敬氏旧蔵「御蔵旧例書」。

- (67) 前掲『日本財政経済史料』第五卷上、一六八頁。
- (68) 「柳營日記」(前掲『東京市史稿』市街篇・第三十九、一九五二年、三九五・三九六頁)。
- (69) 前掲『東京市史稿』市街篇・第二十二、六五六頁。
- (70) 前掲『東京市史稿』市街篇・第二十二、六五六・六五七頁。
- (71) 前掲『東京市史稿』産業篇・第十三、五四一・五四二頁。
- (72) 前掲『東京市史稿』市街篇・第二十二、一〇三四〜一〇三六頁。
- (73) 「兼香公記」(享保十六年七月一日の条)にも「於関東五軒二百軒之米蔵出来之沙汰、是近年米下直諸旗本令難渋、仍武命米可為高直用意」とある(前掲『東京市史稿』市街篇・第二十二、六五六頁)。なお、享保期の米価政策については、本庄栄治郎『米価調節史の研究』(本庄栄治郎著作集・第六冊、清文堂、一九七二年)二〇五〜二三〇頁など参照のこと。
- (74) 「浅草本所御蔵御用留」(前掲『日本財政経済史料』第一卷上、二九〇・二九一頁)。「触留」(『東京市史稿』市街篇・第四十七、一九五八年、三七四頁)。
- (75) この地は、寛永年間に関東郡代伊奈半十郎(忠治)に与えられた小菅屋敷地一〇万三二五四坪余の跡地でもあった。この屋敷地には、元文元年から寛政四年まで、徳川吉宗の命によって建てられた小菅御殿があり、鷹狩りの時などに御膳所として利用された。なお、この小菅屋敷跡地のうち一万五〇〇〇坪は寛政八・九年頃一橋家御用地となり、さらに天保三年に一万六一八三坪余、同十五年に一万三八三坪余、安政元年に三八四三坪余(合計三万四一〇坪余)が江戸町会所の囲籾納屋建設用地として引き分けられた(天保四年に一万坪、同九年に六〇〇〇坪、同十五年に一万坪とする史料もある)。そして同所には、天保六年六月時点までに二九棟が完成したのをはじめとし、嘉永二年三月までに合わせて五一棟(九九戸前)の町会所囲籾蔵が建てられた(『小菅籾蔵関係文書』(葛飾区古文書史料集六、葛飾区郷土と天文の博物館、一九九二年)一三、九三、一二二〜一二七、一五一〜一五九頁。京都大学所蔵『大竹氏記録』)。
- なお、以下、小菅納屋に関しては、とくに注記しない限り『小菅籾蔵関係文書』によっている。
- (76) 『雜留』七(国立公文書館・内閣文庫所蔵)。
- (77) 前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。
- (78) 松平定光校訂『宇下人言・修行録』(岩波文庫、一九四二年)九〇〜九二頁。

- (79) 前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。
- (80) 但し、本文で後述する文化三年・四年・七年の関東筋在方作徳粃買上分（合計粃七万三七〇〇石、摺り立てのうえ浅草御蔵へ回送）や弘化元年までの払米・払粃の合計粃三万七四一五石八斗一升七合（米は粃換算、代金は米価掛り取扱い金に加えられた）を考慮すると、厩粃有高の内訳は変わってくる。
- (81) 万延二年二月「東都御厩粃有高書付」（前掲『日本財政経済史料』第五卷上、一六八・一六九頁）。「文久二戌年小菅納屋御勘定目録」（三井文庫所蔵）。文久元年十二月晦日の数値については、前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」では二万三七二四九石余となっているが、このほかに廻米方掛りの粃八四四石五斗五升があるのでこれを加えた。
- (82) 『大田区史』資料編・平川家文書1（一九七五年）、六一六頁。
- (83) 「御勝手帳」第九冊（『内閣文庫所蔵史籍叢刊』50、汲古書院、一九八五年、三二一頁）。文久三年九月には、現実には水戸領分収納米・粃合わせて三万石が買い上げられることになり、元治元年五月の時点までに粃一万三〇〇〇俵余・玄米一万七〇〇俵余が納入された（「御勝手帳」第十六冊（前掲『同』51、一九八五年、四九四頁）。なお、前年の文久二年には、幕府は文久元年の物成米のうち一〇万石を粃納させ、これによって廻米が減った分は買上で対処する方針を打ち出した。このため同二年春には松平陸奥守領分収納米二万石が買い上げられ、同年末にはさらに三万両分の米を買い入れることを決めている（「御勝手帳」第八冊（前掲『同』50、一六三頁））。
- (84) 「御勝手帳」第四冊（前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊』49、一九八五年、三〇七・三〇八頁）。「浅草本所御蔵御用留」（前掲『日本財政経済史料』第一卷上、二九一・二九二頁）。
- (85) 「浅草本所御蔵御用留」（前掲『日本財政経済史料』第五卷上、六九・七〇頁）。
- (86) 「新編武蔵風土記稿」卷之二十二・葛飾郡之三（小菅村）（大日本地誌大系『新編武蔵風土記稿』第二卷、雄山閣、一九九六年、二一・二二頁）。
- (87) 「武蔵通志」（『東京市史稿』救済篇・第二、一九二〇年、一〇九七・一〇九八頁）。
- (88) 「県令集覧」（村上直・荒川秀俊編『江戸幕府代官史料—県令集覧』、吉川弘文館、一九七五年）。
- (89) 前掲「新編武蔵風土記稿」卷之二十二・葛飾郡之三（小菅村）（二一・二二頁）。
- (90) 「七分積金」（都史紀要七、東京都、一九六〇年）五六頁。
- (91) 前掲「七分積金」四八頁、および五四・五六頁。

(92) 町会所の罫納屋の場合、建設中は、吟味方御勘定や町方両組与力が普請所を見回ったほか、町会所の座人二人、勘定所御用達手代二人、吟味方下役・普請役から一人、町方両組同心一人の計六人が普請所に日々詰めていた。しかし、小菅構内をべ切としたため、勘定方と町方与力が納屋を封印し、鍵を「小菅納屋詰」代官手代に預けて、一同は同所を引き払った。同所の警備は、「小菅納屋詰」代官手代や同所小作人らに委ねられ、勘定方、町方両組与力・同心、町会所座人は折々見回ることとされた。

(93) 「小菅県引渡演説書」(東京都公文書館所蔵)。

(94) 拙稿「馬喰町貸付役所における公金貸付の実態」(『横浜商大論集』第二八巻第二号、一九九五年)。

(95) 『いまいち市史』通史編Ⅱ(一九九五年)、二二一・二二二頁。

(96) 前掲「御勝手帳」第九冊(二二六・二二七頁)。

(97) 以下、記述の多くを前掲『いまいち市史』通史編Ⅱ(第二章第三節、竹末広美氏執筆担当)、二二〇～二四二頁によっている。

(98) 前掲『いまいち市史』通史編Ⅱ、二二八頁には、大竹左馬太郎当分預所から一一四七石とあるが五七七石の誤り(竹末広美氏ご教示による)。なお、天保九年の場合、今市御蔵の総詰米高は米四三六三石であった(前掲『吹塵録』下、一九六八年、一一九頁)。

(99) 前掲『長坂氏記録』第一六冊。「金銀米納方御定」には、寛政二年の記述があるが筑後国幕領の記載がないことなどから、寛政二年以降文化三年(この年に筑後国の旧三池藩領が幕領となる)までの間の状況を示すものと考えられる。一方、「野州今市御蔵詰之事」を含む廻米方の「覚」は、年不詳であるが、内容から安永末年頃の状況を示すと推定される。

(100) 前掲柳谷慶子「江戸幕府城詰米制の機能」。

(101) 松尾(善積)美恵子「手伝普請一覧表」(『学習院大学文学部研究年報』第一五輯、一九六八年度)。「日光市史」中巻、一九七九年、四二四～四二八頁。

(102) 「御勝手帳」第十二冊(前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊・51』、七頁)。同史料では差引七七〇石余の不足となるとしているが、これは諸渡方の見積りの端数を切り捨てず差引したためと考えられる。

(103) 前掲『維新史料綱要』巻九、一一・八一頁(最初五月三日に上野・下野地方の鎮撫を命じられたが辞退し、十八日

改めて下総・下野地方の鎮撫を命じられたとある。『栃木県史』通史編5・近世二（一九八四年）、一三八四・一三八五頁。『同』通史編6・近現代一（一九八二年）、三四〇・三九頁。

(104) 横須賀史学研究會編・浦賀奉行所関係史料『新訂白井家文書』第二卷（一九九七年）、五八・五九頁。

(105) 「御番所跡・御屋鋪跡・両御組屋鋪跡・御固所坪数・湊口満干并深淺記之」（前掲浦賀奉行所関係史料『新訂白井家文書』第一卷（一九九五年）、一三四・二三五頁）。

(106) 前掲『^{新訂}増補国史大系・徳川実記』第八篇、二二六頁、十二月二十五日の条。初代浦賀奉行には下田奉行堀隠岐守（利雄）が就任した（前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十二、三五九頁）。

(107) 「天保集成廿八」（前掲『日本財政経済史料』第十卷下、八一八・八二〇頁）。浦賀奉行の嘉永六年以降場所高については『嘉永明治年間録』上巻（嚴南堂、一九六八年、一一〇（四六・四七）頁）。

(108) 「浦賀奉行御預所御役知郷村請取渡書付」（『神奈川県史』資料編9・近世（6）、一九七四年、四〇二号（六〇三・六一七頁））。なお、弘化四年六月〜嘉永五年六月までは三〇九五石余、同五年六月〜安政六年二月までは八一二石余、同六年二月〜文久二年十一月までは二四二四石余、同二年十一月〜元治元年四月までは三四五六石余、同年四月以降は三五二七石余などとなっていた。

(109) 浦賀奉行を含む奉行所役人の構成、役高・役料・切米扶持方、浦賀奉行預所などの記述は以下の史料に拠っている。『大日本近世史料・柳宮補任五』（東京大学出版会、一九六五年）一二七〜一三二頁、「文久二戌年浦賀御蔵御勘定目録」（三井文庫蔵）、前掲『憲教類典』二之五（二三九頁）、横須賀史学研究會編・浦賀奉行所史料第一集『白井家文書』上・下巻（一九六七・六八年）所収の「解説（二）」および同書所収史料（「勤方諸事扣帳」・「相州御備場松平肥後守跡被仰付候ニ付諸進達留」、前掲「吏徴別録」上巻（七三頁）、前掲「吏徴」上巻（二五頁）。なお、浦賀奉行支配組頭は嘉永三年三月に新設されて二人が任ぜられたが、安政五年以降文久三年までは一人となった（以後廃止か）。なお、与力は、浦賀移転時には一〇騎、同心は五〇人であった。

(110) 前掲浦賀奉行所関係史料『新訂白井家文書』第三卷、鈴木亀二氏「解説（三）」（一九九八年、八・九頁）。移転以前にも手代居小屋が御蔵所近くに建てられており、嘉永期には二棟があった（「御廻留并下知」（東北大学附属図書館蔵『狩野文庫』の「藤野記録」所収））。

(111) 「相州御備場松平肥後守跡被仰付候ニ付諸進達留」（前掲浦賀奉行所史料第一集『白井家文書』下巻、三三八頁）。

(112) 「相州浦賀御蔵納米立会出役之儀ニ付伺書」(江川文庫蔵)。浦賀御蔵詰代官の手付・手代による立会出役は、駿府・今市御蔵などでも行われているとして、「不取締」を懸念する代官江川太郎左衛門の働きかけで実現したものである。

(113) 前掲『長坂氏記録』第一六冊。

(114) 三井文庫所蔵。竹垣三右衛門は、文久二年八月一日に江戸廻り代官から馬喰町御用屋敷詰代官となった。前年浦賀御蔵を支配・管理した馬喰町御用屋敷詰代官の小林藤之助は、文久二年七月二十四日に老衰のため代官職を辞している。浦賀御蔵の支配・管理は、八月に小林から竹垣に移ったものと思われる(前掲『県令集覧』、西沢淳男『幕府陣屋と代官支配』(岩田書店、一九九八年)一八六頁)。

(115) 「相州御備場松平肥後守跡被仰付候ニ付諸進達留」(前掲浦賀奉行所史料第一集『臼井家文書』下巻、三三八～三四〇頁)。

(116) 仲田正之『葦山代官江川氏の研究』(吉川弘文館、一九九八年)二五八～二八七頁。「伊豆国村々当子年御年貢浦賀御詰米御蔵庭帳」(江川文庫蔵)には、「相模・伊豆両国」から嘉永五年十二月二十三日に詰米が開始され、翌年二月十日に終了したと記される。なお、伊豆葦山江川代官支配地の年貢米については、弘化元年分は伊豆国村々年貢米のうちから、安政三年分は相模国高座郡・大住郡村々年貢米のうちから、同四年分・同六年分・文久三年分は相模・伊豆両国村々年貢米のうちから、それぞれ浦賀御蔵に詰米されていた(確認された地域分のみ)(弘化元年十一月十二日「柿崎御廻状写」(『下田市史』資料編三、幕末開港上、一九〇〇年、一二二頁)、「浦賀御詰米納手付御入用已御勘定組伺書」・「同手代御入用已御勘定組伺書」・「同手代御入用未御勘定組伺書」・「同手代御入用亥御勘定組伺書」(江川文庫蔵))。

(117) 天保十二年「書拔帳」(前掲『日本財政経済史料』第十巻上、二八九・三四五・四二九頁)。なお、「相模浦賀付」として、浦賀奉行の伊澤美作守(政義)・坪内左京(定保)から米一五〇〇石四斗四升五合九勺八才が浦賀御蔵に納められたとなっているが、このうち四石八斗五升九合余(城ヶ島分)は石代納されている(「田方検見書付」(前掲浦賀奉行所史料第一集『臼井家文書』下巻、二五頁))。また、天保九年の浦賀御蔵詰米高は、一九五三石八斗二升七合である(同年の浦賀奉行預所は高六五一七石余、年貢米納高一六四一石四斗二升七合余(ほかに金八七六両二分余)である(前掲『吹塵録』下、一一六・一一九頁)。したがって、同年の場合も、浦賀奉行預所年貢米がすべて詰米されたとしても不足しており、他の代官支配地からの詰米があったことがわかる。

(118) 宝暦十二年の記録に、「相州浦賀御番所附御年貢米、享保年中御代官松平九郎右衛門方江可相渡之、置証文を以是迄向寄御代官江相渡来り候得共、御代官も替候儀故、此度右御証文御改直被下候之様致度候間、浦賀御年貢米当時向寄御代官伊奈半左衛門方江相渡、以来共向寄御代官江相渡候様置証文被下候、以上」とあり、さらに、文政五年時点でも浦賀奉行預所年貢米は馬喰町御用屋敷詰代官大貫次右衛門に預けられて浦賀御蔵に詰められている（浦賀御役所地方諸帳面銘書并仕立方）（前掲横須賀史学研究會編・浦賀奉行所関係史料『新訂白井家文書』第三卷、一九九八年、五〇頁）。

(119) 前掲『新訂国史大系・続徳川実記』第二篇（四七九・五一六頁）。『同』第三篇（一五一頁）。『吏徴附録』（前掲『続々群書類従』第七・法制部、一三七頁、なお嘉永六甲寅三月廿六日とあるのは、嘉永七年（三月二十四日）の誤り）。『諸御役代々記十六』（『古事類苑』官位部三、吉川弘文館、一九七八年、一四五六頁）。前掲『嘉永明治年間録』上卷（一四八・一四九頁）。

(120) 「豆州下田御米板蔵・同会所・御蔵番并手代居小屋御普請仕様帳」（江川文庫蔵）。

(121) 「非常之節糧米運送之儀ニ付奉伺候書付」（前掲『下田市史』資料編三・幕末開港上、八五・八六頁）。

(122) 「下田御蔵御詰米納払取計方伺書」・「下田奉行支配向江可相渡御切米御扶持方、浅草御蔵より品川沖君沢形御船迄運賃金已御勘定組伺書」（江川文庫蔵）。

(123) 延宝四年「所々御城米」（姫路市立図書館蔵『酒井家文書』・前掲『憲教類典』五之九（五四頁）。なお、『憲教類典』五之九（五〇～五五頁）の史料は「年月日不知」とあるが、内容から貞享四年前半のものと推定できる。

(124) 前掲『憲教類典』五之九（五四頁）。同史料では伊豆三島代官を坪内三郎兵衛としているが竹内三郎兵衛（信就）の誤り（前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十五、二四五頁）。

(125) 『清水町史』別編資料集1（近世史料）、一九九八年、一〇・一一頁。

(126) 『葦山町史』第五卷上（一九八九年）、三九〇頁。

(127) 前掲『竹橋蠶簡』卷五（一二二頁）。

(128) 蒲原代官一色忠次郎（直為）の承応二年「駿州蒲原領丑之御勘定帳」（『竹橋余筆』卷五（前掲『竹橋餘筆』所収、二六七頁））には、「善徳寺御殿番田中十右衛門・安岡次郎右衛門」とあり、富士川対岸の富士郡善徳寺村（後の今泉村）にも御殿が置かれていたこと、善徳御殿も蒲原代官が支配・管理していたことなどが確認できる。

(129) 前掲「憲教類典」五之九(二八頁)。なお、史料には天明三年十二月とあるが、その内容は宝暦元年。

(130) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。前掲『吹塵録』上、二二三・二二四頁。

(131) 神奈川御殿および神奈川陣屋については、井上攻「神奈川御殿について」・斎藤司「神奈川陣屋とその役割」(いずれも山本光正編『東海道神奈川宿の都市的展開』所収、文献出版、一九九六年)が詳しい。

(132) 『藤沢』(藤沢市文書館、一九八三年)九八・九九頁。

(133) 『新修大阪市史』第三卷(大阪市、一九八九年)、一七三―一七五頁、二九四―二九六頁。

(134) 松平忠明を大坂城主とみるか城代とみるかなどについては、松尾美恵子「大坂加番制について」(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十九年度)、『大坂御城代公用人諸事留書』(上)(大阪市史史料第三十八輯、大阪市史編纂所、一九九四年)、一二二―一二〇頁の「解説」参照のこと。

(135) 前掲『新修大阪市史』第三卷、一八一頁。

(136) 前掲「吏徴別録」下巻、九四頁。

(137) 前掲『新修大阪市史』第三卷(一八一頁)では、河内国志紀郡・河内郡の元和三年年貢勘定目録から「米貳千三百五拾壹石三斗貳合 柴田五兵衛・中村奎右衛門渡 是ハ淀ノ御蔵ニ入」との記事を載せる。そして、翌年の勘定目録では、米一九三八石余・大豆二六〇石が同じく柴田五兵衛・中村奎右衛門渡となっているものの、納める蔵が淀ではなく大坂御蔵となっていることから、淀蔵奉行の柴田・中村が元和四年に大坂蔵奉行となったとみている。前掲『新訂寛政重修諸家譜』には両人の名はなく、『断家譜』第二(統群書類従完成会、一九六八年、六〇頁)に中村奎右衛門の名がある。しかし、奎右衛門(之成)は「大神君江御奉公、台徳院様御代大坂両度役供奉」、奎右衛門(之重)は「大猷院様御代御代官」とのみ記される。一方、前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』(二六二―二六七頁)所収の表「勘定目録に記載の御蔵奉行」からは、両人の名前を見いだすことはできない。柴田・中村両人の補任については、今後の検討に委ねたい。なお、元和五年「濃州末之年負払御勘定目録」によると、美濃国奉行岡田將監(善同)は、同年に三二二・三一石四斗七合を大津まで届け、中村・柴田両人に渡したとある(『岐阜県史』史料編・近世三、一九六六年、一八八・一八九頁)。

(138) 前掲『大日本近世史料・柳営補任五』七一頁。それまで大坂蔵奉行を勤めていた原田彌之助(正重)の場合、「寛文

五年九月手代の者罪科に處せらるゝにより、そのことに坐して小普請に貶さる」と記される（前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十、四頁）。

- (140) 前掲『大日本近世史料・柳営補任五』七一〜七五頁。なお、同書では大原彦四郎の転出を宝暦十八年十二月二日とするが、宝暦八年の誤り。

- (141) 前掲「吏徴別録」下巻（九四頁）。

- (142) 前掲『雜留』二五。同史料には、宝暦九年十月の江戸・大坂の御除金銀高をはじめ、駿府・甲府金藏金、足尾銅山・佐州筋金・各地灰吹銀上納、金座預金・銀座運上、朝鮮人参代・琉球進貢料接貢料、大坂払米取捌、切米扶持方・役料、各地在番・加番合力米、小普請役金・遠国役金拝借金、各地御蔵詰米、長崎廻米、野馬払代、江戸向為替、城修復・飛州樽木材木・川船運上・日光助成貸付金、奥向経費、日光・東叡山・増上寺・伝通院領、相模守・佐渡守被仰渡之趣、遠国諸役所一カ年納払、などの項目が記される。延享二年の「御勝手向御用定」（大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）・（二）」（『史学雑誌』第八九編第六・七号、一九八〇年）と比べると内容は簡略であり、また、記載されていない事項も多々ある。しかし、この「雜留」二五は、長崎廻米高などから宝暦末年から明和初年頃の状態を示すものと推定されるので、延享期以降の変化がわかる貴重な史料といえる。

- (143) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」。

- (144) 前掲『大坂御城代公用人諸事留書』（上）、七・一五頁。

- (145) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第九、六六頁。

- (146) 前掲『大日本近世史料・柳営補任五』七二頁。前掲『大坂御城代公用人諸事留書』（上）の「享保八卯年八月」と（同十四年三月まで）の条も「御蔵奉行仮役誓詞之事」とあって（四頁）、この頃に仮役が任命されるようになったことが確認できる。なお、『大日本近世史料・柳営補任五』では「在役」と記すが、「仮役」と同義と考えてよいであろう。

- (147) 前掲『大日本近世史料・柳営補任五』七四・七五頁。しかし、本文で示した史料にもあるように、享保十七年には仮役二人が任命されている（前掲『大坂御城代公用人諸事留書』（上）、七頁）。一方、延享元年に仮役の員数が二人と定められたとする史料もある（前掲「吏徴別録」下巻、九四頁）。したがって、仮役の員数が二人と定められたのが宝暦八年であったかどうかは定かでない。

- (148) 前掲「吏徴別録」下巻（九四頁）、前掲「憲教類典」二之五（二四〇頁）、前掲『古事類苑』官位部三（一三三三・

一三三四頁)。「官中秘策」卷之一(前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊・6』、八一四頁)には、役料現米八〇石とある。なお、元禄七年時点では、役料八〇石が支給されていた(『京都役所方覚書・下』(『京都町触集成』別巻一、岩波書店、一九八八年、一八四頁)。

(149) 『京都御役所向大概覚書』下巻(清文堂出版、一九七三年)、四〇四・四〇五頁。「竹橋余筆別集」卷七(『竹橋餘筆』、汲古書院、一九七六年、五六四頁)。「温知柳營秘鑑」卷五(前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊・5』、一九八一年、三四二頁)。なお、前掲『官中秘策』卷之一(八一四頁)では、御蔵奉行四人、手代一人ずつとある。

(150) 前掲『竹橋余筆別集』卷七(五六五・五六八頁)、前掲『大日本近世史料・柳營補任五』七二頁。

(151) 『大坂町奉行所旧記』(上)(大阪市史史料第四十一輯、大阪市史編纂所、一九九四年)、五六頁。なお、『文化武鑑』4(役職編)(柏書房、一九八二年、七三頁)では、文化五年の時点で手代が一人ずつ(計三〇人)と記す。

(152) 『大阪市史』第二(清文堂出版、一九一四年)、一五二頁。なお、玉造御蔵番へは切米七石二人扶持ずつが支給され、たが(前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、四〇四頁)、難波・天王寺御蔵番人へも同様に支給されたと考えられる。

(153) 「忍之杜」(前掲『日本財政経済史料』第四巻上、一八七頁)。

(154) 前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、四〇五頁。

(155) 前掲『竹橋余筆別集』卷七(五六五頁)。

(156) 前掲『竹橋余筆別集』卷七(五六四頁)。

(157) 前掲『雜留』二五。前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。

(158) 前掲『新修大阪市史』第三巻、一八七頁。「元和年録」(前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊・65』、一九八六年、五〇九頁)の元和八年六月の条。大阪市史編纂室所蔵『藻井家文書』のうち「年々御免定写覚」によると、摂津国十八条村の年貢の一部は、寛永十二年から万治期に「大坂御本丸詰」されている。これは、おそらく本丸多門などに収納されたのであろう(万治以降は史料がなく不明)。玉造御蔵は寛政九・十年に新蔵二棟八戸前が建増しされて三一棟となるが、元禄六年時点では二九棟である(「丹羽専助正武蔵手控」(前掲『日本財政経済史料』第一巻上、二四九頁)。前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、四〇二頁)。

(159) 前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、四〇一・四〇三頁。本丸多門に貯蔵された糶は伏見から持ち込まれたものであり、西の丸御蔵の糶は、正保四年・慶安元年・同二年・寛文六年・延宝六年に収納された。寛文六年の場合は、高

一万石につき八五石四斗二升五勺の割合で年貢米をもって五畿内幕領から徴収されたものであった（『竹橋蠹簡』巻四（前掲『竹橋餘筆』、九一・九二頁）。なお、延享二年時点では、本丸と西の丸御蔵に糶一万九一〇〇石余が貯えられていた（前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」）。

(160) 「丹羽専助正武蔵手控」〔前掲『日本財政経済史料』第一巻上、二四六～二五〇頁〕。

(161) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、三〇四～三〇六頁の「八カ国御取箇之外御蔵入掛り物之事」。

(162) 前掲『大坂御城代公用人諸事留書』（上）、三六頁。『大坂町奉行所旧記』（下）（大阪市史史料第四十二輯、一九九四年）、四二～四六頁の「御蔵目付勤方之覚」。

(163) 大野瑞男氏は「出納には蔵奉行・大番組蔵目付・城代家士・両定番与力・両町奉行配下の蔵目付が臨検するのを常とし、これを五カ所蔵目付といった」（前掲『江戸幕府財政史論』三五七頁）としているが、これは誤りであって、五カ所蔵目付とはこのうちの城代家来（一人）・両定番与力（計二騎）・両町奉行与力（計二騎）の蔵目付の呼称である。

(164) 前掲『^{新訂}増補国史大系・徳川実記』第六篇、三五三頁（元禄十一年十二月二十一日の条）。西の丸塩増蔵は三棟一〇戸前で、その他櫓にも塩増蔵があった（『丹羽専助正武蔵手控』（前掲『日本財政経済史料』第一巻上、二四八頁））。

(165) 前掲『大阪市史』第一、三六六頁。なお、天明七年の味増有高は、同四年から同六年（同年分一万九〇四七貫目）までの分合わせて五万七二八六貫目であったとされる（『大坂町奉行管内要覧』大阪市史史料第十五輯、大阪市史編纂所、一九八五年、三九頁）。また、弘化三年の味増製造高は二万一九貫二九〇目、嘉永五年は二万二八貫二二〇目、安政三年は二万五三〇貫七〇目、同五年は一万九一九〇貫五七〇目、同六年は二万一八貫八〇〇目であった（『御勝手帳』第二冊（前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊』49、一四二・一四三頁））。

(166) 前掲『大坂御城代公用人諸事留書』（上）、三六頁。前掲『大坂町奉行所旧記』（下）、六五～六九頁の「御塩増役勤書」。なお、城代家来・両定番与力・両町奉行与力の塩増役は、五カ所塩増役とよばれた。

(167) 「大坂御蔵御詰米之事」〔前掲『雜留』二五〕。

(168) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、三〇四頁。

(169) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、三九六頁。

(170) 前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、四〇三頁。

(171) 『京都町触集成』別巻二（岩波書店、一九八九年）、三六〇頁。『同』第二卷（一九八四年）、三～三三、一九六～二

二九頁。

(172) 前掲『長坂氏記録』第一六冊。

(173) 前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』三四九頁。

(174) 前掲『大坂町奉行所旧記』(下)、四五頁。この年は試しに五〇〇石が送られ、翌明和元年から本格的に廻米が行われた(『新潟県史』通史編4・近世二、一九八八年、七一六頁)。

(175) 大番の大坂在番は元和五年から始まったが、毎年二組ずつ交代で勤務した(八月に交代)。一組は大番頭一人・組頭四人・番士五〇人(組頭含む)・与力一〇騎・同心二〇人で編成された。寛文五年以後は役料が支給されたが(同年に大番頭役料二〇〇〇俵、同六年に組頭二〇〇俵)、天和二年に廃止された(大番頭・組頭は役料の二〇〇〇俵、二〇〇俵をそれぞれ本高に加えられた)。しかし、元禄五年から家禄が五〇〇〇石以下の大番頭へは一〇〇〇俵の役料が支給されるようになり、享保八年には、大番頭五〇〇〇石・組頭六〇〇〇石・番士二〇〇俵高などの役高が定められた。合力米支給は寛永九年に始まったが、大番頭・組頭・番士には分限高(知行高)四ツ物成、与力には三ツ半物成で、十分一が大豆、残りの十分九が米で支給された。そして米・大豆とも五分四は金渡し、五分一を現物(米・大豆)渡しとし、五分四金渡りのうちの半分は、夏張紙値段をもって八月に、残り半分は冬張紙値段をもって正月に渡された。五分一の現物渡し分(米・大豆)は月々の渡しとされた。同心には、分限高(知行高)に關係なく合力米として現米三石、ほかに扶持方として二人扶持ずつが支給された。米金の割合、支払月は同様であったが、大番頭・組頭・番士・与力とは異なり十分一大豆渡しはなく、扶持については月々の渡しとされた。なお、元禄四年以前は、五分四金渡りのうち、米は五畿内米三分一銀納値段で、大豆は五畿内大豆十分一銀納値段で、いずれも大坂御金蔵銀が渡された。同五年以降に(元禄元年とする史料もある)米・大豆とも江戸御蔵の夏・冬張紙値段が適用されるが、渡りの時期は、二条在番の場合は五月と十月であった。同心への合力米はすべて銀子にて同様に年二回に分けて支払われた。また、合力米の支給方法は、米金両様あるいはすべて米渡し、金渡しなど何回か変更が加えられた。また、幕府の財政窮乏による支出抑制策にもとづき、宝暦八年十一月には大番頭への支給方法が、また、文化九年三月には番士・組頭への合力米の支給方法がそれぞれ改定された(『御勝手方御定書上』・『將軍家令条』・『寛明日記一』・『癸卯雜記二』・『辛丑雜記拔抄』・『戊申雜綴上』・『戊申雜記上』(前掲『日本財政經濟史料』第二卷上、三七五〜三七八、四二五・四二七、四三一〜四三四、四三八〜四四三頁)。前掲『新訂増補国史大系・徳川実記』第五篇・四四五頁、第六篇・一四三頁。前掲

「憲教類典」二之五（二二二・二二三頁）。前掲『雜留』二五。前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一八一頁。『同』下巻、四〇七頁。前掲『京都役所方覚書・下』（一七七〜一八二頁）。『御勝手方御定書并伺之上被仰渡候書付』第五冊（前掲『内閣文庫所藏史籍叢刊』30、一九八三年、六二〇・六二二頁）。高柳眞三・石井良助編『御触書天保集成』下、五三一―号（岩波書店、一九四一年、三七二頁）。前掲『古事類苑』官位部三、一〇二七〜一〇六〇頁など。

(176) 大坂加番制については、伏見の加番制が元和五年に大坂に引き継がれたとする説と元和期の大坂加番は臨時的なもので、制度としては寛永二・三年頃成立したという説の二説がある（前掲『新修大阪市史』第三巻・一八六頁、および前掲松尾美恵子「大坂加番制について」。大坂加番は、一年交代で四人の大名が任命された（寛永承応三年までは三人のことが多い。また、宝永二年〜五年までは三人）。合力米支給は元禄四年以降確認できるが、在番中は役高の四ツ物成の合力米が支給された。大坂加番の役高については、元禄期頃に本高一万石の者は本高のまま勤め、一万石以上の者は本高の一割程度を引いた高を役高とする慣例がつくられ、延享三年に至り、四カ所の持ち場とともに山里二万七〇〇〇石、中小屋一万八〇〇〇石、青屋口・雁木坂各一万石、計六万五〇〇〇石の役高に固定された。なお、延享三年当時は、大坂加番に対する合力米の支給方法は本番に対するのと同様であったとされる。しかし、元禄五年当時は、米と大豆の支給割合は九対一であったが、支給された米のうちの現物米と金渡りの割合は約一対九、大豆のうちの現物と金渡りの割合は約一対一九の割合であった。また、享保二年当時は、米と大豆の支給割合は九対一であったが、米・大豆ともそのうちの三分一が現物渡り、三分二が金渡りであった（『戊申雜綴上』・『戊申雜記上』、『日本財政經濟史料』第二巻上、四三八・四四一・四四二頁）。前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、四〇四頁。佐々木潤之介「幕藩関係における譜代大名の地位」（『日本史研究』五八号、一九六二年）。

(177) 「東武實録」卷第三十一（前掲『内閣文庫所藏史籍叢刊』2、一九八一年、六七七・六七八頁）。

(178) 承応三年八月二十五日および寛文六年五月二十五日の「定」（『憲教類典』二之十七（前掲『内閣文庫所藏史籍叢刊』38、四四一・四四七・四四八頁）。寛文七年十一月十七日の「覚」（前掲『徳川禁令考』前集第四、一九五九年、二〇〇八号）。年月日不知（貞享四年）「所々御城米并城付御米高」（前掲『憲教類典』五之九（五三三頁）。なお、城詰米であるのか不明であるが、寛永十三年には、「大坂御詰米」三万石が京都に運ばれ、町中に貸与されている（『史料京都の歴史』16・伏見区、京都府編、一九九一年、三六一頁）。

(179) 前掲『御勝手方御定書并伺之上被仰渡候書付』第五冊（六四九頁）。前掲大野瑞男「享保改革期の幕府勘定所史料」

大河内家記録（一）」。前掲同「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」。前者二つの史料には、「大坂定式御囲米」払代は翌年の遣方にあてるとあるが、「酒井家記録（一）」には、為替送金して江戸の遣方にあてるとある。なお、享保十一年に江戸に送られた大坂御金蔵の御為替金銀の中には、大坂御囲米・大豆払代、古味噌払代など金換算で三万九千四百五十兩余が含まれていたとされる（前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』二五六頁）。

（180） 前掲大野瑞男「享保改革期の幕府勘定所史料―大河内家記録（一）」。

（181） 「甲辰雜記一」（前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四六八・四六九頁）。

（182） 内閣文庫影印叢刊『虫付損毛留書』下（国立公文書館・内閣文庫、一九八〇年）、一八四・一八五・一九二頁。なお、同年十二月十三日の老中評議で大名居城の城詰米の払米が決められ、翌日関係大名に城詰米の大坂回送が命じられた（『同』上、五二〇・五二二頁）。

（183） 前掲『虫付損毛留書』下、二八四・二八五頁および二二一―二二三頁。米で返納される分は、大名からの返納分であつた。なお、享保十八年九月時点では、「西国筋二而御払米可成米高」は二七万五〇〇〇石余で、このうち実際に「西国筋江相廻候米高」は二五万六〇〇〇石余であつたとされる。そして、このうちの一二万石は米で返納させるとしていた（『同』下、二二六・二二七頁）。時期によつて数値に違いがみられるが、おおよそ二六万石前後が西国筋に回送されたとみてよいであろう。

（184） 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」。

（185） 前掲『雜留』二五。「戊申雜綴上」（前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四七六頁）。

（186） 三カ所の御蔵へ返納され、新規に詰米されることになった九万七五〇〇石は、二回の回送指令によつて放出された大名居城の城詰米総計高九万五五二五石とはほぼ合致している（前掲柳谷慶子「江戸幕府城詰米制の機能」。また、西国大名から米納返済された米高一〇万七二〇〇石余のうち、宗対馬守へ渡した残りの分九万七二〇〇石余とも近似している。享保十九年八月時点での大名からの返納米は、二条御蔵詰一万石、駿州清水御蔵詰一万石、大坂玉造御蔵詰二万五六〇〇石余、難波御蔵詰二万七〇〇〇石余となっており、「いまた不納」分三万四六〇〇石余は納入され次第難波御蔵へ詰めるとしている（難波御蔵詰米分のうち一万石は宗対馬守へ渡米）（前掲『虫付損毛留書』下、一二二・一二三頁）。なお、「新規御囲米」の開始の時期は、前掲『雜留』二五、前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」などが享保十八年よりとするのに対し、前掲「御勝手方御定書并伺之上被仰渡候書付」第五冊（六四九頁）

は享保十九年よりとしている。前掲『大坂町奉行所旧記』（下）、四四頁に、「難波村御蔵、享保十八丑年新規ニ出来、同年十二月十一日〆納御座候」とあるので、前者の年を採用した。なお、二条御蔵、駿州清水御蔵の「新規御囲米」の開始時期についても「御勝手方御定書并伺之上被仰渡候書付」では享保十九年からとするが、同様に同十八年からとした。

(187) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。

(188) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。

(189) 前掲『雜留』二五。「戊申雜綴上」(前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四七六頁)。

(190) 前掲『雜留』二五。

(191) 前掲『雜留』二五。なお、任命時期は不明であるが、松安庄右衛門は、安永三年時点では払米御用達となっていた(前掲『大阪市史』第一、一〇三〇頁)。

(192) 「戊申雜綴上」(前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四八五・四八六頁)。なお、「森山孝盛日記」(天明四年二月二十三日の条には「京・大坂・駿府・甲府御城付米并所々城付米此度江戸廻し被仰付」とあって、天明三年末から四年にかけても大坂城詰米が江戸に送られた可能性がある(『日本都市生活史料集成』二、三都篇II、学習研究社、一九七七年、一一二頁)。

(193) 前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』三三七頁。前掲『吹塵録』上、二二三頁の天保十四年「御囲米大豆有高」。なお、天保十四年以降は、「定式御囲米」規定高は七万石(粃一四万石)は変わらないものの、うち粃一万石分は玄米(五〇〇〇石)で貯蔵されるようになった。

(194) 「大坂御城米粃大豆納渡方酉七月〆同十二月迄御勘定目録」(新潟郷土資料館蔵『川村清兵衛家文書』)。

(195) 前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』三四〇〜三四二頁。なお、天保十二年の場合は、二万四七〇〇石余であるが、毎年佐渡から一万石程度が大坂に送られているのでこの分を加えた。

(196) 「金銀米納方御定」(前掲『長坂氏記録』第一六冊)。

(197) 鶴岡実枝子「享保改革期の米価政策からみた江戸の位置」(『史料館研究紀要』第一〇号、一九七八年)。

(198) 前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』二六〇・三六三・三六五頁。

(199) 「御蔵御修復手控」・「丹羽正武手控」(『日本財政經濟史料』第一卷上、二四六・二八〇頁)。前掲『大阪市史』第一

(六九九頁)には、享保十七年十一月に勘定吟味役神谷武右衛門(久敬)が難波村と長興寺村(ここには鉄砲合薬蔵二棟が建てられた)を見分し、大工頭山村與助の縄張りで難波村に米蔵八棟が建てられたとある。また、翌年五月には道頓堀川から新たに船入堀(四四三間半)などが掘られ、同年十二月から城米の出納が始まったとしている。八棟とあるが、十七棟の誤りと思われる。

- (200) 前掲『御勝手方御定書并伺之上被仰渡候書付』第五冊(六四九頁)。前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」では、大坂「新規御囲米」は「玉造・難波御蔵江相詰」とある。しかし、宝暦末年から明和初年頃の「大坂御蔵御詰米之事」(前掲『雜留』二五)、および天明七年「大坂御蔵御詰米之事」(「戊申雜綴上」(前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四八五頁)には、「新規御囲米」について「難波御蔵に詰置候」とある。「新規御囲米」は、玉造・難波両御蔵に収納されたことは確実であるが、その後払戻されたりして減少し、玉造御蔵には詰米・粃されなかった時期もあったことが考えられる。

- (201) 「御蔵御修復手控」・「丹羽正武手控」(前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、二五四・二七九頁)。前掲『大坂市史』第一、七一五・八六九頁。

- (202) 「戊申雜綴上」(前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、四八五頁)。なお、そこでは、天王寺御蔵への年貢米の搬入を宝暦二年よりとするが、前掲『大坂御城代公用人諸事留書』(上)、一九頁では、宝暦二年七月以降の完成、同三年四月の搬入とする。前掲『大坂町奉行所旧記』(下)の「御蔵目付勤方之覚」(四四頁)では、宝暦三年の完成、同年六月二日より搬入とある。諸書によって異なるが、宝暦二年暮れ頃の完成、翌年の四月～六月頃からの搬入とみておきたい。

- (203) 「丹羽正武手控」(前掲『日本財政經濟史料』第一卷上、二七九～二八一頁)。

- (204) 前掲『大坂町奉行所旧記』(下)、四二・四四頁。

- (205) 前掲『大阪市史』第二、一五二頁。「吏徴附録」(前掲『続々群書類従』第七、法制部、一四七頁)では「大坂御米蔵番人八人」とある。

- (206) 前掲『大坂町奉行所旧記』(下)、四五・九四頁。

- (207) 前掲『大阪市史』第二、九九六・九九八頁。

- (208) 前掲『復古記』第三冊、五一九頁。

(209) 前掲『復古記』第一冊(一九三〇年)、五一七・五四三・六九一・七四三頁。『維新史料綱要』卷八(一九三八年)、四二・五四・一〇四・一二九頁。

(210) 『京都の歴史』4(京都市、學藝書林、一九六九年)、五三一・五三二頁。前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一六九頁。「蠹餘一得」四集・巻一(前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊』4、五九三頁)。

(211) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七〇頁。前掲『新修大阪市史』第三巻、三〇六頁では、寛永二年の創設とする。

(212) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七〇〜一七二頁。二条城本丸多門での貯蔵は、後述するように、元禄十二年に大津蔵奉行が廃止され、同時に御蔵老朽化のため同所貯蔵の糯五〇〇〇石がすべて売却されたことにともなう措置であった。

(213) 前掲『京都役所方覚書・下』の「二条御城間数并銀錢銅鉄」(二六二頁)。

(214) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、九六頁。一方、文政三年「二条在番中手留」には、二条御金蔵の戸前や御金箱入れ長持ちの封印に関する手続きが記載される(『古事類苑』政治部三、吉川弘文館、一九七〇年、一〇三九・一〇四〇頁)。文政期には御金蔵が置かれていたものなのか、あるいは御蔵(米蔵)を金蔵として代用していたものなのかは不明。

(215) 「戊申雜綴上」の「二条御城内御用金之事」(前掲『日本財政經濟史料』第五巻上、一四三・一四四頁)。

(216) 前掲『京都の歴史』6、一五・一六頁。

(217) 「甲辰雜記」(前掲『日本財政經濟史料』第一巻上、二七八・二七九頁)。

(218) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、三〇五頁。前掲『温知柳宮秘鑑』巻一(三〇二頁)。

(219) 前掲『京都役所方覚書・下』の「二条御城内外御蔵数」(二六九頁)。

(220) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、九五頁。前掲『京都役所方覚書・上』の「禁裏院中御修理并小堀藤三郎と渡り方」(七三・七四頁)。前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」(前掲『雜留』二五)。

(221) 奥野高廣『皇室御經濟史の研究』後篇(中央公論社、一九四四年)、三一六頁では、禁裏・仙洞御料の年貢米が二条御蔵に納入されるようになった時期を安永期以降と推定している。

(222) 前掲『新訂増補国史大系・徳川実記』第二篇、四七〇頁。

(223) 前掲奥野高廣『皇室御經濟史の研究』後篇(五〇六頁)では、「寛永五年には五味豊直が禁裏御米蔵を管理して居り、同十一年豊直が京都郡代に任ぜられて以後は、御領に関する事務、幕府進献の御費用は悉く彼が司った」とする。

(224) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、九三頁。

(225) 水野石見守(忠貞)が担当したのは、小堀政一が正保四年二月六日死去したのにもない、水野が当時その跡役を継いでいたことによる(前掲『京都の歴史』5、三三二頁)。なお、五味豊直については前掲『京都の歴史』5、三一―三二〇頁参照のこと。

(226) 前掲『京都の歴史』5、三二二―三二八頁。「県令集覧」(前掲『江戸幕府代官史料』所収)によると、京都代官は「御所御蔵方懸り」の手付または手代を二、三人を置いていた。なお、天明四年九月十三日小堀数馬(邦直)は京都郡代に任ぜられている(寛政元年三月二十五日没)(前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十六、一二〇頁)。禁裏經濟についての論考には、前掲奥野高廣『皇室御經濟史の研究』、橋本政宣「江戸時代の禁裏御領と公家領」(『歴史と地理』二七九号、一九七八年)などがある。

(227) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、九五頁。

(228) 前掲『蠹餘一得』三集・巻十(五四八頁)。

(229) 拙稿「元治期の幕府財政」(『横浜商大論集』第二二巻第一号、一九八八年)。

(230) 前掲『蠹餘一得』四集・巻一(五九三頁)。

(231) 前掲『新訂国史大系・徳川実記』第二篇、三四二頁。

(232) 前掲『吏徴別録』下巻(九四頁)。前掲『新訂寛政重修諸家譜』には木村宗左衛門は記載がなく、福島八左衛門(勝重)は「台徳院殿、大猷院殿につかへたてまつり、大津の御蔵衆となり」(第五、八八頁)とする。また、高橋七兵衛(正次)は「台徳院殿をよび大猷院殿につかへたてまつり、二条御蔵の奉行をつとむ」(第十一、一九七頁)とある。一方、大野瑞男氏は、『末吉家文書』によって、福島・高橋は正保期には二条蔵奉行であったとしている(前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』一六四・一六五頁)。

(233) 「京都町奉行所書札覚書」(前掲『京都町触集成』別巻一、三〇・三七・三八頁)。

(234) 前掲『新訂国史大系・徳川実記』第六篇、三六四頁。

(235) 前掲『大日本近世史料・柳営補任五』(三〇頁)、前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十一(一九七頁、高橋次郎左衛門)。

『同』第二十一(四一頁、本多十右衛門)。前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七八・一七九頁。

(236) 前掲『吏徴別録』下巻(九四頁)。

(237) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十八、二二八頁。前掲『大日本近世史料・柳営補任四』二七七頁では、高井藏人に
ついて、享保七年閏七月六日から一年間の二条御藏飯役と記すが、享保六年閏七月六日からの誤り。

(238) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十五、三〇六頁。

(239) 前掲『大日本近世史料・柳営補任五』三〇頁。

(240) 前掲『吏徴別録』下巻(九四頁)。

(241) 前掲『憲教類典』二之五(二四〇頁)。

(242) 前掲『吏徴附録』(一四七頁)には、二条御藏手代七人、見習二人と記される。

(243) 前掲『京都役所方覚書・上』(七四頁)・『同・下』(一七〇・一七二頁)、前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七八・一七九・四八五頁。

(244) 前掲『京都役所方覚書・下』(一七二頁)。前掲『竹橋余筆別集』巻七(五六五頁)。

(245) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七九頁。前掲『竹橋余筆別集』巻七(五六五頁)。

(246) 前掲『新訂国史大系・徳川実記』第六篇、三五一・三六四・三六五頁。内藤耻叟編次『徳川十五代史』第六編(博文館、一八九三年)一五四頁。二条御藏目付の人数について、『徳川実記』第六篇(三五一頁)には「二条・大津の蔵目付、今迄は在番の大番士四人づゝにて奉はり」とある。しかし、『大御番頭格式之留』(前掲『古事類苑』官位部三、一〇三〇頁)には、「先規より両組御蔵目付一人づゝ、兩人申渡置」とあり、二条・大津御蔵目付は各二人ずつであった可能性が高い。なお、『京職の与力』が具体的に何であったのか明示されていないが、大坂御蔵の例などから京都所司代や二条城番、京都町奉行の各与力であったと考えておきたい。さらに、『徳川実紀』第六篇(三六四・三六五頁)では、「二条の官稟も代官の所管たらしむれば、京職の與力官稟の考察に出るに及ばず」と、元禄十二年四月二十二日に二条御蔵が京都代官の所管となったと記す。しかし、二条蔵奉行は継続して任ぜられており、延享二年の「御勝手方勤方」でも「二条御蔵納払之事、是は壺ヶ月納払帳面、彼地御蔵奉行より毎月差越候に付、前月之有高と見合相改候事」とある(前掲『日本財政経済史料』第八巻下、五八八頁)。従って、二条御蔵は引き続き二条蔵奉行の管理下にあったものと考えられる。

(247) 前掲『日本財政経済史料』第八巻下、六五九頁の延享二年「諸帳面方勤方」には、二条御蔵の出目米・欠米などについて、「所司代與力立合相改、京都町奉行添状に引合改候事」とある。

(248) 「温知柳宮秘鑑」巻一（前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊』5、三〇一頁）。同書では、「二条御蔵小揚六拾人、外頭四人」とし、その賃米が「亥之閏五月ニ相究ル」とある。小揚は、元禄三年に六〇人（ほかに頭四人）から三五人（ほかに頭三人）に変更される（前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七九頁）。したがって、同史料は天和三年から元禄三年までの間の状況を示すものであったことが判明する。

(249) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七四・三〇四頁。

(250) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、三九六頁。

(251) 「甲辰雜記」の「二条御蔵納有之御代官皆濟期月壹ヶ月迄之儀書付」（前掲『日本財政経済史料』第五巻上、三三・三四頁）。

(252) 「覚」（前掲『長坂氏記録』第一六冊）。

(253) 前掲『吹塵録』上、二二六・二二七頁。なお、当初丹波国は割賦国ではなかったが、臨時の出費があつたとして、翌年追加割賦された。

(254) 前掲『京都役所方覚書・下』（二七〇頁）。「二条御蔵御詰米之事」（前掲『雜留』二五）。

(255) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七四頁。

(256) 「公卿補任正親町」・「百一録」（『古事類苑』官位部一、吉川弘文館、一九六七年、六五七・六五八頁）。『維新史料綱要』巻七（東京大学出版会、一九八三年）、四一五頁（慶応三年十二月九日の条）。前掲「蠶餘一得」三集・巻十（前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊』4、五三七頁）には「兩傳奏御役料米各四十石、儀奏五人御役料米全上」とあるが、伝奏の役料が誤っている。なお、武家伝奏の機能については、大屋敷佳子「幕藩制国家における武家伝奏の機能」（二）・（二）（『論集きんせい』第七・八号、一九八二、三年）が詳しい。

(257) 「議奏歴」（前掲『古事類苑』官位部一、六四三頁）。

(258) 前掲『古事類苑』官位部三、一〇三〇・一〇三一頁。「癸卯雜記二」の「覚」（前掲『日本財政経済史料』第二巻上、四三二頁）。

(259) 前掲『吏徴別録』上巻（五五頁）。

(260) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第二、一三八・一三九頁。前掲『増補新訂国史大系・徳川実記』第一篇、七四頁（慶長八年二月十二日の条）。

(261) 前掲『増補新訂国史大系・徳川実記』第二篇、二〇四頁。

(262) 牧野佐渡守（親成）に与力・同心が付属したのは明暦元年八月二十六日のことであった（前掲『増補新訂国史大系・徳川実記』第四篇、一二九・一五三頁）。

(263) 前掲『日本財政経済史料』第四卷上、二四〇頁。

(264) 松平紀伊守（信庸・信慈）に対しては当初役料の支給がなかったが、宝永三年十月に役料一万俵が支給された。また、「但当年分者於江戸請取候間、從來亥ノ年可被相渡候」とあつて、以後も支給が継続された可能性がある（前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、四三四・四三五頁）。さらに、前掲『新訂寛政重修諸家譜』第一、一三一頁には、宝永三年八月二十五日「在職の料として稟米一万俵」が支給されたとある。また、その後任の水野監物（忠之）には正徳四年九月六日に「官料一万苞」が支給されている（前掲『増補新訂国史大系・徳川実記』第七篇、三九五頁）。役知一万石の加増については、文化十二年四月十六日任命の大久保加賀守（忠直）と文政元年八月二日任命の松平和泉守（乗寛）の二人についてはこれが認められている（「御役人代々記十八」（前掲『日本財政経済史料』第四卷上、二三七頁））。

(265) 前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、三四三頁。

(266) 前掲『京都の歴史』5、六九〜七一頁。前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一九〇頁。

(267) 前掲『増補新訂国史大系・徳川実記』第五篇、七二頁（寛文十年五月朔日の条）。「日記」（前掲『日本財政経済史料』第四卷上、三三八頁）では、宮崎・雨宮兩人に与力一五騎・同心三五人ずつが付属していたが、寛文十年三月十八日より与力二〇騎・同心五〇人ずつとなったとする。一方、前掲『京都御役所向大概覚書』上巻（一九二頁）では、寛文五年に与力・同心が増員され、さらに寛文八年にも増員されて与力二〇騎・同心五〇人ずつが付属するようになったとする。諸書によって記載が異なるが、ここでは『徳川実記』の記述に従った。

(268) 「御役人代々記十八」（前掲『日本財政経済史料』第四卷上、四〇三頁）。前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、九一頁。

(269) 前掲『吏徴附録』（二四五頁）。前掲『増補新訂国史大系・徳川実記』第三篇、三二七〜三二九頁。「吏徴附録」（二四五頁）および前掲『吏徴別録』上巻（七〇頁）では、設置時は一組与力五騎・同心二〇人で、のち与力一〇騎・同心四〇人

となったとする。前掲『新訂国史大系・徳川実記』第五篇（二八二頁）には、延宝六年三月晦日の条に「禁裏附付属の与力五騎、足軽十人をまして、与力十騎、足軽四十人たらしめらる」とある。前掲「柳宮秘鑑」巻四（八八頁）には、「禁裏附式人、役料千五百石、与力十キ・同心四十人ツ、」とある（役料一五〇〇石は一五〇〇俵の誤りか）。

- (270) 前掲「吏徴別録」上巻（七〇頁）。なお、「柳宮秘記七」の享保八年六月十八日付「遠国御役人員数并役高組支配」(前掲『日本財政経済史料』第二巻上、三七八頁)にも、「禁裏附式人千石高、御役料千五百石、与力拾騎・同心四拾人宛」とある。

- (271) 前掲『新訂国史大系・徳川実記』第三篇、三二九頁。前掲「徳川禁令考」前集第一（一九五九年）、九号（一三頁）には、榊原三郎右衛門とあるが、前掲『新訂寛政重修諸家譜』第二、二七八頁では榊原一郎右衛門となっている。

- (272) 一組同心二〇人のうち、切米は二人が一〇石五斗ずつ、扶持方は一人が三人扶持で、残りが切米七石ずつ・扶持方二人扶持ずつ支給された。

- (273) 前掲『新訂国史大系・徳川実記』第五篇、五九八頁。

- (274) 柴田日向守組は、同心二〇人のうち、切米は一人が一〇石五斗ずつ、六人が七石ずつであり、扶持方は二人が三人扶持で、残りが二人扶持ずつであった。また、徳永備前守組は、同心二〇人のうち、切米は一人が一〇石五斗ずつ、四人が七石ずつ、一人が一四石であり、扶持方は全員が二人扶持ずつの支給であった。なお、正徳四年頃には、与力は各組三騎から四騎に一騎が増加している（前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七五・一七六頁）。

- (275) 「柳宮秘記七」(前掲『日本財政経済史料』第二巻上、三七八頁)。なお、明和七年に、仙洞附浅野隼人(長壽)・中西主水(元義)の両人は、持高三〇〇〇石のため役料五〇〇俵の支給となったが(「御触書新卅九」(前掲『日本財政経済史料』第二巻上、四〇八頁)、前述の禁裏附の例からすると、仙洞付にも享保期から三〇〇〇石以上の者が就いた場合には役料を減額する規定があったものと思われる。

- (276) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十七、三六七頁。

- (277) 前掲「東武實録」巻第十二（二三九頁）。

- (278) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十七、一三五頁(春日)。「同」第九、二八〇頁(柘植)。

- (279) 前掲『新訂国史大系・徳川実記』第二篇、三四二頁(寛永二年四月二日の条)。

- (280) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十七、二七頁。本稿では、二条城の門番を「城番」と呼称しておくが、二条城代・

二条城番・二条定番の呼称については、その該当役職が必ずしも一定していない。ここではとりあえず三つの説を紹介しておくことにする。①前掲『大日本近世史料・柳宮補任五』二七頁では、「二条御城代 是は布衣也、与力三拾人属ス、元禄十二卯四月七日山岡七右衛門辞后御役止ム、西御門番式人被仰付、与力・同心二所ニ成り、廿日代り東西御門番勤、但西御門番二条御城番ト号、往古ハ老人宛、同心三十人属ス、山岡七右衛門跡江御定番式人被仰付」と記す。そして、柘植三之丞や鈴木市兵衛を二条定番としたうえで、「是ヨリ御定番相止ム、市兵衛跡柘植三之丞・美濃部彦左衛門式人二条御城御門番之頭被仰付」とする。一方、②前掲『徳川禁令考』前集第四（四六頁）には、「慶長十年二条東御門番并西御門番各一人ヲ置ク、此役之ヲ二条御城代ト号ス、元禄十二年東御門番ヲ廃シ、西御門番二人ヲ置キ御城番ト改称ス」とある。さらに、③前掲『古事類苑』官位部三、一二五四頁の京都役人の項では、「城代は寛永二年ニ始テ之ヲ置キ、元禄中之ヲ廃ス、門番頭ハ又城番トモ云ヒ、与力・同心ヲ率井テ城門ヲ警衛ス、初ハ一人ナリシガ、城代ヲ廃セシ頃ヨリ二人を置キ、合力米百二十石宛ヲ給ス」と記す（さらに、二条御門番頭については、「柳宮秘鑑」・「東職記聞」などの記載から、「按ズルニ、門番頭ハ又城番若シクハ定番トモ云ヒシナリ」とする（『同』官位部三、一二八六頁）。なお、近世初期には城代のことを城番、常番と記す例がいくつかみられる。例えば、元和五年十月から駿府城代をつとめた渡辺山城守（茂）について、「是ヨリ先キ駿府ノ城常番ヲ勤ム」と記され（前掲『東武實録』卷第十二（二三九頁）、また、大坂城代阿部備中守（正次）について、「営中御日記」（前掲『古事類苑』官位部三、一三一九頁）に「寛永三年五月五日、阿部備中守（正次）於御前御城番被仰付之」・「今度備中守（阿部正次）大坂御番常番被仰付之」とある。

(281) 前掲『新訂国史大系・徳川実記』第三篇、一四四頁。

(282) 元禄十二年四月七日の条には、「大番美濃部彦左衛門茂濟、柘植三之丞宗英、二条門番頭命ぜられ、これより二員になさる」とある（前掲『新訂国史大系・徳川実記』第六篇、三六三頁）。

(283) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十八、二頁。

(284) 正徳期に二条門番之頭を勤めていた小宮山伝右衛門（昌豊）と曲淵十左衛門（景政）の場合、与力一〇騎・同心二〇人がそれぞれ付属したが、与力の切米は六一石三斗五升ずつで両組同じであったが、同心への切米扶持方は少し違いがみられた。小宮山伝右衛門組の場合、切米は同心一二人が一〇石ずつで、八人が一三石六斗ずつ、扶持方は一二人が三人扶持ずつで、八人が扶持方なしであった。一方、曲淵十左衛門組の場合、切米は同心一三人が一〇石ずつで、

六人が一三石六斗ずつ、一人が七石、扶持方は一四人が三人扶持ずつで、六人が扶持方なしであった（前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七六頁）。

(285) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十九、二四七頁。前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、一七六頁。

(286) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第十九、三七二頁。前掲『大日本近世史料・柳宮補任五』三三三頁。

(287) 前掲『憲教類典』二之五（二四〇頁）。

(288) 前掲『東武實録』卷第十二（三三九頁）。寛永十年五月十九日には、二条在番の番士三〇人に対し二〇〇石ずつの加増があつた（切米取りの者も地方に直して支給された）（『天寛日記抜抄二』（前掲『日本財政経済史料』第二巻上、四九六頁）。また、前掲『新訂国史大系・徳川実記』第二篇、三四二頁には、渡辺山城守（茂）の時、「大番三十人を支配す。是を三十人番といふ。番士は一年づつにて交代せしむ。同心三十人あづかる」とあり、番士の交代そのものは寛永十二年より前から行われていたことがわかる。

(289) 「癸卯雜記二」（前掲『日本財政経済史料』第二巻上、四三二〜四三四頁）。前掲『雜留』二五。

(290) 前掲『新訂国史大系・徳川実記』第五篇、九六頁。

(291) 前掲『京都町奉行所書札覚書』（二七・二八頁）は、寛文九年に大津蔵奉行から二条大番衆合力が支給されていたことを示す（但し、この年は合力米ではなく銀子渡りであり、大坂御金蔵から大津蔵奉行が受け取って支給した）。

(292) 前掲『新訂国史大系・続徳川実記』第四篇、三六八頁。前掲『徳川禁令考』前集第四、一九九三号（五三三頁）では、文久二年閏八月九日となっているが、閏八月十九日の誤り。「泰平年表」五編三（前掲『古事類苑』官位部三、一二八八頁）。

(293) 大坂目付については、前掲『吏徴附録』（一三三・一三四頁）、前掲『大阪市史』第一（二八四頁）、『同』第二（一五〇・一七〇頁）、「仕官格義辨」（前掲『古事類苑』官位部三、三四〇・三四一頁）、前掲『柳宮秘鑑』卷之一（五二頁）、前掲『新訂国史大系・徳川実記』第二篇（四三六頁）、『同』第四篇（五〇三頁）、「癸卯雜記二」の「覚」（前掲『日本財政経済史料』第二巻上、四三二頁）、前掲『京都御役所向大概覚書』上巻（一八一頁）による。なお、史料によっては、年月に異同・誤りがある。ここでは、異同のあるものについては『新訂国史大系・徳川実記』に従った。

(294) 「大御番格式之留」（前掲『古事類苑』官位部三、一〇三〇頁）。

(295) 「甲辰雜記三」（前掲『日本財政経済史料』第二巻上、四三七頁）。

(296) 延宝四年「所々御城米」(姫路市立図書館蔵『酒井家文書』)、前掲「憲教類典」五之九(五三頁)。

(297) 前掲大野瑞男「享保改革期の幕府勘定所史料―大河内家記録(一)」。

(298) 「御勝手方定書下」(前掲『日本財政経済史料』第一卷上、四七三・四七四頁)。前掲『雜留』二五。前掲大野瑞男「享保改革期の幕府勘定所史料―大河内家記録(一)」。

前掲同「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。

なお、二条「定式御囲米」払代は、御為替三井組などにより九〇日限りで江戸に送金された(「御用留」三井文庫所蔵、三四二番)。

(299) 「御勝手方定書下」(前掲『日本財政経済史料』第一卷上、四七三・四七四頁)。前掲『雜留』二五。前掲大野瑞男「享保改革期の幕府勘定所史料―大河内家記録(一)」。

前掲同「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。

二条・大津御米代御用留・「御用留」(三井文庫所蔵、別一七〇二・三四二番)によると、二条「新規御囲米」・大津御蔵米の払米代は、御為替三井組が銀一貫目につき御入用七匁宛で八〇日限りで大坂御金蔵へ納めていたが、安永二年より為替送金に切り替えられた。

(300) 「戊申雜綴上」の「二条御蔵御詰米之事」(前掲『日本財政経済史料』第一卷上、四七二・四七三頁)。

(301) 前掲『吹塵録』上、二二三・二二六・二二九頁。

(302) 前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。前掲『吹塵録』上、二二六・二二九頁。なお、「文久元年の幕府財政史料」には、「二条御囲米」米一万石・粃一万三〇〇〇石とあるが、粃一万三〇〇〇石は「定式御囲米」・「新規御囲米」ではなく、これとは別の「二条御蔵御囲粃」であった可能性がある(前掲『吹塵録』上、二二九頁)。

(303) 前掲鶴岡実枝子「享保改革期の米価政策からみた江戸の位置」。

(304) 前掲『復古記』第一冊、七四二頁。前掲『維新史料綱要』卷八、一二九頁。

(305) 『新修大津市史』近世前期(一九八〇年)、一八四・一九一・四七四頁。

(306) 前掲『新修大津市史』近世前期、二八二・二八八、四六八・四七一頁。『草津市史』第二卷(一九八四年)、一〇七頁。

(307) 前掲「温知柳宮秘鑑」卷一(三〇八・三〇九頁)。前掲『京都御役所向大概覚書』下卷、三四二・三四三頁。「官中秘策」卷之三十三(前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊』6、一〇〇三頁)。

(308) 前掲『新訂国史大系・徳川実記』第五篇、九六頁。前掲『京都御役所向大概覚書』下卷・三四三頁、および前掲「京

都役所方覚書・上」の「京都諸組并御役料」(九一〜九三頁)により、元禄六年頃までは従来通り大津御蔵からの渡りであったことが確認できる。

- (309) 前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、三四三頁。なお、前掲「温知柳営秘鑑」巻一(三〇八頁)および前掲「官中秘策」巻之三十三(一〇〇三頁)では、糯五一〇〇石と記す。

- (310) 前掲「温知柳営秘鑑」巻一(三〇九頁)。

- (311) 前掲「京都役所方覚書・下」(二七六頁)。前掲『京都御役所向大概覚書』上巻、三九六頁。『同』下巻、三四三頁。前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。

- (312) 前掲『長坂氏記録』第一六冊。

- (313) 前掲『京都町触集成』第二巻、一八頁。

- (314) 前掲「京都役所方覚書・下」(二七六頁)。前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、三四五頁。

- (315) 延宝四年「所々御城米」(姫路市立図書館所蔵『酒井家文書』)。年号不知(貞享四年)「所々御城米并城付御米高」・宝暦元年(天明三年とあるが内容は宝暦元年)「諸国御詰米」(前掲「憲教類典」五之九、二八・五三・五四頁)。

- (316) 前掲「憲教類典」五之九(五三・五四頁)。

- (317) 前掲『雜留』二五。

- (318) 前掲『吹塵録』上、二二三頁。前掲拙稿「文久元年の幕府財政史料」。前掲『日本財政経済史料』第八巻下、七七二頁。

- (319) 前掲『長坂氏記録』第一六冊。

- (320) 三井文庫所蔵、別二二四六番。

- (321) 前掲拙稿「元治期の幕府財政」。

- (322) 「観音寺文書」(東京大学史料編纂所所蔵影写本)。藤田恒春「近世前期の幕府御蔵奉行について」(横田健一先生古稀記念『文化史論叢』下、創元社、一九八七年)。

- (323) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第五、八八頁。前掲『断家譜』第二、二四五頁。

- (324) 前掲「京都町奉行所書札覚書」(二七頁)。

- (325) 大津代官は、近江代官衆の一人であり、慶長・元和期は京都所司代や大久保長安の指揮下にあったと考えられてい

る。寛永期から寛文八年までは五味豊直・小堀政一らの五畿内郡代・八カ国郡代（代官奉行）の、また、同八年に京都町奉行が成立して以降は京都町奉行の支配を受けた。しかし、享保期以降は幕府勘定所の支配が強まり、享保十九年には、公事訴訟を除き、取箇・在方普請・夫食貸その他地方御用については以後町奉行へ達するに及ばず、直接勘定奉行の支配をうけるよう改められた（前掲『京都の歴史』5、三二一～三二五頁。前掲『新修大津市史』近世前期、二八〇～三〇四頁。「御勝手方御定書并伺之上被仰渡候書付」第三冊（前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊』30、五八八頁）。

(326) 前掲『増補国史大系・徳川実記』第六篇、三六四・三七八・三七九頁。布施については、前掲『新訂寛政重修諸家譜』第二十二、四〇〇頁（『徳川実記』では布施庄右衛門となっているが、『新訂寛政重修諸家譜』では庄左衛門。ここでは『新訂寛政重修諸家譜』の記述に従う）。長坂は、『同』第十九、八二頁。藤沼は、『同』第二十一、一六一頁。

(327) 前掲『吏徴附録』（一四七頁）。前掲『京都役所方覚書・下』（一七六・一七七頁）。また、大津蔵奉行が廃止された後も、大津御蔵番三人・小揚八〇人が大津代官に付属した（『京都御役所向大概覚書』下巻、三四四・三四五頁）。

(328) 前掲『京都御役所向大概覚書』下巻、三四三頁。『同書』では「大津御蔵目付、二条在番之御番兩人宛年々大津町統松本村分屋敷ニ小屋相建」とあり、元禄十二年における二人の大津御蔵目付の名前が判明する。なお、前掲『増補国史大系・徳川実記』第六篇、三五一頁では、二条在番の番士の中から任命された二条・大津御蔵目付は、元禄十一年十二月に「京職の与力」に代わり、翌十二年四月にはそれも廃止されたと記される。しかし、延享二年の「諸帳面方勤方」には、大津御蔵の出目米・欠米について、「京都町奉行與力立合相改、印形書付引合候事」とあって（前掲『日本財政経済史料』第八巻下、六六〇頁）、大津御蔵が大津代官支配となった後は、京都町奉行与力による一定の監察があったことがわかる。

(329) 前掲『増補国史大系・徳川実記』第六篇、三六四頁。

(330) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」。

(331) 前掲『日本財政経済史料』第四巻上、五四四頁。

(332) 前掲『日本財政経済史料』第八巻下、五八九頁。

(333) 『国史大辞典』（吉川弘文館、一九八〇年）の「大津代官」の項では、享保七年から大津代官所は廃止され、安永元年に石原清左衛門が大津代官に任命されたと記述されるが、誤りであろう。延享二年の「御勝手向御用定」（前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録（一）」）には、大津御蔵米の収納・支払いは大津代官が担当したとあり、

また、同年の「諸帳面方勤方」（前掲『日本財政経済史料』八巻下、六五九頁）でも、「大津御蔵御勘定帳」は「御代官仕上」と記される。さらに、宝暦七年には代官石原清左衛門（正顯）が大津御蔵を支配していたことが判明している。なお、『新修大津市史』では、享保八年六月に大津代官古郡文右衛門（年明）が職を辞したあと同人の支配地を引き継いだのは、桜井孫兵衛（政能）・小野惣左衛門（則正）・玉虫左兵衛（茂雅）・鈴木小右衛門（正興）らであり、桜井・小野・鈴木らは「大津御陣屋」に入ったとある。また、寛保三年から安永五年二月までは石原清左衛門（正顯）、同年六月からは正顯の二男の正範が清左衛門を襲名し大津代官職を引き継いだとしている（『同』近世後期、一九八一年、三五～三九頁）。

(334) 前掲『新修大津市史』近世後期、四九七・四九八頁。前掲『維新史料綱要』巻八（四八頁）では、石原清一郎への旧管地支配の認可を一月十一日とするが、前掲『復古記』第一冊（六二頁）では一月十五日以降とする。

(335) 『高槻市史』第二巻・本編II、一二二頁。『藩史大事典』第5巻・近畿編（雄山閣、一九八九年）、二一〇頁。

(336) 『島本町史』本文篇（一九七五年）、三三二・三三三頁。前掲藤田恒春「近世前期の幕府御蔵奉行について」。

(337) 天坊幸彦『高槻通史』（高槻市役所、一九五三年）八一頁では、「この倉庫（幕府直轄の「二万石御蔵」）はもと富田庄に置かれたものであつて、庄の大農紅屋市郎右衛門が御蔵十人衆を率いて司つていたのであつた」（括弧内は引用者）とする。

(338) 前掲『吏徴附録』（一四二頁）。「乙巳雜記下」（前掲『日本財政経済史料』第四巻上、一八八頁には伏屋玄介とあるが兵介の誤植）。前掲『新訂寛政重修諸家譜』第二十二、三八〇頁では、伏谷彦助（胤定）について、「寛文八年十二月十日遺跡を継ぎ、後支配勘定となる。天和元年十一月二十一日班をすゝめられて高槻の御蔵奉行に転ず。稟米百俵月俸五口、この日五十俵を加増せられ、すべて稟米百五十俵を賜ひ、月俸はおさめらる」と記述される。

(339) 前掲『新訂寛政重修諸家譜』第二十一、四一頁。なお、前掲『新訂国史大系・徳川実記』第二篇、五二九頁では、本多寛右衛門顯房となっている。ここでは『新訂寛政重修諸家譜』の表記に従う。

(340) そのほか、『新訂寛政重修諸家譜』において、寛永期から正保期頃に高槻蔵奉行をつとめたと記述されるのはつぎのような人々である。①田中一郎右衛門（某）（第二十二、三七二頁）。②本多角右衛門（頭房）の子角右衛門（寛右衛門・頭直）（第二十一、四一頁）。③仁科勘右衛門（信道）（第三、二九六頁）。④藤井要右衛門（六兵衛、勝重）（第十四、八〇頁）。⑤その子の藤井勘兵衛（勝忠）（同）。しかし、これらの人々の中には、年貢勘定目録などで未だ確認さ

れていない者も存在する。高槻蔵奉行であったかどうかはさらに検討が必要であろう。なお、「末吉文書」では、寛永十三年の年貢勘定目録から高槻蔵奉行が登場するが、同十一年にはすでにおかれていたことは確実である。そして、さらに寛永五年まで遡ることは可能と思われる。また、前掲『新訂増補国史大系・徳川実記』第二篇（五二九頁）では、寛永八年に本多寛右衛門顯房が高槻蔵奉行となったと記す（なお、『新訂寛政重修諸家譜』では前記のように頭房とある）。

(341) 前掲大野瑞男『江戸幕府財政史論』一六五～一六七頁。前掲「京都町奉行所書札覚書」（三八頁）。

(342) 前掲「京都町奉行所書札覚書」（三八・四〇頁）。

(343) 前掲「高槻市史」第四卷（一）・史料編II（一九七四年）、七一四頁。

(344) 前掲「温知柳營秘鑑」卷五（三四五頁）。

(345) 前掲大阪市史編纂室所蔵『藻井家文書』のうち「年々御免定写覚」。

(346) 前掲「高槻市史」第四卷（一）・史料編II、六八〇・六八一頁。

(347) 前掲「藤井寺市史」第六卷・史料編四・上、一四八～一八二頁。

(348) 前掲「新修大阪市史」第三卷、一八一・一八七・三〇七・三〇八頁。

(349) 元和元年九月十八日、柱本茶船の者たちは代官北見五郎左衛門から命じられて高槻城より兵糧二万石を運送したという（『枚方市史』、一九五一年、七〇九頁）。

(350) 前掲「京都御役所向大概覚書」下巻、三九三頁。

(351) 最後の高槻蔵奉行の一人であった伏谷二郎左衛門（胤定）について、前掲『新訂寛政重修諸家譜』には、「元禄四年五月其役を廃せらるゝにより務をゆるされ、御勘定奉行の支配となり、のち小普請となる」と記す（第二十二、三八〇頁）。

(352) 延宝四年「所々御城米」（姫路市立図書館所蔵『酒井家文書』）。年号不知（貞享四年）「所々御城米并城付御米高」

（前掲「憲教類典」五之九（五三頁））。「後編柳營秘鑑」卷之三（前掲「内閣文庫所蔵史籍叢刊・5」、一九四～一九七頁）。前掲「温知柳營秘鑑」卷五（三四六頁）。なお、御蔵御普請入用については、河内・摂津・和泉三カ国に賦課された。

(353) 「往古より御用御役車相勤候留」（前掲『史料京都の歴史』16・伏見区、三六二頁）。

(354) 前掲「温知柳營秘鑑」卷五（三四六頁）。

(355) 前掲大野瑞男「延享期の幕府財政史料―酒井家記録(一)」。宝暦元年「諸国城付米」(前掲「憲教類典」五之九、三〇頁、史料には天明三年とあるが内容は宝暦元年)。

(356) 「田能村宮座記録」(前掲「高槻市史」第四卷(二)・史料編Ⅲ(一九七九年)、六九三頁)。

(357) 前掲「史料京都の歴史」16・伏見区、六六三頁。

(358) 前掲「新修大阪市史」第三卷、一八一頁。

(359) 前掲松尾美恵子「大坂加番制について」。

(360) 前掲天坊幸彦「高槻通史」(九六・九七頁)では、「二万石御倉は元和元年本丸や二ノ丸と一緒にでき、享保のころに廃止となっている。この御蔵には高槻蔵奉行というものがあつて寛永八年十二月に本多寛右衛門顯直がこれに任命されている。併し費用がかかること甚しいので、後一万石を枚方に移し、さらに寛文年中全部を大阪に移してしまつた」とする。事実誤認の箇所があるが、ここにも「枚方」が登場している。また、前掲大野瑞男「江戸幕府財政史論」七六頁にも、「畿内では二条・大坂・大津をはじめ高槻・枚方・堺などの諸米蔵」と「枚方」米蔵の名がみえる。

(361) 「野洲町史」第二卷・通史編2(一九八七年)、六二―六七頁。観音寺について、『新訂増補国史大系・徳川実記』寛文元年四月五日の条では、「近江国芦浦観音寺退休し、弟子式部卿寺職をつがしめ、代官の事もこれまでのごとく奉はるべしと命ぜらる、此観音寺といふは、慶長のころより浮屠にて代々勘定頭の所屬となり、その地の代官を勤めしが、元禄中に其職を奪はれて、全く浮屠になりて東叡山に属せり」と記す(第四篇、三八五・三八六頁)。また、『観音寺由緒』などでは、観音寺住持は代々船奉行を勤めてきたが、貞享二年観音寺朝舜の時に「元御代官所御勘定相滞りこれ有り」との理由から船奉行職を罷免されたとしている(前掲「新修大津市史」近世前期、四五〇頁)。

(362) 前掲藤田恒春「近世前期の幕府御蔵奉行について」は、この払米の経過を考察している。

(363) 前掲大野瑞男「江戸幕府財政史論」一一四・一一五頁。

(364) 前掲「野洲町史」第二卷・通史編2、六七・六八頁。

(365) 前掲「憲教類典」五之九(五二頁)。

(366) 前掲「竹橋余筆」卷一(一三四頁)。

(367) 前掲「憲教類典」五之九(五二頁)。